

鳩になって

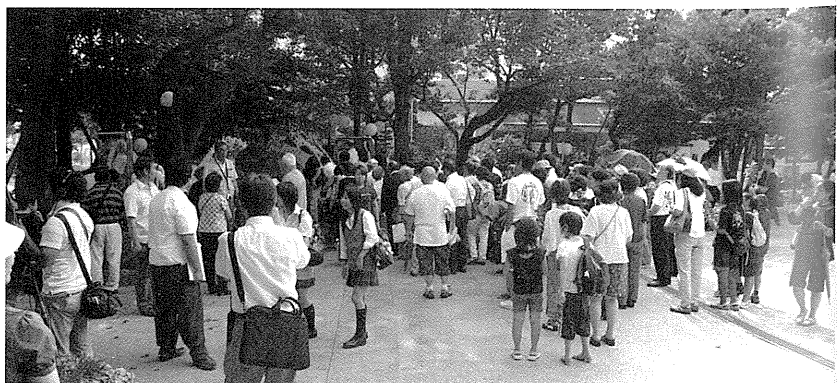


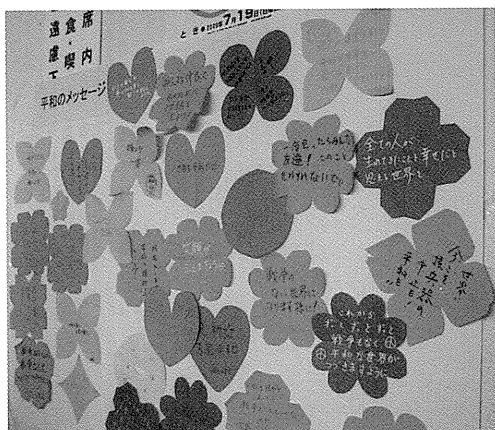
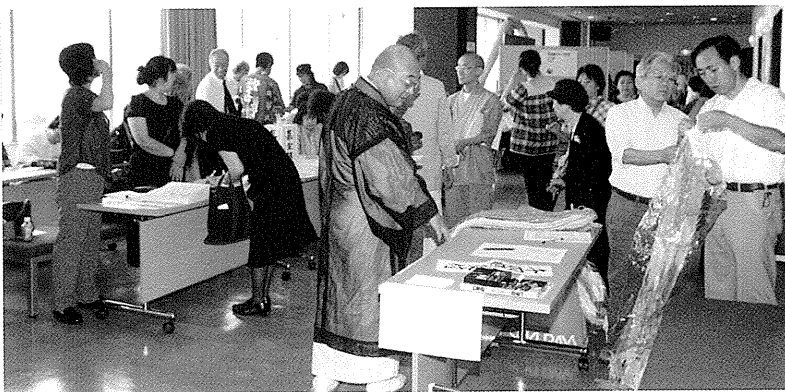
江戸川

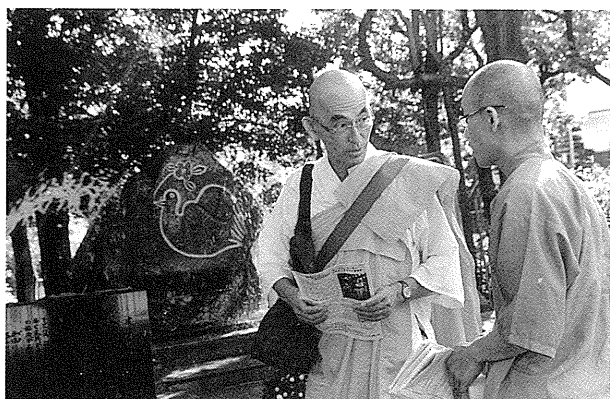
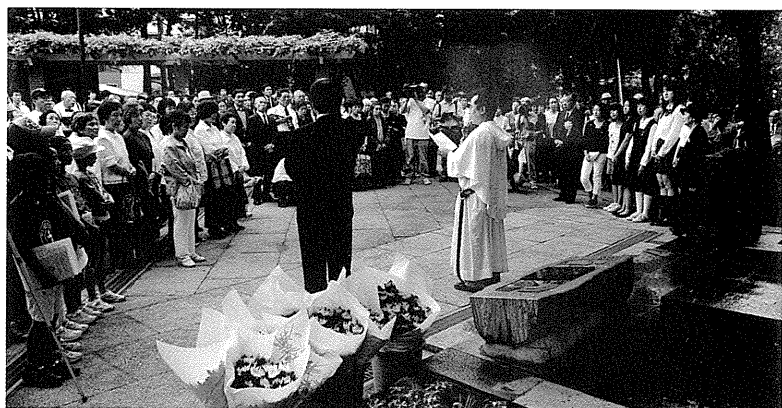
被爆者の証言 第5集













鳩になって

江戸川
被爆者の証言 第5集

◆証言

はじめに
あいさつ
発行によせて
銀林美恵子
多田正見
18 14 12

被爆体験について	長崎被爆	たった一人残されて	八月九日	虫けらのように燃やされて	本当に悪夢のような……	核廃絶と戦争を考える	どんな理由があっても、	戦争は絶対におこしてはなりません	語り名草は被爆者の義務	国民学校生、ぼくの八月九日	悲惨な状況下の救援活動	五才のときでした	夢の中で泣いていたお姉ちゃん	姉をなくして	「特攻まで三日を残して生きのびた」	すべて強い強い放射能になって	絶対に戦争反対	今も脳裏から消えない	終生貫く「戦争は嫌だ」
広島	長崎	広島	広島	長崎	長崎	長崎	長崎	長崎	長崎	長崎	長崎	長崎	長崎	長崎	長崎	長崎	長崎	長崎	長崎
山崎竹雄	永野慶子	関口智恵子	鹿嶋レイ子	佐藤静恵	山下ヒサエ	野村寛一	池田須恵子	高橋啓介	岡澤瑞穂	加藤貞夫	中村誠治	民里八枝子	今宮良介	高橋清	藤内義雄	宮内良雄	佐藤美博	奥田豊治	
24	25	26	28	30	33	36	37	39	41	46	48	50	52	55	56	58	60		



◆若い世代のメッセージ

内臓がほとんどなくなつた体で
二度と原爆が落ちないよう
この世のものと思えないほど
姉は今も行方不明
急逝した張本俊策さんの体験
ユキエちゃんのこと
夫の手記・父と次兄との別れ
「兵隊さん、探してください」
人間はいつでも悪魔になる
原爆の子

長崎 嶋口信子 64
広島 中岡喜美子 66
長崎 道下イツ子 67
広島 菊野孝人 69
広島 西本宗一 71
広島 畑谷由江 74
長崎 大楠栄子 76
広島 榑木実 77
長崎 高比良毅 79
広島 貫泰夫 81

みんなで折った千羽鶴

沖縄旅行―命について考えたこと
「大変なことがあったんですね」
戦争は人の命を奪う恐ろしいこと
知りたいッ！ 知る必要がある！
私たち若者が平和の芽を育てる
広島を決して忘れない

二之江第二小学校 86
江戸川高等学校 87
二之江小学校 91
東葛西小学校 93
上一色中学校 95
瑞江第三中学校 98
江戸川高等学校 102

◆平和への思いを語り合う―追悼式後の交流会の記録―

◆葛西祭りで、「追悼碑」も「被爆二世アオギリ」も「はとのひ おりがみ」も
それぞれの役目を果たしました。 西本宗一 109

◆千羽鶴献納者名簿

◆追悼碑に眠る人々

追悼文・親江会前会長浄園満成さんの逝去を偲んで 118

浄園さんの証言 爆心地浦上へ 122

◆江戸川平和コンサート、ヒロシマ・ナガサキ 鳩になつて 124

■区内の平和への取り組み

江戸川憲法を読む会

128

九条の会

130

国民平和大行進

131

世代を結ぶ平和の像の会

132

泉福寺平和コンサート

135

反核・反戦・キャンドルデモ

136

平和のための戦争展

137

■学校の平和教育

地球のみんなが豊かな気持ちで暮らせるよう

加納治子

140

自分なりの考えをもてるといいね

赤尾菜穂美

144

生徒の心ゆさぶった広島の修学旅行

勝呂竜司

149

銀林美恵子さん・新春訪問

「被爆者として 教師として 人権と命を大切にすることを伝え続けて」

151

■認定訴訟における原告の声

奥田豊治

163

■被爆者として福島原発の事故に接して

高比良毅

166

東京電力福島原発爆発と子どもたちの被ばく

小田美智子

168

◇江戸川原爆被爆者追悼式・親江会の16年

180

原爆犠牲者追悼碑建立のことば

64

親江会

120

◇成長する江戸川原爆犠牲者追悼碑

イラスト・金明豪

あとがき

182

表紙／丸木位里・俊

表紙題字／川平永介

中表紙カラー写真撮影／西本宗一

カット／平野庄司・石野泰之・大橋則子・小林みどり・佐々木承定・篠塚はるみ

田嶋育雄・長島栄次・半野田富美彦・山田和美・親江会だより

写真〔撮影〕／小林 功・関寿義・椿 隆則

〔提供〕／親江会・追悼碑の会・泉福寺

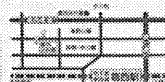
第31回
江戸川区

原爆犠牲者 追悼式



と き ● 2011年7月17日(日曜日)
午後1時20分開場・2時開式

ところ ● 葛西区民館ホール
主催:江戸川原爆犠牲者追悼碑の会
〒139-0033 江戸区葛西4-6-17 TEL・FAX 3852-8428



江戸川平和コンサート

2011.7.31 sun 13:00 開場/13:30開演

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

★中村屋美 & 伊藤茂利 ビースライプ(歌・ギターと語り)

はじめに

滝野公園にある江戸川原爆犠牲者追悼碑は、「成長する追悼碑」と呼ばれてきました。普通、追悼碑は建立を終えるところか片隅に忘れられるが、そのまま存続するものが多いのですが、江戸川の追悼碑は建立後も、原爆瓦、平和の鐘、広島の木・クスノキ、長崎の木・ナンキンハゼ、噴水、千羽鶴つり棚、被爆アオギリ二世、名簿碑と次々に整備されています。

追悼碑のもとで毎年夏に行われる追悼式は、被爆体験と核兵器の恐ろしさを生の声によって知ることができる貴重な機会です。この証言を追悼式に参加した人たちだけでなく、より多くの方々にも知らせたい、ということから証言集が生まれました。

江戸川被爆者の証言集「鳩になって」は、このように休むことなく成長している不思議な追悼碑の成長記録集です。

第一集は一九八二年、第二集は一九八四年、第三集は追悼式十周年の一九九〇年、第四集は十五周年目の一九九四年、さらに三十周年の節



目に第五集を、十五年ぶりに発行することができました。

第五集が、文字通り鳩になって広く羽ばたいて、多くの人々に届くことを期待しています。

これからも追悼碑に眠る人々と一緒に、多くの人たちに呼びかけ、核のない平和な世界が実現するように祈念します。

二〇一一年七月十七日

「鳩になって」第五集編集委員会

あいさつ

親江会会長 銀林美恵子

人類史上初の原子爆弾投下から六十五年目の夏は異常な猛暑でした。秋風が吹く頃になっても、気候の変化に耐え切れず、多数の人々が帰らぬ世界に旅立ちました。殊に広島・長崎の惨状を忘れない被爆者との別れは淋しいです。「核兵器をなくすため、国家補償による被爆者援護法ができるまで死ねない」と、病をおして行動を続けていた方の死去は痛ましく、志半ばで、「ご本人が一番悔しかったでしょう。多数の方たちを見送りました。

日本だけでなく、世界的な異常気象に加え、地震の被害や水害など思いがけない災害が続きました。環境汚染で痛めつけられた地球の怒りが爆発したようです。ヒキニ水爆実験の死の灰は遠く世界中を駆け巡り、チェルノブイリ原発事故の放射能の広がりも、ヨーロッパ各地でたくさん被害が報じられています。生きとし生けるもの、すべての人々が放射線を



浴びていることになります。動物や植物も例外ではありません。このままでは地球が滅びるのは誰の目にも明らかじゃないですか。今、人間が作った核被害を止めなければ、この様々の動きも世界的に増えています。

江戸川の前爆犠牲者追悼碑の会では、十五年前に最後のつもりで証言集「鳩になつて」第四集を発行しました。追悼碑に眠る人々のこと、追悼式十四回までの記録が掲載されています。その後十五年間の広がり、特に最近の動きがあり、第四集で最後などんでもない間違いだつたと気付きました。追悼式三十回記念号を刊行しようの話題が一年前から持ち上がっていました。事務局を担う泉福寺の岡田隆法住職は追悼碑建立の年に誕生した三十歳、追悼碑と同年齢です。初期の追悼式では滝野公園で遊び回っていた幼児が碑とともに成長し、碑を守り育てる役割を果たし、第五集編集の要での活躍など頼もしい限りです。

夏過ぎて、突然死去された作家の井上ひさしさんは、オバマ大統領のノーベル賞受賞の意義について、原爆を落としたのは誰かという主語を語っている、「核を使用した唯一の保有国として行動する道義的責任がある」と明確にのべている点をあげておられます。日本語ではあいまいにされがちな主語を明確にする必要性を教わりました。一人一人が自分の意

志で責任を持って行動を起こすよう言われたのでしよう。

江戸川の追悼碑は三十年前に建立され、成長する碑といわれてきました。四号を発行した十五年前とはすっかり違います。特にオバマ発言以降に著名人が被爆体験を語り、多くの被爆者がはじめて体験を残そうと動きだしたことです。

私達は立派に成長した追悼碑を持っています。「原爆の図」で著名な丸木位里・俊画伯が直接自然石に描き、被爆者・支援者たちがノミで彫りあげた、江戸川のこの地にしかない宝ものです。俊画伯は「原爆を受けた子どもたちが鳩に乗って世界中に平和を訴える図」と言われました。江戸川区では毎年八月十五日、多田正見区長をはじめ幹部職員が追悼碑を訪ね、平和への誓いを新たにされます。今では区をあげて追悼碑を広める力になって下さっています。

老いも若きもそれぞれが、自分の意志で願いを鳩に乗せて羽ばたく、そんな追悼碑をもっていることを幸せに思います。第五集刊行の意義も追悼碑の広がりにあることを思い、「戦争も核被害もない世界で、すべての子どもたちの笑顔を願って」発刊のことばをお願いします。

二〇一〇年十二月記

追記

この証言集が出来上がりかけた、二〇一一年三月十一日の東日本大震災から福島第一原子力発電所のレベル七の事故が起こり、被爆者として大変残念に思います。放射能による汚染の問題で、多くの人々が苦しめられるでしょう。被ばくしたすべての人が補償をされるのか心配です。無辜の被害者が無視されないよう、この期に政府が日本列島に滞在した人すべて、日本人に限らず外国籍の方も含め、被曝をしたと宣言をしていただきたいです。

被爆者手帳に準じた措置として、たとえ政権がどんなかたちになっても、この事故による被害を受けた人々が後々補償される基礎ができていれば、後から軌道修正ができると思うのです。被爆者援護法の成立と被爆手帳交付が、私たち被爆者の原点です。今、困難に直面したからこそ、初心に帰った気持ちで対応していくことが大切だと思います。

六月十六日の東京新聞に、福島や東京で原発事故後、それまで健康であった子どもたちが、鼻血や下痢が止まらないなどの放射線の影響かと心配されているとあり、大きな衝撃を受けました。まず、福島の妊婦や子どもなど命の危機にある人々を疎開させるなど、早急に対応していただきたいです。

二〇一二年六月十八日記



発刊によせて

江戸川区長 多田正見

「歴史を風化させたくない。自らの貴重な体験を後世に伝えたい」、こうした熱い思いを伝える語り部の方々は尊い存在です。今年は、広島・長崎に原爆が投下されてから六十六年目となり、戦争を体験した方々が徐々に少なくなっています。こうした中、原爆の悲惨さ、戦争の惨禍を二度と繰り返すまいという人々の思いを集めた証言集『鳩になつて』第五集が十五年振りに発刊となりましたことは、大変意義深いことです。

滝野公園の原爆犠牲者追悼碑に寄り添って、参拝した際に犠牲者の名前がわかるようにと、平成十九年に犠牲者名簿碑が建立されました。二年ごとに、名簿にお名前が刻まれていきますが、新たに刻まれたお名前を見ると、哀悼の念と共に、改めて戦争体験者が減ってしまわれている

ことを実感し、戦争の悲惨さを後世に伝えていくことの大切さを痛感いたします。

我々には唯一の被爆国として、核兵器の悲惨さを伝えていく責務があります。平和な世界を築きあげるために、全世界の人々と協調して、核の廃絶をめざす必要があります。

江戸川区は平成七年に平和都市を宣言しています。水と緑に囲まれた、この素晴らしい郷土を次の世代に守り伝え、生命の尊さと平和の大切さを深く心に銘じ、恒久の平和と繁栄を希求することを謳っております。これは、平和な時代が末永く続くよう努力し続けていくことを誓ったものであります。

この美しい江戸川区をこれからも守り続け、人類全体の平和を築き上げていくために、この冊子が大きな役割を果たすものと確信しております。



第30回江戸川原爆犠牲者追悼式次第

(敬称略)

第一部

司会 伊藤定夫 久保田恵子

合唱 くすのきカルチャーセンターコーラスグループ有志

「原爆ゆるすまじ」「蒼い空は」

指揮 国井スミ子 ピアノ伴奏 国井義弘

開会の挨拶 銀林美恵子（親江会会長）

犠牲者名簿奉安読み上げ 田部和彦

奉安者 （広島） 沼田彦造 城戸喜美 田中君子
野村綾美 森田綾子 内田祝子
（長崎） 浄園満成

黙祷

挨拶 多田正見（江戸川区長）

須賀精二（江戸川区議会議長）

広島市長、長崎市長のメッセージ

韓国原爆被害者協会会長のメッセージ

山本英典（東友会副会長）

千羽鶴献納名簿発表

被爆体験発表 貫 泰夫

若い世代より

清新第一小学校 5年

岡垣 淳 若林 遥 渡邊沙彩

小岩中学校 3年 春田 愛 廣瀬美咲

閉会の挨拶 関 康道（江戸川仏教会会長）

————— 原爆犠牲者追悼碑に移動 —————

仏教一読経、キリスト教一祈祷、参加者全員献花

第二部 交流会

司会 宇田川耕史

★ 追悼式は毎年、7月の第3日曜日の午後2時より
葛西区民館にて行っています。

証言

―江戸川原爆追悼式で、一九九六年から

二〇一〇年までに発表されたもの―



被爆体験について

広島 山崎 竹雄

私が被爆したのは広島県立広島商業学校第一学年在学の十二歳の時です。連日の建物疎開倒壊作業へ出発前の朝礼待機中の校庭で、級友としやべっている最中の事です。

*

「ピカー」とせん光が走るとすぐ、「ドーン」と大音響が天地をゆるがした。その瞬間砂ぼこりの中へ吹き飛ばされた。何秒か何分か経って起き上がる。と砂ぼこりが治まり、見廻すと皆倒れていた。体を見ると、白い半袖シャツに火がついて焼け焦げて、左右の上腕部の皮膚が一部垂れ下がり、顔に手を当

てると、右ほほも一部垂れている。すぐそばに自分と同じ様な状態の級友がいたので話し合って、爆弾による火傷をうけたと結論を出し、治療所に行こうと全壊した学校を後にした。

土地カンのある宇品の「共済病院」を目指した路上で、自分達と同様かもっとひどい状態の人々が「助けてくれ」「水をくれ」と云っているが、なすすべがなかった。共済病院は傷を負った人々でごった返しており、中へ入れない。玄關脇で一人の職員がバケツに入った白い薬を塗っていたので、我々も塗ってもらう。

とりあえず、やすめる場所を求めて旭町の母校、大河国民学校方向へ歩き出した。何という町か定かでないが、若い奥さんから「休んでいきなさい」と声をかけられ、窓ガラスが全部こわれた応接間に招じ入れられた。中には禪（ふんどし）一つで、全身ガラス傷だらけの御主人がおられた。出勤前に陸軍少尉の軍服姿でやられたという事でした。便所に行った

時鏡を見ると、顔がドッチボールの様にふくれあがっているのに驚く。昼食代わりに水ようかんのようなものを戴いたり、半日休ませてもらうという「地獄で仏」のような親切を戴き、自分達の幸運を今でも感謝の念に堪えない。

夕方、日がかげり始めたので学校へ帰るべく歩き出し、日が暮れてたどりつく。校舎は全部倒壊していたが、防空壕は健在でローソクの光で十人程の仲間がおり、残された昼の弁当をくれたが食欲はなかった。夜遅く兵隊さんが巡回して来て、重傷者を収容しだした。私も歩行できなくなっていたので、近くの野戦病院へ収容された。当夜から発熱、嘔吐、下痢に苦しめられた。

何日経ったか解らないが、呉市に住む叔父が自転車で入市して捜し当ててくれて、数日後には姉が看護に来てくれた。終戦を迎えて野戦病院も日本医師団が入って来て、共同で治療に当たってくれた。

時期は定かではないが、秋風が感じられるように

なつて、熱傷部にやつと薄皮が張り始めたので、家族の疎開先である沼隈郡千歳村に引き揚げた。

*

その後の病歴としては、昭和三十七年十二指腸潰瘍、昭和四十二年肝炎と大したものはないのですが、平成六年食道癌除去手術、平成七年肝臓癌除去手術を行い、現在引続き通院中の日々です。
御清聴ありがとうございました。

(1996年)



長崎被爆

長崎 永野 慶子

今年は例年になく暑さ厳しい夏がやって来たと同時に、原爆記念日も近ずいてまいります。

私が幼い頃母から聞かされた事の中で、一つだけ鮮明に覚えている事があります。

それは、昼の十一時頃、空からきれいな落下傘に似た物が降ってきたので、何だろうと話す間もなくあつという間に何故か先にとばされてしまい、母が急いで家に入ろうと言つて、私の手を引いてくれた事です。今でもはつきり覚えています。

被爆五十年の昨年、親江会の平和祈念旅行に参加させていただきましたが、九日、長崎の式典の間中、亡き母をしのび涙がとまりませんでした。

私も早や五十歳を過ぎ、原爆で亡くなった方や今も病気で苦しんでいる方々の事を思うと胸が痛みますが、その方々のおかげで今日の私達があると思います。

これからも原爆のこわさや、おそろしさを若い人達に語りついで、色々な運動に参加させていただきたいと思っております。

最後に、二度とこういうおそろしい事が起こりませんよう願っております。

本日はありがとうございます。

(1996年)



たった一人残されて

広島 関口智恵子

十二歳の私は、その年に国民学校を卒業して、南観音高等小学校に通学していました。毎日毎日、教練と動員で仕事ばかりでした。

そんなとき、八月六日に原爆が落とされました。私の家は七人家族で、近所に祖母が住んでいました。前日の五日には、宮島にお参りして、みんなの無事を祈りました。その帰りに、警報がでて帰宅がおそくなり、父が心配して自転車で途中まで迎えにきてくれました。父は、そのまますぐ仕事に行きましたが、それが父との最期でした。

六日の夜、友達の親戚が草津にあるので、泊めて頂

き、翌早朝、五日市に行き、母、祖母、弟に出会いました。四歳の弟は、全身包帯でぐるぐる巻き、母は胸にけがをしていました。

七日に、私が弟をおんぶして、三人で市内にでて、父、姉、弟たちを探しましたが、行方不明です。おぶっていた弟は、十日の朝死に、母と二人で火葬にして、お骨を抱いて、毎日、父たちを探し歩きました。原爆ドームのところに、金髪の外国人の死体がころがっていて、その人の頭のところに石がいっぱい投げられていました。この人も被害者だったのにと、いまでもその光景が目に残ります。

十二日、母、祖母、私の三人で、親戚をたよって島根に行きました。私たちは喜んで迎えられましたが、十八日に祖母、続いて三十一日には母も亡くなり、私は一人ぼっちになりました。険しい山のふもとに、一人とり残されたような気がして、一生かけて登っていかなくてはと思い、今、一生懸命登っているところです。

毎日、死ぬことばかり考えていた私ですが、親戚、近所の人たちから親切にしてください、ここまでの来たのです。これからも頑張っていきたいと思っています。

(1997年)

八月九日

長崎 鹿嶋レイ子

私が被爆したのは女学校二年生の時です。その日、私は学徒動員で長崎造船所幸町工場に行くため稲佐橋を渡っている時、警報が鳴り、家に引き返して二階にいました。

しばらくして、父の大声に夢中で二階からとび降りました。気がつくと私は爆風で持ち上がった階段に足を挟まれ、壁が崩れて動けなくなり父に助けられました。

父は町内会長をしていましたので町内を見廻り「ヤケド」や「ケガ」をした人の手当をしました。特に「ヤケド」をした人は、その後「ウジ」がわき



ました。

四、五日は町内の世話で過ぎましたが、父と私は爆心地付近に住んでいた親類を探しに出かけました。

私が途中で引き返した稲佐橋の下には、亡くなった人が横たわっています。私が行くはずだった工場も鉄骨が残っているだけで、周囲のあまりの惨状に夢中で歩きました。

その時に見た、焼けて真黒になり、大きく膨らみ、目ごとび出して座っていた人の姿は、今も忘れることが出来ません。

親類の家は跡形もなく、どこを探せばよいのかわからず、その日は帰りましたが、父は翌日も出掛けて行き「我が家に来るように」と書いた木札を立てて来ました。まもなく子供達八人を亡くした叔父夫婦がやって来ました。他の親類も従姉妹二人が残っただけで全滅でした。

近所の人で行方不明になっていた人も、家に帰っ

てから二週間程で亡くなり、その遺体を空地に材木を積んで焼きました。

私の友人も髪の毛が抜けたり、「ヤケド」の後がケロイドになって、原子爆弾の恐ろしさを痛感しています。

当時の事は生涯忘れる事が出来ません。多くの人的ご冥福を祈りながら毎日を過ごしております。

(1997年)



虫けらのように燃やされて

広島 佐藤 静恵

今年も原爆記念日が近づいて来ました。

昭和二十年八月六日、広島に原爆が投下された日です。当時十四歳だった私にとって、人生で一番苦しい体験でした。今でも思い出すと胸が張り裂ける思いです。

当時高等女学校三年生でしたが、三菱重工業広島機械製作所に学徒動員として出動していました。学徒動員とは、当時の学生全部が、戦局の重大さに兵器を作る軍需工場に働きに行かされました。学校での勉強はできなかつたのです。

八月六日、鑄鉄工場の朝礼の訓示が終わって間も

なく八時十五分、突然窓の外からオレンジ色の閃光と共に鋭い爆風で窓ガラスは吹き飛び、鉄骨は飛び散り、目の前は真っ暗になりました。一時気を失ったような状態になり、気がついた時には多数の被爆者が右往左往しておりました。

無我夢中で家路に向かいました。途中広島県営競技場に来た時、ものすごい黒い雨が降り出し、ずぶぬれになり、衣類も真黒になり、寒さにふるえました。振り返ってみると、上空には真暗い空に赤い炎が燃えて見えました。

恐怖におののきながら国道一号線に出ました。軍のトラックに乗せてもらいました。車内はうめき声と泣き声で一ぱいでした。全く目を覆う思いでした。体半分焼けこげ、手はちようどフキンをぶら下げたように皮が焼け、ぶら下がっている人、顔半分焼けている人、全くこの世の地獄でした。

五日市役場で下りました。大勢の被爆された人が手当を受けておられました。

我が家も広島の方の被災者の収容所になっていましたので、大勢の方がいらつしやいました。二つ年上の姉の消息がわからないので、父兄が救援物資を運ぶトラックで広島に探しに行きました。その時は広島に七つの爆弾が落とされたとの事でした（原爆投下は後になってわかりました）。姉は爆心地に近い相生橋方面で被爆したとの事で、早や絶望という事になりました。今は亡き母が仏前に燈明をつけて泣いていた姿が思い出されます。

翌八月七日、母と共に姉を探しに貨物列車にぶら下がるようにして（客車は出ておりません）、やつとの思いで昔の練兵場につきました（今の平和記念塔のそばです）。そこには山のように積み重ねられた尊い人の命が、まるで虫けらのように油をかけられ、燃やされていました。ものすごい悪臭でした。

その横に何百人と地べたに、被災者が炎天の下に寝かされていました。母は全く見分けのわからない

翌八月八日も、母と二人で探し歩きました。あちこちに火の手が燃え上がりくすぶり、死骸が放つてありました。旧広島城のお堀の中には第五師団の兵隊さんが水を求めてこられたのでしょう。ふくれ上がって大勢死んで浮いておられました。馬も大腸をむき出しにして何頭も死んでいました。前にも書きましたけど、この世の地獄でした。

姉は行方不明のまま、今は原爆慰霊碑の中に安らかに眠っています。五十回忌の法要には参列して来ました。(安らかに眠って下さい、あやまちはくり返しません)と云う碑の前に額ずき、手を合わせて

来ました。

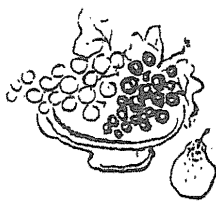
原爆記念館も再三拝観しましたが、あの時の状況から見れば百分の一の展示だと思っています。あのすさまじい出来事を思い出すたびに、現在の平和がこの尊い悲惨な犠牲者の上に築かれていると思うと、私達は幸せです。

今はただ、世界平和を願い、核実験に抗議をして行きたいと思います。

どうか本日ご列席の皆様、親江会の皆様、心を一つにして平和の日本の将来に向かって努力いたしましょう。原爆で亡くなられた皆様のご冥福を心からお祈り申し上げます。

御清聴ありがとうございます。

(1998年)



本当に悪夢のような……

長崎 山下ヒサエ

私は当時、三菱兵器製作所茂里町工場に勤務しておりました。八月九日、なんとなく工場に出かける事が気が進まず、思案橋の電車ののり場に行っても、また家の方に足が向いて、工場に行きたくない心でいっぱい自宅に帰りました。すると、父から「お前はこの非常時になんでそんなことをするのか、早く工場に行きなさい」と叱られ、重たい足をひきずるようにして、思案橋から大橋行にとびのりはしたものの浜の町で下車して、とぼとぼと歩いていました。

やはり工場の事が気になり、再び電車にとびのりしました。同時にいなくまのようなピカッという光をみて、電車の車掌より「全員伏せて下さい」と大きな声でどなられ、折り重なるようにしていたら、大きな音と共に電車のガラスが粉々にわれました。すると全員退避と号令の元、千馬町の電車からとびおり、新地の方向に逃げていきました。全員がガラスの破片でケガをして、あてもなくあるき出していました。「姉さん血が流れていますよ」と見知らぬ人より声をかけられながら、館内の方角に足を向け、ふとみると、大きな防空ごうにたくさんの人がひしめき合いながら入っていました。「入れて下さい」と声をかけると、「今頃来る奴は中国のスパイだ」といつて押し出されて、途方に暮れていました。とぼとぼと歩き出し、合戦場の方に来ていました。家が上小島なので下の方へと下がり出しました。

ようやく家の近所までたどり着いて、町内の防空ごうに入り、横をみると父が頭から血を流していま

した。家のカマドのエンツツが吹きとび、それだけがをしたとの事でした。夜になり家にはおれず、近所の人と共に上のカボチャ畠にひなをしました。市内は火の海で、何かどこかとひとひい音がしていました。

夜が明けると青年の人が来て、「アメリカ兵がせめて来るので、若い女性は全員逃げるように」と命令があり、いつの間にか長崎駅の方まで来ていました。目をみはるような光景ばかりでした。さらに浦上駅を通りすぎ、アドバルンみたいにふくれ上がった人々で、こわいやら驚くばかりでした。皆黒こげの死人や、頭だけの人とかびつくりするばかりでした。松山町の方まで来ると、気が変になった人が、「私の子供を二人おんぶしています」というけれど、何にもなく小さな袋をもってにげていました。大橋の鉄橋をあるいていると、学徒報国隊の若者が、「水を下さい、水を下さい」とすがり付きました。里芋の葉っぱで水を上げようとすると、海軍の兵隊が、

「水をやると死ぬのでやってはいけない」とどなられ、水を上げる事もできないまま死んでいきました。本当に生き地獄とはこういう事をいうんだと感じました。

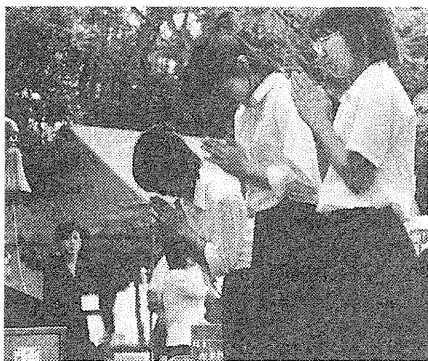
足はなめし峠をこして、三重の本村辺りまでにげておりました。当時国防婦人会と云うタスキをかけた人々が声をかけてくれました。「長崎からにげて来て何も食べていないのでしょうか。どうぞごはん味噌汁をたべて行つて下さい」とすすめられ、何も食べていない人ばかり四人ぐらい、家に立ち寄りお世話になりました。あの当時の親切は、五十三年たった今でも忘れる事はできません。神の浦下木場に工場の友人がいてそこにお世話になり、八月十五日終戦になった事を知りました。この友人も原爆で亡くなりました。

私はいろいろとむくみが出たり、あつちこつちと身体も具合が悪い日が続き、鼻血が出たり、血圧は二百二十まで上がり、歩く事もままならない日々が

続きました。毎日毎日辛い日が続くので、いつそ自殺しようかと思つた事も何回ありました。今になると本当に悪夢を見ていたのだとしみじみ考えさせられます。

核実験はいろんな国でやっておりますが、二度とひさんな戦争で使つて貰いたくないと思います。被爆国日本の一被爆者として、すべての国の人に訴えたいと心より願っております。合掌

(1998年)



核廃絶と戦争を考える

広島 野村 寛一

私の家族、妻と長女（三歳）長男（二歳）の三人は、八月六日は広島市牛田区在住の妻の実家の家族三人と共に爆弾投下時、家の中にいました。家が倒壊し、その下敷きとなり、最初に意識を回復した父が全員を外に救出して、その後に起きた火災からの焼死から危うく逃れることが出来ました。

全員が負傷した当時の惨状は、妻の綾美が一九八四年の追悼式場で詳細に証言いたしました。その記事は、当時の親江会だよりと証言集に掲載されていますので省略させて頂きます。

私はその数日後、家族救護のため出征先の高知県赤岡町在駐の第五百十五師団（護土師団）より、一面焼土と化した広島市に入市した次第です。

昭和十三年に軍隊生活に入り、十六年よりの戦争体験を通じて数度にわたる命がけの体験の中で、特に参考になると思われる事実をお話し、あるいは私の考え等をお話し上げたいと存じます。

大戦終盤の昭和十九年十一月、フィリピン、ルソン島の日本軍部隊増強のため、満州駐在の旭兵团（第二十三師団）をルソン島に急輸せんとして、大型優秀船一万ト級四隻とシンガポール向けタンカー六隻と護衛の改造空母神鷹及び海防艦六隻の船団で、十一月七日釜山出港、十三日門司（もじ）に立ち寄り、十五日五島列島と朝鮮半島とのちようど中間、海峡中央部において乗船していた「あかつき丸」は、最先頭に敵潜水艦の攻撃を受け、お昼の十二時ちようど頃、二発の魚雷攻撃により約四分間で火柱をあげて轟沈（こうちん）し、乗員二千五百余名

（内救助確認者約四十名）のほとんど全員に近い兵員が、艦と共に海底に沈みました。私は同行の少尉と共にいち早く飛行甲板より海中に飛び込み、五十メートルくらい泳いで漂流中の特攻艇に飛び乗り、寒風吹き荒れる暗黒の玄界灘で、十メートルくらいの大浪の中を一晚、同乗の六人と共に頭から波をかぶり寒さにふるえながら一夜を明かしました。翌朝夜明け頃、海軍の見張り船（約二千ト）に発見救助された時は、死地で神に救われた思いでした。そして、夕方五島の福江港に上陸しました。

轟沈当時は船の周りの海面には手足等をなくし、体を負傷した数百人の半死状態の兵員が救いを求めて浮上し、泳ぎもがいている様は阿鼻叫喚の地獄絵そのもので、全く目を蔽うものでした。救助されて福江港に上陸した人は僅かの十六名でした。続いて十七日には「摩耶山丸」（四千三百八十七名乗船中三千二百名以上戦死）、さらに続いて空母神鷹も轟沈されました。

これ等は体験の一部で紙面の都合で紹介出来ませんが、第二次世界大戦中、日本軍の戦死者数は約二百四十万人、その内遺骨の帰ったもの約半数の百二十万柱、又帰還遺骨の内遺族引き取り人不明の遺骨三十四万五千柱は「千鳥ヶ淵霊園」（無名戦士の墓）に祀られています。従って、現在約百二十万柱の英霊の骨は、東南アジアを初めとする全戦域やロシア（シベリヤ）、モンゴル等異国の地、あるいは戦域の海底に眠ったままで、その遺骨収集も主にこれを行っている退役軍人も高齢化したのと、現地の状況の変化のため、非常に困難となっている現実を為政者はどう見、どう考えているのか。国家、国民を思い、命に従い身を挺して死地に進んで赴いた多くの御霊に、何とお詫びすればよいのか……。

又、核兵器と戦争は、とにかく人類を滅亡に導く最大の悪玉である。戦争で何か得るものがあるだろうか、失うばかりである。

凶弾に倒れたイスラエルのラビン首相の言葉、

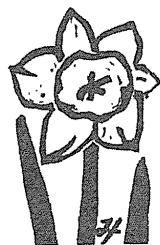
「血も涙ももうたくさんだ。従ってどんな困難も痛みも承知の上で平和の道を選んだのだ」。多くの犠牲の後に到達した結論です。

また、核兵器を四十一歳で完成したマンハッタン計画の主任技師ロバート・オッペンハイマーさんも、戦後広島、長崎の悲惨な写真を見て、あまりにも残酷な様子に驚き悲しみ、「原爆は滅びゆく世界、滅びゆく人類を作るもの」と断じ、水爆開発研究に反対して、反逆者としてアメリカ政府より追放処分を受ける。更に「人類は戦争を放棄するか、然らざれば滅亡の道を選ぶことになる」と叫んだ。そして湯川博士の招きで来日し、「国境を越えた科学の団結」を提唱され、六十七歳で咽頭ガンで死去された。最後に原爆詩の朗読で、日本各地で原爆の悲惨な平和を願う心の詩を名調子で朗読され、核兵器廃絶を広く一般大衆に訴え多くの共感を呼んでいる吉永小百合さんの努力に感謝せずにはおられない。特に去る七月十二日にもアメリカ、ワシントン州の港

町「ポートタウンセント」の「ジョセフ・ウイラー劇場」において、多くの平和団体や市民の前で原爆詩を英語と日本語でアメリカの詩人サム・ハミルと共に朗読会を開催し、大変な共感を得、多くの核兵器廃絶運動の協力者を得ている事実である。多くの支持者を得てアメリカの地で行った勇氣には、全く頭が下がる。こういう努力の積み重ねと国境を越えた大きい運動、そして若い次世代の人々、青年達に伝え、協力と理解を得る努力が今後一層求められることになる。

世界の恒久平和、核兵器廃絶の大目標に向かって、勇氣ある第一歩を踏み出すことが緊要の現在であることを、みな様と共に痛感し祈念しながら、私の拙い筆をおきます。

(1999年)



どんな理由があっても、戦争は 絶対におこしてはなりません

長崎 池田須恵子

今日は、私が身をもって体験をした、昭和二十年八月九日の、長崎のあの日の悲痛な惨状を思い出しながらお話して、皆様のご参考にしていただけたらと思います。

私が当時住んでおりましたところは、原爆落下地点から約二・五キロのところでした。その日、十一時頃、爆音が聞こえましたので、あら、今頃アメリカの飛行機かなあと思う、何げなく空を見上げたその直後、大きな音と共にキノコ型の大きな雲が空に舞い上がり、あたり一面が薄暗くなりました。

私はちょうどその時、家の外で少し早目の昼食の支度をしておりましたので、あわてて家の中に入りました。ところが家に入ってびっくりしました。それは柱時計は落ち、棚という棚に載せていた品物などすべて畳の上に落ち、足の踏み場もない状態でした。この時は原爆が落ちたなど知る由もなく、何か大きな新型爆弾でも落ちたのかなあというくらいに思いました。私は母と祖母と三人で、頭に座布団や防空頭巾（ずきん）をかぶり、ただただ恐ろしさに、じつと家の中に座り込んでいました。その後しばらくして気を取り直し、防空壕に避難しました。

それから三日くらい後に、佐賀県の親戚を頼って疎開致しました。その疎開のため、駅に行く途中、爆心地から約一キロ離れた梁川橋を渡りながら川の中を見ますと、ある人は全身真黒に焼け焦げ、顔は勿論、男女の区別さえ分らない人や、またある人は衣服はボロボロになり、全身ヤケドになった人達が折り重なって死んでいる大勢の人達の姿を見ま

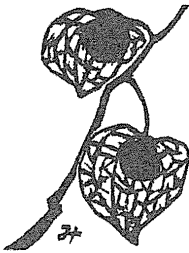
した。あとで分かった事ですが、この人達は喉のかわきのため、川に水を飲みに行って死んだ人達でした。この惨状は、私が一生忘れることのできない痛ましくも悲惨なこの世の地獄でした。

また長崎には、今も何万という原爆後遺症に苦しんでいる人々がおられます。

現在、ガイドライン法が成立し、再び戦争に引き込まれ、あのような人間地獄は二度と見たくありません。どんな理由があっても、外国との争い、ましてや戦争は絶対に起こしてはなりません。

私たちは被爆者の一人として、この日本が永久に戦争のない平和な国でありますよう、心から祈る者でございます。

(1999年)



語り名草は被爆者の義務

広島 高橋 啓介

広島宇品で被爆した高橋啓介です。現在は中央四丁目に住んで居ります。

むごく、つらかった被爆当時の状況は親兄弟、その後結婚をした家族にも一言も話をした事はありません。五十五年経った今日、少しでも語り名草は被爆者の義務と感じ思い出を語ります。

宇品の気象教育隊で天気図作成の教育を受けていた初年兵でした。当日朝「気象教育より現地での実践の急務に依り教育隊は解散」のための隊長訓示が、いつもの朝礼より長く続いていました。

突然まばゆく光ると大音響、すぐにその場に伏せ

た。頭を上げて見ると、今まで生活していた兵舎五棟が宇品の海に向かって壊れてしまい、兵舎の中にいた古兵で、大怪我をした者のいる事が後でわかりました。怪我人の救出、兵舎の片付けをはじめるとすぐに、白い雲がムクムクと湧き上りました。俗に言う「キノコ雲」です。広島を中心部に火災が発生、黒い雨も降りました。

午後になると前の道路には怪我をした人、ボロボロの服を着た人が列をつくって海に向かって行きました。暴風が海に抜けたため、我々の部隊は破壊の被害だけで助かりました。夜に入ると救援のため出発の命令を受け、軍装をして出発しました。被爆後十数時間経っていましたから、火の手は下火になっていましたが前面焼け野原です。

「水を下さい」「たすけて下さい」「痛い痛い」等の声を聞きながら中心地らしいところまで行きました。焼け跡の臭いと怪我人の臭い、日中の暑さの残りの臭い、苦しいほどでした。

中心部に着き、「明朝までここで休め、ただし寝ては駄目だ」と言われ腰を下ろしました。夜が明けて見ると回りには死者が並べられており、一部では治療をしていました。

八月七日は道路の整理、怪我人の誘導、焼けた木を井桁に積み上げて、死者を載せ火をつける等々を夕方までやり、日没前に壊れた兵舎に帰りました。被爆二日目の夜、明日は門司に移動の命令が出ました。門司に移ってから、毛が抜けたり、血便、下痢等で皆困りました。

当時は新型爆弾と言うだけで、体調の悪いのも広島での被爆とは少しも考えませんでした。

終戦後、広島被爆の体験、状況などの記事がいろいろと見られるようになりました。しかし、私には実態と何か違う、実際はもつと重いと感じ、そのためにも今日まで被爆の話は一切しませんでした。悲惨です。一瞬であのような事が起る。その事は二度とあってはなりません。

(2000年)

国民学校生　ぼくの八月九日

長崎　岡澤　瑞穂

強烈な閃光が走った時、一瞬わが家に焼夷弾が落ちたと思った。

あの朝、空襲警報が発令され自宅の庭の防空壕に避難していたが、解除により玄関前にあった大きな楠の落葉を掃除していた時であった。上空を飛行機が通り過ぎる音を聞いた直後、目も眩むばかりの閃光があり、とつさに玄関から室内に駆け込んだ。瞬間何か異状なものに包まれ、両手で目と耳をふさいでその場にひれ伏した。

顔を上げると周囲は一変していた。窓ガラス・ふすま・障子など庭に吹き飛ばされ、部屋中ガラス片が散らばり、柱にも突き刺さっていた。北側の板塀は倒れ、板塀に下がっていた大きな南瓜（かぼちゃ）が畳の上に転がっていた。

勝手口付近にいた母が幼児の妹を抱え、「早く防空壕に入りなさい！」と叫んだので、一緒に防空壕に駆け込んだ。三人共ガラス片による外傷から血が出ていたが、弟がいないので、母は妹を私に預け、弟の名を絶叫しながら探しに出かけた。家の周辺では弟を探せず、心配顔で帰ってきた。三人の外傷を治療中、ランニング姿の弟が「背中が熱かった」と無傷で帰ってきた。

住居は長崎駅近くの東中町で、父が県庁勤務だったので県庁の宿舎に住んでいた。

防空壕の中で外傷の手当てを済ませ、周囲の状況を伺っていたが、もつと安全な諏訪神社西側（現在の長崎県立図書館横）の横穴防空壕に避難すること

にした。避難時に着る予定の一番上等の洋服(冬服)に着替え、母は妹を、私たちはリュックを背負い、防空壕を出た。路上は屋根瓦をはじめ、建具や軒下の植木・ゴミ箱などが散乱し足の踏み場のない有様であつた。また、大勢の人が全身血だらけで長崎駅の方から避難して来ていた。

横穴防空壕に避難してくる人が増えると共に、爆弾は広島に落とされた新型爆弾と同じものであること、被害は浦上方面が非常に大きいこと、すでに市街で火災が発生していることも分かつてきた。

午後三時頃、防空壕の責任者から、「この防空壕も危険だから、山の方に避難するよう」指示があり、一団となつて防空壕を出た。空は異様な色ですでに薄暗く、街は煙がたちこめていた。

大通りは地獄さながらの光景であつた。全身火傷で皮膚が垂れ下がり、男女の見分けもつかない人々が、助けを求めてさまよい歩いてゐた。お互い助ける術もなく、一刻も早く山へ避難することで精いつ

ぱいであつた。今でも、当日のことを思い出す度に、この情景が臉(まぶた)に浮かび胸の痛みは消えない。風頭山中腹の竹林に避難したが、すでに多くの人々で山は埋つていた。

夜中、母は父の消息と自宅の様子を調べるために帰宅した。自宅は掃除され、消防関係者の臨時詰所に活用されていること、父は無事で一度帰宅し、防空壕に散らばっている私たちの外傷の治療跡から、家族全員が無事で怪我が比較的小さいことを察し、職場に戻っていることが分かつた。

時々飛来する敵機の音におびえて、念仏を唱える人達と共に、市街一面の火災を茫然と眺めながら恐怖の一夜を過ごした。

*

以上が、爆心地から二・五^{km}離れた場所での被爆体験である。幸いにも家族全員無事であつたが、隣りの家族は被爆の数日前、爆心地に近い浦上方面に疎開し一家全滅、知人の親兄弟の方々が被爆当日死

亡されたり、原爆後遺症に苦しみながら亡くなる等、多くの人々の苛酷な運命を身近に体験しながら、また自分の病気の度に原爆の影響ではと心配しながら生きてきている。被爆者にとって「核兵器を地球から無くそう」との悲願も虚しく、二十世紀は終わろうとしている。

「核兵器廃絶」問題は、二十一世紀の人類の最大の課題である。国家を超え、民族を超え、人類の叡智で、早急に実現することを切望する次第である。

(2000年)



悲惨な状況下の救援活動

広島 加藤 貞夫

一九四五年(昭和二〇年)八月六日、私は、広島市が海上から真正面に見える江田島幸之浦にいました。陸軍の船舶特別幹部候補生として、船舶特別攻撃隊の教育を受けていたのです。これはあまり知られていませんが、陸軍でありながら、舟に乗って敵艦に体当たりするという陸軍の秘密水上特攻隊で、①(まるれ)と呼ばれていました。ベニヤ板で作られた長さ五・六尺、幅一・八尺、最大速力二・五ノット、自動車のエンジンを積んだその船に、二五〇キログラムの爆雷を付けて敵の船に体当たりをして沈めるというものでした。しかし、途中で敵の船から

撃たれて目的を達することは少なかったようです。それでもこの水上特攻隊は沖縄やフィリピンで、次々と敵艦目がけての体当たりを繰り返し、有望な若者たち一、六三六名が戦死しました。

当時十九歳の私もその一人として、三日後の出撃に備えて、既に髪の毛や爪を形見として残し、私物の整理も終わっていました。

*

八月六日の朝でした。これが最後となる写真を故郷の父母に送るため、写真の裏に住所や氏名を書いていました。八時十五分、青白い閃光が走り、数秒後にすさまじい衝撃が起きました。

兵舎が揺れてガラスがはじけて割れました。両手で耳をふさぎ地面に伏しました。一瞬の静寂の後、顔を上げると、窓際にいた人は背中に軍服の上からガラスの破片が突き刺さって血が吹き出ていました。外に出ると広島島の空には白い雲が上がり、見る見るうちにキノコ状になっていきます。でも、この

ときは原爆のことはまだ知らず、ガスタンクが爆発したのではないかと話しました。

午後から全員広島への救援命令が出たので、とりあえず乾パンなどを持って、大発艇で広島島の宇品港へ向かいました。ところが、宇品の栈橋付近は、首筋などの皮膚に水脹れができ、シャツの袖が無いような軽症の被爆者でいっぱいです。これは大変なことでだと思っていると、広島市内から、荷台にぎっしりと怪我をした人を寝かせた軍用トラックが次々と到着します。似島の陸軍検疫所で治療するために運んでいくのですが、みんな体から血がふき出し、火傷でばんばんに水膨（みずぶくれ）になっている身動き一つできない重傷者ばかりです。トラックからは血がしたり落ちていました。私たちはこの怪我人をトラックから降ろす作業に取りかかりました。が、体に触るとズルツと皮がむけるので、シャツ、ズボンなどを持って車から降ろして路上に並べます。その姿は痛ましく、重症で声一つ発しない人、

苦しさでのたうちまわる人達。……道路に寝かされた人々は、順番を待つうちに次々と死んでいきました。

しかし、この惨状はほんの出発にしか過ぎず、広島市内に向かうに従って益々ひどい状態でした。火災でトタン屋根が吹き上げられ、真つ赤に燃えている一面火の海の街では、焼けた皮膚がはげて手先にぶらさがり、顔中火傷で目も唇も腫れ上がり、男女の区別さえもできない人々が叫び、うめきながらぞろぞろと歩いていました。地面は焼けて熱く、足下にはおびただしい死傷者が倒れています。市内電車の中には、黒こげの炭のようになった遺体が、折り重なって倒れていました。

途中負傷者の救助や倒れた電柱などを片づけて進み、広島電鉄にあつた救援本部までたどり着いたのはもう夕方になっていましたが、十人ぐらいの班に別れて徹夜救援作業をしました。

とにかく生きている者の救助が先です。崩れ落ち

た瓦礫の下から負傷者の黒い腕を取って助けようとする、ズルズルむけた皮膚だけが私の手に残り、その人の赤い地肌がむき出しになります。助けた人は戸板やトタン板にひもを通したものに乘せたりして、日赤病院に運びました。

でも、病院ではまともな薬もなく、気休めに赤ちゃんやヨウチンを塗るだけで、負傷者は次々と息絶えていきました。そして、病院の裏に作られた防空壕の穴を利用した臨時の火葬場で焼かれました。庭まではみだしていた負傷者は三日たたぬうちに亡くなつてしまい、その死体を焼く火葬場の火は、毎日昼も夜も、私たちが広島にいた八日間燃え続けていました。

背中に負傷者を背負つて運ぶことも多かったのですが、歩いているうちに首がコトツと背中に当たるとその人が死んだことがわかりますので、背中から下ろし、そこに置いていきます。

とにかく六日は少しでも見込みのありそうな人

を助けることが先でした。

虫の息でうずくまる沢山の人達が、焼けそばった指先で喉をかきむしり、「兵隊さん、水を下さい」と悲痛な声を出します。水を与えると必ず死んでしまうので、絶対水を与えてはならないという厳しい軍の命令でした。私達は水筒には水は入れずに、水筒を振って「水はない」というしかありません。しかし、あまりの焦熱地獄のなかでのうち回り苦しむ姿に、あちこちに壊れてふき出している水道水をこっそり飲ませてあげました。その人は「兵隊さん、ありがとう」といって、すぐこと切れてしまいました。五十六年たつ今でも、あの「水を下さい」という人々の声が耳から離れません。

*

永い暑い魔の八月六日もようやく終わり、疲れ果てて眠る場所を探しましたが、舗装道路は熱せられて暑いし瓦の破片が痛くて眠れません。少しでも冷たいコンクリートの上で仮眠をとって朝目覚めた

ときは、周囲に死体がいっぱい散乱していてびっくりました。

七日からは死体の収容作業でした。焼死体を一カ所に集めて柱などの焼け残りで焼くのです。倒れた電柱の油などで焼きましたがなかなか焼けず、また燃えている途中で体の筋が動くのが、死体がまるで生きているような錯覚にとらわれることもありました。遺骨はドラム缶などに入れ地中に埋めて札を立てました。毎日が火葬と埋葬の作業で、何百人火葬したかわかりません。焼死体の中には、子供を下にその上に母親がおいかぶさるようになって死んでいる姿、小さな男の子を乳母車に乗せた老婆など、悲惨を極めていました。広島高等女学校の生徒が桜の木陰や、防空壕の中で先生と集団で焼死して、その場所に半狂乱の母親がたずねて来られ、「兵隊さん娘を探して」といわれますので、その特徴など聞きましたが沢山の遺体から探すのは容易ではありません。でも運よく腹ばいになっていたので、何人

かで起こし、燃え残りの名札、モンペ服などで確認してもらいましたが、変わり果てた我が子に取りすがって泣かれる姿は、慰める言葉ありませんでした。

被爆者の中には、水を求めて井戸や風呂の中で息絶えた人も多く、水たまりのある所は沢山の人々が死んでおりました。また、川の中は浮き死んでいる人の山が重なり合って、川の面が見えないくらいでした。海に近いので、満潮干潮の度に死体が往き来してまるで地獄です。

八月の暑さで死体の傷みが激しく、八日からは死体に直接手で触れぬように注意されましたが、支給された軍手は二日も使えません。人間の血と油にまみれながらの作業が続きました。横穴式の防空壕の中に異様な臭いがするので入っていくと、真つ暗な中で腐った死体にぶつかります。何人かで綱をかけて引き出しますが、中には手足がもげて飛び出してくるものもあり、本当にびつくりしたこともあり

ます。マンホールの中にある死体はもつと大変でした。かけた綱がどの部分にもめり込んで、胴さえもちぎれそうになって上がってきます。ボロ布のようになった子供の死体を何日も抱いた母親、その死体にはウジ虫がわきこの世の地獄です。

十三日まで死体と供に寝起きしました。夜は人間のリンが燃え青い炎があちこちに見えました。火の玉が飛ぶように見えますが、その下で人が燃えているのです。翌日、その辺りから死体を探し埋葬していききました。

*

私は八月六日から十三日まで八日間の救援作業を終え、身も心もくたくたになって江田島に帰り、そして翌々日、八月十五日終戦を迎えました。

私の水上特攻隊としての出撃の機会は、とうとうありませんでしたが、私の生涯の中でこの原爆救援活動ほどつらい記憶はありません。戦友の中にはこの救援活動で被ばくし、その後原爆病でなくなった者もい

ます。

私は幸い被爆の後遺症は現在ありませんが、やはり健康面で不安です。放射能を浴びた所に七十年草木も生えないとかいわれてきました。戦争だから勝つためには手段を選びません。しかし、子供、女性、老人、多くの罪のない人達が犠牲になるこの戦争とは、いったい何なのでしょうか。アメリカは「早く日本の戦争を終わらせるため、より多くの人命を救うために原爆を落とした」といっていますが、これ程無差別で、ここまで徹底した残虐があつていいものでしょうか。あのとき生き地獄をこの目で見た私は悲しみと、怒りがこみ上げてまいります。人類は二度とこのようなあやまちを起こしてはいけません。

(2001年)



五才のときでした

長崎 中村 誠治

長崎市大浦東山手で被爆した中村誠治です。昭和二十年八月九日十一時二分、当時五才の時でした。なにぶん幼かったためよく覚えておりませんので、被爆体験はお断わりしていましたが、覚えていただけでも発表して下さいとの事で引き受けました。長崎の三才上の姉にも協力してもらいました。幼いながらも原爆の落ちる前後の事は鮮明に覚えていきます。

家の前の石畳の道で一人石けりをして遊んでいると、かすかに遠くで飛行機の爆音が聞こえたので家の中に駆け込み、母に飛行機が来たと伝えましたが、

母は船の音だといってすぐに認めなかったのです。

その内だんだんと爆音が大きくなり、飛行機だと気がついた瞬間「ピカー」と閃光が走り、すぐにものすごい音と爆風で眼を開けていられない状態になり、家の中のタンスや家具等がバタバタと倒れ、窓枠がふつとび、ガラスの破片で右足の太ももを切り、治療する間もなく、昼寝していた二才の弟を母が抱きかかえ、姉と共に山の中腹にある防空壕に、大勢の人達と避難しました。

右足の血がなかなか止まらず、治療する薬もなく、近くにいた男の人がヨモギの葉を持ってきて、手の平でツバをつけてもんで止血めして下さったそうです。今もその傷跡が残っています。夕方になり、姉が防空壕の前から見た見た長崎の街は、山の中腹まで真赤に染まっていたそうです。長く苦しい防空壕生活のような気がしましたが、実際は三日間でした。

私は母に早く家に帰ろうとダダをこねたそうです。その間父に会うことがなく、母に「父も亡くなっ

たのか」と何回もたずねたようです。父は無事で、自宅の後片付けと近所の行方不明の方の搜索で、毎日朝早くから夜遅くまで行っていたそうです。

幼い時に恐い体験をした私は、大きな音や人の不意のくしゃみなどでビクツク人間になってしまいました。

大勢の人が亡くなり、後遺症で苦しんでいる被爆者も多く、また高齢化している現在、いろいろな問題もありますが、一日も早く核兵器も戦争もない平和な世界になりますように、被爆者は私達を最後にしてほしいです。

そして、戦争を知らない人達にも語りつぎ、受けついでいただきたい。これは被爆した私達の切なる願いです。本日はどうもありがとうございます。

(2001年)



夢の中で泣いていたお姉ちゃん

広島 民里八枝子

あの暑い夏の悪夢の朝、忘れようにも忘れることの出来ない五十七年前、広島に原爆投下。私は十一才でした。小学四年五年六年生は児童疎開。私は縁故疎開で父方のおばあちゃんの家、広島県高田郡向原に行っておりました。

田舎の朝は早く、草刈して帰って朝食を食べていました。その時、ピカッと光ったのでどうしたかと思ひ、直ぐに山の向こうの広島の方を見ると、あのきこの雲を見ました。昼すぎより、汽車が来るたびに土手のところまで行き、汽車を見ると窓ガラス

はこわれてドアもなく、顔から血が出ている人、全身傷だらけの人、なにが起きたか不安でいっぱいでした。夜、村の人が来て、「広島は新型爆弾でみんな死んだ。一人も残っていない」といわれ、父は兵隊に行っているし、私はとうとう独りぼっちになったと思ひ、夜中泣きました。とにかく汽車に乗って広島に行き、この目で確かめたかったのです。広島に行こうとすると、おばあちゃんに、「行つてはいけない」と言われ、でもどうしても行きたくて、とにかく駅まで行くと、そこにおかあちゃんとお姉ちゃんと弟の三人がいました。とてもうれしかったです。お姉ちゃんは夏の暑いのに、防空ずきんをかぶっていました。へんだと思っていると、お姉ちゃんはやけどしていました。駅員さんから、「小学校に救護所があるからいってみなさい」といわれて行きました。やけどした人、けがをした人でいっぱいでした。なかなか順番がこないの、家にかえりました。家に帰っておばあちゃんに話をする、

ジャガイモを擦ってメリケン粉をまぜ、それをやけどのところにあてて手当してくれました。

夜、お姉ちゃんが夢の中で、「ごめんネ、ごめんネ」といつて泣いているので、私が「どうしたん」といつて起こしました。お姉ちゃんは原爆投下の時、トイレの中に入っていたそうです。窓からピカツと光ったとたん、くびがやけそうに痛かったそうです。トイレから出て作業所を見ると、無残な姿、家の下敷きになった同級生が、「たすけて、たすけて」と叫び、声のする方を見ると、もうそこは火の海。どうすることも出来ず姉ちゃんは、手を合わせてそこからにげて、外に出ると焼け野原で火の海。そこの中を走って出たら、人から「そこに行くとかぶない」と言われたのですが、夢中で太田川の土手まで走って、三篠のほうに帰りました。家はなくこわれて、母ちゃん達は竹藪の中の防空壕に入っていたそうです。

広島駅から横川まで、一帯焼け野原。横川駅のそ

ばの米倉庫が、一週間燃え続けました。そんな中、おじいちゃんといこの米ちゃんが行方不明なので、広島に帰り町中さがしました。姉ちゃんと二人、おそろしいしこわいので、手をつないで歩きました。見つかりませんでした。ただし、おじいちゃん「土橋の方におった」といつて帰ってきました。それから一週間後、亡くなりました。あちこちの河原で無惨な姿の人をたくさん見ました。そして死体を焼くのも見ました。薪を積んでトタンの上に死体を乗せて焼いていました。この世の地獄です。

私達は原爆体験者として、戦争のない、核のない、世界中の平和を願い、二度とこんなことがないように祈り続けてまいります。(2002年)



姉をなくして

長崎 今宮 良介

昭和二十年八月九日、長崎に原子爆弾が投下されたとき、私は小学校五年生で、当時長崎市内から少し離れた島原半島の湯江村というところに疎開しておりました。

当日は夏休みで家にいたのですが、爆心地から直線距離で四十^キ強離れている所でも、原爆が投下された時間に、稲妻のような閃光を感じたことを今でもはっきりと覚えています。

当時は戦時下で情報も乏しく、夕刻になって長崎に新型爆弾が投下されたことを、ラジオのニュースで知りました。夜になると長崎市内方向の空が真っ

赤に焼けて、ただ事ではないということを察知したことを思い出します。

長崎の実家には姉と兄が留守を守っており、母としては、なんとしてもわが子の無事を見届けたく、駆けつけようとしたのですが、交通も閉ざされており、翌日もどうすることも出来ず、翌々日、十一日の朝になってやっと途中まで汽車が運行されることになり、六歳の妹と零歳の弟を連れ、取るものも取り敢えず母子四人で出かけました。長崎の三つ手前の長与という駅で下ろされ、そこからは徒歩しか手立てがありません。たまたま近くに知り合いの家があり、立ち寄ったところで、姉が被爆し亡くなったことを知らされました。姉は女学校四年を終え卒業後も学徒動員の延長で、報国隊として兵器製作所で、魚雷の製作に携わっていたのです。無事を願って駆けつける途中での、まさかの知らせでした。今になって思うと、そのときの母の心中、察するに余りあるものがあります。

どんなに悲しくても、その日のうちに市内の家までたどり着かなければなりません。幼かった私にはどこをどうやって歩いたかという記憶はまったくありませんが、ただ姉が亡くなったことが、小学生の私にも耐えられず、長時間、大声で泣きながら歩いたことを憶えています。

途中被爆して避難する大勢の人と出会いました。体全身に火傷を負っている人など、小さい子供を負ぶった親子連れもいて、目を覆わんばかりだったことは、今でも目に焼きついています。

翌日、単身赴任で他の地へ行っていた父も帰り、姉の搜索活動が始まりました。亡くなったことは知らされていたのですが、遺体をどこへ運ばれたかがはっきりせず、結局、二十^日近く離れた諫早市まで運ばれており、それも係の人の話を頼りに姿形から推測し、多分それであろうという遺骨を貰ってきたということでした。

後に聞いた話ですが、即死ではなく、火傷も負わ

ず翌朝になって、親兄弟のことなど気遣いながら死んで逝ったそうです。十七歳でした。

身内をなくしたことは何よりも辛いことには違いありませんが、広島、長崎の被爆者の中には、もつともつと悲惨な犠牲に遭われた方々がたくさんいらつしやいます。家族全員亡くなり一人ぼっちになられた方が、この江戸川区にもいらつしやることを聞いておられますし、私の知人にもそういう人が何人もおります。

そのほか、直接被爆はされなかったのに教え子の安否を気遣い救助、搜索に日夜奔走され、後に原爆症に罹り、お亡くなりになった女学校の先生の本当に頭の下がるようなことなど、お話は限りなくありますが、短い時間では全部をお話することは出来ません。

記憶の中で特に鮮明に残っていることが、もう一つだけあります。それは私の家から見下ろせる小学校の校庭で、幾つもの煙が立ち昇っていたことで

す。学校の体育館が被災者の避難所になっており、次々に亡くなったのですから、火葬場が間に合うはずがありません。異様な臭気とその情景が未だに生々しく思い出されます。

私の話は、幼いころの記憶で迫力に欠けていて、当時の悲惨な状況をうまくお伝え出来ませんでした。最後に次のことをお願いして、被爆体験のお話を終わります。

若い皆さん。どうかこのような傷ましい話をたくさんの方から聞き、それを後々まで大勢の方々へ語り継いでいただきたい。そして、親兄弟、更に子供まで奪い取るような戦争の愚かさ、平和の尊さを次世代へと伝えていただきたいと願っております。

(2002年)



「特攻まで

三日を残して生きのびた」

広島 高橋 清

広島に原爆が投下された日の朝、江田島の幸之浦にあった陸軍の水上特攻隊基地の兵舎の中で、私たち特攻隊員は、いつもより遅い朝の点呼を受けていました。前の晩、遅くまで夜間訓練をやっていたからです。

私が陸軍の船舶特別幹部候補生を志願したのは、昭和十九年の秋でした。太平洋戦争も負け戦が続き本土決戦近しいので、親の反対を押し切ったの志願でした。その時、私は十七歳、府立第三商業の五年生でした。昭和二十年二月に小豆島にあった教

育部隊に入隊、そこで船舶兵としての基礎訓練を受けた後、特攻隊に編入され、六月に江田島に配属されたしだいです。

点呼の最中、突然、兵舎の窓一面が光り、続いてすさまじい爆発音がして兵舎が激しく振動したので、私たちは反射的にその場に伏せになりました。これが原爆とは後で知ったことです。兵舎の中にいたため、キノコ雲は見るできませんでした。

夜間訓練はその夜も続けられ、私たちは一人乗りのモーターボートを操縦して、夜光虫のきらめく波頭を蹴立てて訓練を重ねました。

敵の輸送船団が本土に接近して上陸する直前に、夜陰に乗じて敵船団に接近して爆雷を投下して避難するか、それが駄目なら、体当たりして、特攻隊員一人が一隻を撃沈して本土上陸を阻止しようという作戦です。ところがこのモーターボート、ベニヤ板製で動力は自動車エンジン、これに二五〇^キの爆雷を積んでいるので、波にあおられると余り速く

走れない。

一方、敵の船団は駆逐艦や高速艇が嚴重に警備しているので、攻撃はむずかしく、生還はおぼつかないと思われました。戦後わかったことですが、江田島のこの基地から出撃していった特攻隊員は二千三百名、その内千六百四十名がフィリピン、台湾、沖縄で護国の華と散りました。当初相当の戦果をあげたため、敵の警戒は嚴重になったようです。

広島はその夜も燃え続け、空と海が赤々と明るかったのを覚えています。

翌朝、我が戦隊にも広島救援の命令が下り、私たちはダイハツに乗って広島へ向いました。

宇品に上陸して広島市内に近づくと、広島町の町が一夜にして消えうせ、見渡す限りの焼け野原に変わってしまったのに驚かされました。しかも無数の焼死体が、様々な姿勢で横たわっており、あとは屋根瓦やコンクリートの破片ばかりでした。

火ぶくれした黒焦げの遺体は、もはや男女の差も

区別できません。子供の遺体だけは小さいので分かりました。余りにも残酷な敵の無差別爆撃に、私は激しい怒りを感じました。

戦隊は何班かに分かれて作業を始め、たくさんの遺体を集め、山積みにして火葬にしました。太田川からも多くの遺体を引揚げました。負傷された人は一人も見かけませんでした。すでに収容された後だったのでしょうか。

近くに立っていた原爆ドームの中に入って、鉄骨だけが残った丸天井を見上げ、その向こうにまばゆい青空を見た時、私はこの忌まわしい戦争が一日も早く終るようにと、天に祈りました。

救援活動は三日間で中止し、戦隊は十日に江田島に戻りました。それから出撃準備に追われ、十五日の玉音放送も聞きそびれ、その晩遅く終戦と知った私は、余りのショックにその場に座りこみ、言葉を失いました。

私の孫娘が先日、こんな歌を詠みました。

特攻まで三日を残して生きのびた 祖父が迎える終戦記念日

孫娘は十七才、私が志願したのも十七才なので、私は複雑な思いにかられ、感動しました。

アメリカはイラクが大量破壊兵器を隠し持っているからと攻撃しましたが、広島と長崎に爆弾を投下して三十万人からの一般市民、非戦闘員を大量殺戮したのもアメリカです。その人道的責任、国際法上の問題をどう考えているのか、ブッシュ大統領に聞いてみたいものです。北朝鮮の核問題もあり、核の廃絶と世界平和を目ざして、これからも微力を尽くして参りたいと考えております。（2003年）



すべて強い強い放射能にそまつて

長崎 藤内 義雄

私は五才の時、昭和二十年八月九日、長崎市旭町四丁目で被爆しました。その日はよく晴れて夏のあついあつい日でした。

私は町内会で作られた防空壕の中にいました。夕方になって一人で恐る恐る外に出て見ると、草や木も真黒になっていました。空気はイオウのような強い強い臭いで立っていられませんでした。おばあちゃんと母が外から親類の家族のことを心配して帰ってきました。母の兄さんは長崎造船所で被爆し、上半身の姿を見つけない無言の兄さんになんともいえない涙があふれ、母は、なぜ？なぜ？と気が狂わん

ばかりでした。

母とおばあちゃんは顔は真赤にふくれあがり、赤鬼のようになり声が出なくなりました。

翌日、八月十日、私は、おばあちゃんと母に手をひかれ親類の家がある野母崎の高浜へ歩いて避難しました。見渡す限り黒い焼け野原でした。食物も水もすべて強い強い放射能にそまつていたのです。

サツマイモとイワシで育ちました。おばあちゃんもおばさんもガンで亡くなりました。父も母も被爆のせいか早く亡くなりました。この度、父母の名前を江戸川の前爆犠牲者追悼碑に納めさせていただきました。心から厚く厚くお礼申し上げます。

青い空

希望と勇気を与える

白い鳩さんへ ありがとう

平和こそ大切 命こそ大切
ほほえみながら 私に語る

人はみんな太陽の心をもっている
今日もまた人に言えない苦しみを
確かな希望を夢みて
のりこえた

未来の平和の博士たち

核戦争の後に平和はこない
人々の善なる魂のタイマツを
赤々と永遠に消えることなく
輝かせてほしい。

(2003年)



絶対に戦争反対

広島 宮内 良雄

私は軍隊におりまして、二十年八月六日、広島で被爆しました。

私は二十一才で現役入隊をし、すぐ硫黄島に行く特攻部隊に編成になりましたが、硫黄島に敵が上陸して行けなくなり、ロシア参戦に備えて広島に待機をしていたのです。

そのため演習は朝五時ごろから訓練につぐ訓練でした。この八月六日は雲一つないすばらしい天気、日本晴れの日でした。ちょうど演習もたけなわの八時一〇分すぎ頃空襲警報が鳴りました。

私達の中隊は林の中へ退避しました。するとB29

がやってきました。朝日を受けてキラキラ輝いて敵ながら見事だなど思っておりました。そして間もなく行つてしまい、空襲警報も解除になり、また演習を始めました。

その時また一機B 29が飛んできました。この時は馴れっこになつていたため、空襲警報は鳴りませんでした。そのため私たちは演習を続けたのです。「撃て」の号令がかかるのを待っている時、「ピカッ」と雷様の閃光を一〇も二〇も集めたくらいの、ものすごい閃光が走り思わず目を伏せ、身を伏せた頭の上を何かわからないものが通り過ぎ、ドーンという音がしたような感じがし、目を開けたところ、目の前に真つ赤な雲がぼつと昇り始め、それがどんどん上に登り、下から雲の柱が登って行きました。高く高くそれはただ驚きで、あたりは逃げまどう人で、蜂の巣を突つついたような状態になりました。私たちはどうする事も出来ずただ退散しました。

それからどうしたかは今思い出せませんが、翌日

広島の様子を見てただ驚きで目を疑いました。何もない、あれだけの建物が何もなくなつてしまい、一望の瓦礫と遠い向うの山のふもとにパラパラと家があり、それも皆屋根天井のない家があるばかりの広島になつてしまつたのです。原爆が空中で爆発したため上からの圧力が強く、満足なのは橋と煙突ぐらいのもので、五階くらいの建物も屋上から下へたれて、市内電車も飴のように潰れ、とにかく見るも無残な町になつてしまいました。

私たちはそれから負傷者の救援活動と死体の火葬に毎日頑張りました。やがて私たちの戦友から歯茎から血が出て、頭の毛が抜ける者が出てきました。

一発の爆弾でこのように二十万人の人を殺してしまうようなことがあつてはなりません。絶対に戦争に反対します。

(2004年)



今も脳裏から消えない

長崎 佐藤 美博

当時、私は小学校五年生十才で、爆心地より二・五^キ地点の片渕町に住んでおりました。「B 29が飛んでいる」と戸外で声がするので、二階の出窓から身体を乗り出してゐる時、ピカーと稲妻のような光線が光ったので、出窓から飛び降り、四才の弟を抱き下ろし、うずくまった時、ドカーンと音と同時に目の前が橙色に輝き、一瞬何が起こったのか呆然となりました。落下物と埃で一時間うす暗くなりました。あたりを見回すと、窓や屋根瓦が吹き飛び、空が見えました。今思うとよく咄嗟に行動できたと思います。そのままでしたら吹き飛ばされていたかも知

りません。人間の持つ本能でしょうか？ 金毘羅さんの陰で、熱光線は遮られましたが、直接熱光線を受けた人が、十年以上経過してから原爆症で死亡された話を聞いております。一階に降りていくと、母は前日、三男を出産し休んでいましたが、落下物で頭を切ったらしく、父が傷の手当てをして、七才になる妹は一階にいて無事でした。

町内の防空壕までは遠いので、今日（こんにち）の長崎大学グラウンドの防空壕へ避難しました。夕方になると軽傷者が迫り着き救護を受けました。この時のショックで母乳が出なくなり、母子ともに大変な思いをしました。他の姉妹はみな母乳で育っています。十三才の姉は、学徒動員で三菱兵器製作所のトンネル工場（爆心地から一・九キロ）に勤務していました。九日朝、警戒警報が解除になったので出勤しました。大橋終点で市電を降り、トンネル工場へ行く途中で被爆し、工場に辿り着いたようです。

翌日、父は姉を捜しに行きましたが、姉は工場の

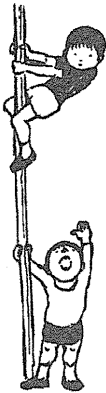
方々に看護されましたが重傷なので、どこかに送られ、行き先が分からず帰ってきました。市役所の罹災者名簿を頼りに行きつくと、また転送されていたそうです。

十四日、大村海軍病院に收容されていることがわかり行きましたが、全身やけどの重傷で手厚い看護をされていましたが、十三日に死亡し火葬され、お骨を抱いて帰ってきました。もう二日早ければ会えたのにと、嘆いていました。姉であることが実証されたのは、首に掛けていた市電の定期券でした。行方不明者の多い中、手厚い看護を受け、身元が分かったのは神仏のお陰と感謝しております。浦上駅前で時計店を営んでいる母の兄にあたる伯父の安否が気掛かりでしたが、爆心地に近く家の倒壊と火災で逃げられず親子抱きあった形で骨になっていたそうです。

十三才の従姉妹も学徒動員で家にいました。伯母はお産のため、三人の従兄姉と佐賀へ疎開していた

ので無事でした。伯母は十六日に四男を出産しましたが、ショックで母乳が出ずミルクで育ちました。伯母一家も罹災者住宅に入居できるまで、私の家に同居し、野菜売りをしながら五人の従兄妹達を成人させました。消防団に所属していた父は、爆心地近くで死体の片付けに従事し、悲惨な様子を話し、苦労した父も昭和四十一年、胃がんで他界しました。今日、原爆犠牲者追悼式に参列し、私の体験を述べると共に広島・長崎で亡くなられた方々のご冥福を祈りつつ、核兵器による恐怖のない、平和な暮らしが永遠に続くことを祈ります。

(2004年)



終生貫く「戦争は嫌だ」

広島 奥田 豊治

私の原爆体験をということですが、私は直接被爆ではなく、入市被爆者です。

昭和二十年八月、私は十五歳で、山口県立豊浦中学校の四年生でした。八月と言えば平和な時なら夏休みで、海へ山へと楽しい時期ですが、何しろ、戦時中です。空襲で焼け野原になった下関から、神戸製鋼所長府工場に通っていました。つまり動員学徒です。

余談ですが、この工場は飛行機の素材になるジュラルミンを作っていました。一万三千人くらいの人々が働いていましたが、中堅になる熟練工は召集され

て戦場に行き、年配の技術者と私たち動員学徒が主力でした。私は原鉱石を溶かす反射炉の操作や、インゴットの製造に従事していました。私の体には未だやけどの跡があちこちに残っています。

そうした毎日の中で、私たち少年の夢は軍人になつて戦うことでした。今思うと教育の恐ろしさを感じます。私はその年の春、陸軍予科士官学校を受験し、連隊区で二番という成績で一次試験を通過しました。

合格発表があつた当日から、身辺調査の憲兵が派遣されてきました。二次試験は、八月十日、十一日、広島にある中国軍事司令部で行われることになっていました。

*

ところが八月六日の夜、その憲兵さんが来宅し、「広島に新型爆弾が落とされた、大変なことになっているらしい。今から自分は広島に行く。君も出るだけ早く広島に行きなさい」と言われました。

翌七日は、工場への欠勤届や乗車券の入手で過ぎ、八日の朝、下関駅から山陽本線の列車に乗り込みました。当然のことながら、ダイヤは滅茶苦茶に乱れ、いつ広島につけるのか、皆目わからないとのことでした。

動いては止まり、止まっては動くの繰り返しで、岩国あたりで夜になったのでしょうか。ぐっすり眠り込んでしまいました。目が覚めると己斐の駅で止まってしまいました。今は西広島駅と言うのでしょうか。見ると駅舎がささらのようになっていました。

夜が明ける頃、横川の駅に止まりました。コンクリートだったのでしょうか、改札口が残っているだけで、あとは何もありませんでした。山の方を見ると山の谷間だけが焼けています。熱風の通り道だったのでしょうか、その時は不思議な気がしました。

太田川を渡るときに見たモノは、水の面を埋めた黒こげで腹がパンパンになった馬の死体と、その間

にある黒こげの人らしきものでした。

八時頃、やっと広島駅に着きました。駅舎は壁だけが残っていました。広島駅から中国軍司令部のある広島城までは、何番の電車に乗って……と暗記していたのですが、駅を出ても電車がありません。それどころか、街が無いのです。

下関も六月二十七日に大空襲があり、市内のほとんどが焼けてしまい、その中で生活していたので焼け跡には慣れっこになっていたのですが、駅を出て目にした情景は、全然違っていました。

建物が、上から巨大な力で押し潰されたような形で燃え落ちていっているのです。未だ煙が出ている建物もありました。ペッシャンコになって焼けた家が、ずっと続いているのです。その下には亡くなった方が大勢いらっしやったのだと思います。

仕方なく、知らない道を南に向かって歩き出しました。行けども行けども焼けた檻樓(ぼろ)屑の並んだ平野です。

押し潰されたような電車が何輛もありました。中には死体、モーターの金属が溶けて鋳流れになっているのに驚きました。毎日、金属を溶かしていただけに、熱量の凄まじさを感じました。

行き交う人で、まともな姿をしている人は救援に來た人で、被爆した人は、手も顔も爛（ただ）れたボロボロの姿でした。

真夏の日差しを照りつける中、迷いに迷い、ふらふらになって広島城にたどり着きました。お城も石垣だけでした。やっと、頭に包帯を巻いた副官を見つ、敬礼をして申告したところ、「今はそれどころではない、すぐ帰郷するように。追って指示する」と言われました。

がっかりして、急にのどの渇きを覚えたので水飲み場を探しました。運よく蛇口を見つけたので思い切り水を飲みました。ほっとして傍らを見ると、檻樓の山だと思っていたのが、何と死体の山でした。おそらくお城の中で亡くなった兵士たちでしょう。

*

異常な環境と暑さで、頭が変になり「早く下関に帰ろう」と思い、ふと前を見ると原爆ドームがありました。その前辺りにキリンビールの絵を描いたタイル張りのような壁がありました。そのキリンの色が、周囲の状況とあまりにも異質で、毒々しかったのが印象的でした。一体あれは何だったのでしょうか。ご存じの方がいらつしやたら教えていただきたいと思えます。疲れていたのか、暫くの間その辺りで休息し、重い足を引きずって広島駅に向かいました。

途中、「中国司令官」とフロントガラスに貼ってある車が通り過ぎました。後部座席の将官は頭に包帯を巻いていました。

道に迷い、元氣そうな人を見かけると道を尋ねました。呉から救援に來たという男性から、「ピカドンの様子を聞きました。救援看護士さんは「今日あたりから蛆が湧くんです」と言っていました。

どこの桶の手前か分かりませんが、前を、小学校四年生ぐらいの少年が「お母さん、お母さん」と泣き叫びながら、長い棒にすがって、片足を引きずりながら歩いていました。後ろから見ると、シャツが破れて垂れ下がっています。近づいて見ると、それはシャツではなく、背中の皮膚が剥がれて垂れ下がっていたのです。可哀そうですが誰もどうすることもできません。同じような人が広島街中に溢れていたのです。

その時です。軍国少年で陸軍士官学校に行こうとしている私が、「戦争は嫌だ」と、心の底から思ったのです。人間なら、誰でもそうでしょう。

さて、黒焦げの町を痛ましい姿の人を見ながら、何とか広島駅に辿り着きました。辺りはすっかり暗くなっていました。

勿論、定時発車の列車などありません。動きそうな客車ありません。構内を見ると、空の炭車が沢山ありました。石炭と言えば筑豊です。これに乗っ

ていれば下関に帰れるかも知れないと思い、電線を巻きつけた大きなロールを、幾つも積み込んだのである炭車に潜り込みました。電線の陰で、粉炭のざらざらする床に寝転ぶと、今日一日の心理的、肉体的な疲れからすぐに寝込んでしまいました。

目が覚めたら、列車は、元いた場所とは違ったところにいました。何時間寝ていたのか、ひよつとすると一日中寝ていたのかもしれない。また、すぐ寝込み、次に目が覚めた時は大竹を過ぎた辺りだったようでした。どれぐらいの時間が経ったのか、覚えていまま、やつと下関に帰り着き、自宅で泥のように寝込みました。

広島で、ずっと苦しんでおられた方には申し訳ないと思いました。私が広島で学んだ「戦争は嫌だ」を終生貫くことが、せめてものお詫びになるかとも思い、今日まで生きてきました。これからも、そうしていきます。

(2005年)

内臓がほとんどなくなった体で

長崎 嶋口 信子

この度、被爆体験を語る機会を頂きました。当時まだ五才の幼い私にも強烈な印象が残っています。真昼のような光が、長崎の街をおそろしい光景へと変えた痛ましい出来事でした。原爆が投下されたあとの苦しみで泣き叫ぶ被爆者たちの声、「水を下さい」「助けてください」。その声に幼い私はただただ恐ろしく、母の胸に顔を埋めて泣いたことでした。

また、父等が集めた、黒い塊になった人間の死体が発する強烈な臭気であり、その状況に私は、ひた

原爆犠牲者追悼碑「碑立のことは」

一九四五年八月六日・九日、広島と長崎に原爆が投下され、一瞬にして数十万人の生命が消えました。炎天下、水を求めながら亡くなった人たちに、どうぞ、あなたの手で一ぱいの清水をたむけてください。

この碑の建立にあたっては、「原爆の図」の作者丸木位里・俊夫妻が絵筆をとり、江戸川在住の被爆者二百余名と区民がノミをふるい、多くの人の協力がありました。

原爆は人が落とさなければ
落ちてきません

この碑によせる人々の心が
平和の礎となることを念じて

一九八一年七月二六日

江戸川区に原爆犠牲者
追悼碑を建立する会

すら泣き叫びつづけたことを記憶しています。

戦後発展をとげた今日、私達被爆者に残されたものは、未だに忘却しきれない当時の記憶と病魔という形で、今なお終戦を迎えられずにいると思います。

私の父母も若くして白血病、がん、兄弟も糖尿病、肝がん、胃がんで亡くなり、生存する者もやはり病気をかかえながら生きています。私も幼いころから病気がちで、右腎臓摘出、C型肝炎、卵管摘出、糖尿病、胃がん、その他数かぞえきれないほどあります。病院の先生方もレントゲンを撮ると、「内臓がほとんどないのに、よく生きているよね」と頭をかしげます。

経済大国となった日本に、このような形で戦争を引きずるものがあることを、ぜひ知ってほしいのです。戦争の残すものは憎しみと精神的、肉体的苦痛しかありません。

世界中を見渡すと正義の名のもとに、戦争・紛争

が繰り返られています。指導者に私は聞きたい、あなたは自分の子供、孫を戦地に向かわせ、苦痛を強いることが出来るかと。

今、大事なことは、世界が一つの絆で結ばれた「家族」という認識ではないでしょうか。

もう二度とあのような経験を子供、孫たちにさせたくないという思いが、平和な世界へとつながるものと確信し、結びとさせて頂きます。

(2005年)



二度と原爆が落ちないように

広島 中岡喜美子

会長の銀林さまより「被爆体験を話すように」とのことでしたが、私はお断りをしてきました。十五才で被爆し、この世の地獄を見た者にとりまして、あの惨事は二度と話したくないと心の奥に封印して過ごしてまいりましたからです。被爆した人は皆同じ気持ちだと思います。

今、七十七年生かされて、先が見えてまいりました。友達のなかには、自分史を書いて子供、孫に残す方もおられます。

私は県立第一高等女学校四年生で、学徒動員で向洋（むかいなだ）の東洋工業で働いておりました。八月

六日の朝も、鉢巻きを締め、防空頭巾と非常袋をさげ、市電に乗り産業奨励館、今の原爆ドームの前を過ぎ、広島駅で国鉄に乗り換え、一駅先の向洋駅に下車。工場に着いて、機械にスイッチを入れて間もなく、窓に閃光と爆音、ガラスの破れる音でとつさに機械の下に潜りました。一瞬の静寂！ 人々の叫び声で外に飛び出すと、広島の上に大きなきのこ雲。警戒警報もなく何が起きたのか誰にも判断がつかません。三十分位経ったでしょうか。軍用トラックに寄せられ運ばれてきたものは、皮膚と衣服がだらりと剥げ、全身黒焦げで人間とは思えない姿の被災者たちでした。急いで舗装道路に簾を敷き、食用油を綿に含ませて皮膚に塗るだけの手当をするしかありません。「痛い！」「水を飲ませて！」「この住所へ知らせて」と口にされますが、次々運び込まれる被災者に手が回らない状態で時間が過ぎました。夜になって、三時間歩いて安古市（やすふるいち）という村の祖父の家に着きました。

広島練兵場に勤勞奉仕に行っていた中学二年の弟は先に家に着いており、顔を火傷をした友達を数人連れて来て、彼らは部屋に寝かされておりました。翌日死体を避けながら市内の自宅に辿り着くと、焼け跡に焦げたシンガミシンと五右衛門風呂が転がっておりました。母は三歳の弟を抱いて、納屋に物を取りに入り下敷きになりましたが、母屋が焼ける前に這い出て助かりました。しかし、その弟は十一月に亡くなりました。放射能に焼かれて二十万の人間がのたうちまわっている時、アメリカをはじめ連合国では、日本に原爆が落とされたと、拍手喝采が起こったそうです。

九・一一の貿易センタービル爆破事件の折、アメリカ国民が、「原爆が落ちたようだ」と表現しておりましたが、私は「天罰だ」と思いました。どうか地球上に三個目の原爆が落ちないことを祈って、終わらせていただきます。

(2006年)

この世のものと思えないほど

長崎
道下イツ子

長崎への入市被爆者です。

八月九日、美しくすんだ青空。母は昼食の用意、父は近所のおじさんと防空壕を掘りに行っていました。私は妹と家の中でブランコを作って遊んでいました。突然、ピカーと光り、ドーンと大きな音がした。急ぎ裏の防空壕に入り時を待つ。それからどれ位の時間が過ぎたのか、町の方に大型爆弾が落ちたらしい、安全なところに逃げるようにとのこと、山の中に掘ってあった防空壕へと父におんぶされて行く。昼間だというのに周りはず暗く空からは紙の燃えかすのようなものが、あたり一面ハラハ

ラと落ちてきました。

でも母には、この一瞬の出来事のなかに悲しい知らせがありました。爆心地近くに住んでいた兄一家全滅。幼いころ親を亡くし、他人の手で別々の家庭で育てられ大きくなって兄妹であることを知り、これからという時のこと。母の失意と悲しみは計り知れないものがあつたと思います。その母も胃がんを患い七十四才で、両親や兄の待つ天国へと旅立って行きました。

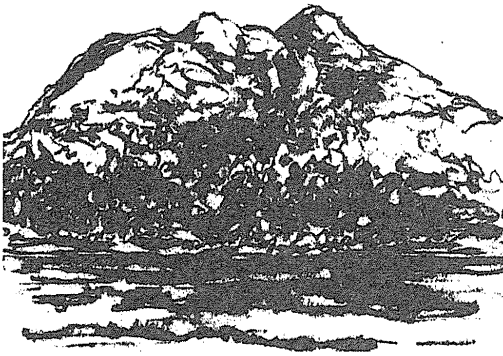
次の日からは、原爆でヤケドやケガをした人たちが、戸板に寝かされ小舟に乗り、身内の所へ帰ってきます。子供は見てはいけないと言われ、大人の後ろにまわり岸辺の方からそつとのぞきました。私の目のなかにとびこんできたものは、炭のように真っ黒に焼けた顔、目は細長く白くなり、口を開けると中まで真っ赤、子供の私にはこの世のものとも思えないほど恐ろしくて恐いものでした。

あれからもう六十一年、半世紀も過ぎ去り、私の

記憶の中から薄らいでゆくものがあります。

でも決して忘れてはならない、幼い日の出来事なのです。

(2006年)



姉は今も行方不明

広島 菊野 孝人

昭和二十年八月六日、その日は勤めていた造船所が非番で、牛田本町の自宅中庭の縁側に腰を下ろしていたとき、原爆が炸裂。ドーンと言う音とともに吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。一瞬のことで、何が起こったか分からず、腰が痛くて立ち上がれなかった。家は傾き、壁土も落ち、解体現場みたいにすごい土ぼこりで目も開けられない。口にも壁土が入っていた。家の中にいた弟は倒れた洋服ダンスの下敷きになっていたので、すぐ助けた。周囲は薄暗かった。

外に出ると、二階のベランダに干してあった布

団がくすぶり燃えていた。すぐ水をかけて消した。原爆の熱線を直接に受けたために発火したのだ。爆心地から二・五^キ離れていたのに。その時、外に立っていた隣の奥さんは光線を受けたところが焼け、火ぶくれになっていた。

また空襲があるからと、みな近くの畑に避難し、数日を過ごした。壊れた家から食べ物を探し出して食べたと思うが、何を食べていたか記憶にない。支援はなかった。市街地方面の燃え盛る炎と黒煙は忘れられない。

当時の家族は、両親と子ども男四、女二。両親は末っ子の女の子を連れて比婆郡に疎開。牛田の自宅には、陸軍病院勤務の姉（十九歳）、私（十八歳）、弟三人（いずれも国鉄勤務、非番で在宅の弟、出張中の弟二人）が住んでいた。

姉が帰宅しないので、火の手が見えなくなつてから陸軍病院に行く。神田橋を渡り通いなれた道は歩けない。死体はごろごろ転がり、電線はぶら

下がり、廃墟だった。その瓦礫の中から助けを求める声、水、水の声。耳をおおって、ただ病院へ急いだ。陸軍病院の建物は影も形もなく、門柱だけが立っていた。人影はなく安否確認は出来ず、帰宅。

両親の疎開先に落ち着く。出張中の弟たちも無事であったが、姉の姿はなかった。後日、陸軍病院から、「戦死された」と紙一枚が届いただけ。遺体も遺骨も遺品もない。姉はどこで、どのようにして被爆し、亡くなったのか、今もってわからない。

敗戦後、軍需工場だった造船所は閉鎖。父の興した月賦販売の住宅建設会社を手伝っていたが、技術を活かし、親戚の医療器具の会社で七十半ばまで、医療器の設置とメンテナンスのため全国各地に出張。忙しく夢中で働いてきた。

江戸川区に住んで、三十五年。息子も娘二人も独立。いまは家内と二人暮らし。だましだましで

何とか乗り切ってきた不整脈が悪化、数年前からペースメーカーを入れている。弟三人は四十代の若さで亡くなる。いまにして思えば、原爆のせいには違いない。

戦争はもう絶対、駄目です。

(2007年)



急逝した張本敏策さんの体験

西本 宗一

広島で被爆した西本と申します。はじめに、わたしが今日、張本俊策さんの体験を伝えることになったいきさつからお話したいと思います。

被爆後六十年以上も経ちますと、被爆者も高齢化して、追悼式で被爆体験を話す人を探すのが年々難しくなっていますが、同じ人は話さないという原則で、二十七回途切れることなく続いています。

ことし五月、追悼式の準備委員会が開かれた頃、銀林会長から、長崎の被爆体験を証言する適当な方が見つからない、とお聞きしました。わた

しは、船堀にお住まいの張本さんはどうですか、昨年の親江会の新年会で席が隣りになった時、体験発表する方が少なくなった現状を話すと、「今年は仕事がつまっているから駄目だけど、来年なら体験発表できる」とおっしゃったことを伝えました。すると銀林さんは、あの方は昨年、亡くなられました。最近知ったことですが、と。あんなにお元気だった張本さんが亡くなられた。びっくりしました。

昨年の新年会で一緒にいた張本さんは、ちよびひげに蝶ネクタイ、なかなかダンディな方でした。わたしは初対面でした。中国との貿易関連のお仕事のように、いただいた名刺には、合弁会社の経済顧問とありました。

昨年も広島の体験を話すことになっていた方が、当日体調がすぐれず、代わって若い方が代読されました。今日の追悼式のため張本さんが書かれた原稿はありませんが、ご本人が書かれた原爆

症認定申請書があることがわかりましたので、最後にお話したのはわたしだったということから、紹介するように言われました。

張本さんが書かれた原爆症認定申請書が手元にありますので、それをもとにお伝えします。

＊

張本さんは大正十年三月二十五日生まれ。昨年お会いした時七十代と思いました。とても八十六歳には見えませんでした。十八歳で陸軍航空隊に入隊。お国のために働こうとする若い愛国青年でした。

八月九日、長崎に原爆が投下されたとき、爆心地から二・三^{キロ}にあった稲佐町の稲佐警察署の会議室におられました。九時から陸軍、海軍、警察、警防団など関係者が集まって防空演習の打ち合わせをしておられるところでした。広島の新型爆弾に備えるにはどうすればいいかなど話題になっていたそうです。

青白い閃光を感じた瞬間、室内の全員が爆風で吹き飛ばされ、気がつくとき、張本さんと副署長さんは警察署の前にあった防火用水池の中にいたそうです。後頭部と首からべつとり出血していた。まわりは薄暗く、ほこりやゴミが立ち込め、太陽は、黒ガラスを通してみるような小さなトマトに見えた。出血止めの応急処置を受けられ避難されますが、食欲不振、吐き気、歯茎からの出血、下血、頭の毛が抜け、下痢、ひどい脱力、倦怠感、被爆者がみな経験した急性放射能障害の経過が書いてあります。

健康そのものだった張本さんは、被爆後は、肺に水がたまる、脊椎が化膿する、不整脈、前立腺肥大、狭心症、心筋梗塞など、書ききれないほど多くの病気をしながら、生きて来られました。

病院のカルテによれば、去年の新年会は二月の始めで、その時は忙しく働いておられたのに、三月になって、咳が止まらず、血痰も出ることもか

ら、飯田橋の東京厚生年金病院で精密検査を受け、肺がんが発見され、脳にも転移していたため、ガンマーナイフ治療を受けておられた。外科的手術をしないで、外部から放射線でがん細胞を殺す、患者にとつてつらい治療だそうですが、治療入院中の八月に亡くなられました。張本さんは、ひとり暮らしで、病院から淋しく旅立たれました。

主治医の堀江先生は、張本さんのがんについて、「被爆との因果関係は否定できない」と診断書に書いておられます。

広島・長崎の原爆投下によって、日本の戦争は終わりましたが、被爆者には六十年たつたいまも、まだ放射能の後遺症は続いています。繁栄のためなら、国益のためなら、核武装も必要だと考える政治家が多くなっていることを最近、新聞で知りました。何かにつけて世界で唯一つの被爆国・日本と言われますが、核兵器を使うとどうい

う結果になるのか、ヒロシマ・ナガサキの歴史的事実をもっとしつかり知って欲しいと思います。

張本さんは、自分の生活に起こったこと、数えきれないほどの病気が、原爆の結果であることを国にはつきり認めてほしいと、認定申請の書類を整えられましたが、提出前に亡くなられました。

張本さんは、ご自分が、きょう、ここに立って「もう核兵器を使わないで、戦争する国にならないで」と訴えたかったと思います。残念です。

わたしも、張本さんの願いを引き継いでいきます。

(2007年)



ユキエちゃんのこと

広島 畑谷 由江

私は昭和二十年八月六日、広島市横川町二丁目、爆心地から一・五^{キロ}のところで被爆いたしました。国民学校二年生、七歳の時です。

その日は朝から暑く、よく晴れた日でした。八時一五分、ピカッと光りが目に入った瞬間、家の暗い地下に爆風で飛ばされ、一時、気を失っていました。周りのざわめきで気がつきました。その時、何が起こったのか理解できません。目の前に鉄格子の梁に閉じ込められたユキエちゃんがいました。私の大の仲良しの友達です。逃げようと言いましたが、ユキエちゃんは身動きが出来ませ

ん。ユキエちゃんとふたりで、「助けてー」と泣き叫んでいました。

母が気づいて来てくれましたが、地上に出るはしごがないと出られません。母がどこかではしごを見つけてきて、私の手が届くところまで降りてきました。とにかく前に進もうと、私はユキエちゃんを後ろから押すのですが動きません。何度繰り返しても動きません。母にユキエちゃんが動けないことを伝えますが、「火の海になるから早く早く」とせかします。

ユキエちゃんは小さな声で、「由江ちゃんは早く行って」と何度も言ってくれました。私は決心してはしごを登って行きました。地上は火の海の状態です。

私はユキエちゃんを見殺しにして逃げたのです。命ある大切な人を見殺しにして逃げるのです。悲しく苦しく辛く、涙を流しながらその場を離れました。私の残酷な生涯の始まりです。

地上に出て、母は私の手を握り振り向くことも出来ず、北の方面に逃げました。

途中、肌の垂れ下がった人、目玉が飛び出している人、全身血を流している人、水、水と言いながらよろよろ歩く人、川の中に水を求めて入る人、川は人間でいっぱいです。まるで地獄にいるようでした。

しばらく逃げたところで雨が降って来ました。

黒い雨です。全身に浴びました。

夕暮れ近く、母の遠い親戚に身を寄せることが出来ました。

それから私も母も体のけだるさ、脱毛、吐き気、頭痛などが始まり、食欲もなくゴロゴロしていました。一時は(中学、高校のころ)元氣になりましたが、二十歳ころから病院との縁が切れなくなりました。

病名もたくさんあります。心臓、肺などの病氣になり、二、三週間入院したり、それから肝機能

障害、狭心症、白内障、脳梗塞、骨粗鬆症、腰痛に、いろいろな急性症状が出て救急車で運ばれたこともあります。現在も月一回の検診と、薬も数種類飲むことが欠かせません。本当につらいことです。

私は兄も直爆で亡くしています。父は身体にガラスの破片を残し、母は長年頭痛のつらさを我慢しながらつらい生涯を終えました。こうした苦しみは広島・長崎で終りにしていただきたいです。体験しないと分からないことばかりですが、核の恐ろしさを一人でも多くの人に分かっていたきたいと思います。

私が今日あるのはユキエちゃん、兄の大切な命をもらったからだと思っています。

これからも話せる限り、核の恐ろしさ、戦争の怖さと命の大切さをお伝えできればと願っています。

(2008年)

父と次兄との別れ

長崎 大楠 栄子

私が長崎で被爆しましたのは五歳で、あまり記憶にありません。今日は同じ長崎で被爆した夫・武徳の手記を読ませていただきます。

*

故郷は遠くになりにつれだ。長崎で生を受け、十一歳で被爆し、父と次兄とは永遠の別れとなった。

私の通っていた国民学校の校庭では、廃材を積み上げて、集められた遺体を火葬する。その情景は心の奥底に焼き付けられて離れない。

爆風で雨漏りのするわが家の生活は、母親の細腕ひとつで、シベリアからの長兄の帰国を信じ、郊外の農家で着物と物々交換や病院の雑用をこなす、獅子奮迅（ししふんじん）の活躍で、なんとか三人の子育てをする。

そんな中、私は十八歳で上京し、東京での生活が長くなった今日、六十五歳で仕事を引退するまで、幸い被爆の症状も少なく、月日が推移した。

高齢者をとりにまく環境はやさしくないが、家族をはじめ周りに迷惑をかけないよう老化にめげず、毎日を心身の健康管理に頑固に取り組んでいる。

残された人生を全うして、いつの日か「千の風になって」里帰りしたいと思うこの頃である。

*

ありがとうございます。

（2008年）

「兵隊さん、探してください」

広島 檜木 実

私は九州の福岡から、陸軍幹部候補生として陸軍兵器学校広島校に入学するため、昭和二十年二月、広島に来ました。

八月三日からは、船舶を建造する松の木の伐採や松根油（しょうこんゆ）採取など訓練のため、宮島（厳島）に宿営しておりました。

六日の朝、小学校の校庭に集合し、ラジオ体操をしていたときでした。稲妻の光に似た閃光があつて、ドスンという音とともに地震のような揺れを感じました。広島市の上空には円筒形の黒い雲が上がっていました。宮島の校庭から見た原爆

です。

校舎に避難せよと言われしばらく退避していましたが、至急、学校に帰るよう指令が出たので、教官も学生も完全武装して宮島港から上陸用舟艇で、天満川橋近くの波止場に帰港しました。天満川には倒れた家屋の材木や血に染まった死体などが流れており、周辺には熱線と爆風によって傷ついた人々があふれていました。

私たち生徒は命ぜられるまま上陸し、隊列を整えて学校に向かう途中、血に染まった衣類を着た子どもから「兵隊さん、お父さん、お母さんを探して」とか、子どもを捜す親たちからは子どもたちの名前を告げ、「兵隊さん、探してください」と依頼されましたが、首をたてにふらず、江波町にあった学校に直行しました。

それからは負傷者の救護と遺体の処理に明け暮れました。細部については話せません。お許しください。広島師団江波町射撃練習場には遺体が山

積みで悪臭がひどく、倒壊した材木を集め火をつけて遺骨にし、地中に埋める作業も致しました。

九月上旬には福岡の実家に帰りましたが、帰省後は体の調子が悪く、母や姉たちは、「言葉もはっきり話せないような状態だった」と言います。

後で判ったことですが、原爆ドームを中心とした直径一キロ内の家は倒壊し、熱線で焼失し、二キロ以内ではほとんどの家は倒壊、一部の丈夫な建物だけが残り、市内にいた四十万人の内二十万人の人々が犠牲になったと聞きました。

こんな大きな被害を出した昭和二十年八月六日の広島原子爆弾、八月九日の長崎の原子爆弾は決して二度と投下されてはならないと考えています。いまなおアメリカやロシアが保有する原子爆弾の威力は広島・長崎と比べ物にならないといわれています。核戦争による人類滅亡を防ぐため、核のない世界にするために皆さまで一緒にがんば

りたいと思います。

健康には自信があつた私は、被爆後は、クモ膜下出血、脳梗塞や胃のポリプ切除等、薬が離せない治療生活です。原爆による放射能が私の病気を引き起こす原因であると考え、原爆症認定訴訟の原告にもなりました。

(2009年)



人間は、いつでも悪魔になる

長崎 高比良 毅

八月九日午前九時ごろ空襲警報が発令されたので、町内の防空壕に入りました。午前十一時、警戒警報に戻り「やれやれ」と外に出て、飛行機の音に皆が空を仰ぎました。「何か落ちて来よる、おかしかね」。落下傘が落ちていのです。その瞬間「バーン」と弾けるような音と共に黄金色の光に覆われました。一瞬「雷か太陽が落ちたのか」と思いましたが、すぐに「強力爆弾だ」と直感、目と耳を塞ぎ伏せました。その後は爆弾の音

もないので、急いで壕に駆け戻ろうとしたとき十層ほど空中を飛び、脚を切りました。壕の入り口の扉がちぎれそうになっていたもので、あとから強力な爆風が襲った事を知りました。まんじりともせず母を待っていました。夜中、母が無事壕に帰ってきたのでひと安心。

外に出てみました。長崎駅、県庁、その先の浦上がすべて火の海。幾筋も幾筋も炎が上で繋がり、二百層上空でまた大きな炎の束になって、立ち上っていました。勝利、勝利の報道に、日本はこの戦争に勝っていると十歳の子ども心に信じていたのに、「もう日本は終りだ」と思いました。恐ろしい一日でした。

父は、被爆特別手帳を持っていましたが、結局、肺がんで亡くなりました。また、私が二十歳のころ、級友六十名の内十名近くが亡くなりました。白血病、肺がんなど、ガン系が多いのです。亡くなった人数を調べようと思いましたが、広

島・長崎の人数が、実ははっきりしていません。どんどん亡くなっていたからです。一番確かなデータによると、十二月初旬、広島で十二万五千人、長崎では三万七千五百人が熱線と高エネルギーの放射線で亡くなっていました。ところが四十六年の発表では、四十五年末推定では広島で十五万五千人、長崎で七万四千人となっています。広島は三万人、長崎は二万七千人の増加です。これこそ低エネルギー放射線被曝の結果ではないかと思うのです。たった二個の爆弾で、江戸川区人口六十八万の三十割が一年間で亡くなるのと同じです。さらに落とした国の人は直接むごさを見ていないし、原爆が平和をもたらしたという教育などにより、悪いという意識があまりないようです。

オバマ大統領は、「原爆使用国の責任として、核兵器なき世界に」と発言しました。また、私たちは「核兵器は非人道的」とずっと言い続けてき

ました。むごく、辛い体験を心に閉じ込めてしまつてはダメです。今こそ、声を大にして「私たち人間はいつでも悪魔になるものだ」ということを、この悲惨な兵器のことを、若い小中高生のみなさんに伝え、そして、核兵器を無くす努力を彼らに継いでほしいと思います。経験話せる人は齢七十を超えてきていますので。

(2009年)



アウシュビッツ

原爆の子

広島 賢 泰夫

六十五年前、広島上空九六〇〇呎でエノラ・ゲイという母親が身長三呎、体重四ポンドのリトルボーイという坊やを産み落としました。この子は、六〇〇呎時点で自爆。このクソガキは地表温度、摂氏三〇〇〇〜四〇〇〇℃の熱線、大量の放射線、二ト車十台分の風圧を伴う爆風、目や内臓が飛び出る異常な高気圧をもたらし、十四万人の命を奪いました。

長崎も同様で、使用したB 29は「グレートアークス」から、現在良く耳にする「ボックス

カー」に変更され、「フアットマン（ふとつちよ）」を落としました。アメリカは台風にも女性の名をつけるぐらいで、このようなふざけたネーミングは当たり前なのでしょうが、受けた側としては耐えられないことで、洒落にもなりません。

私が被爆したのは比治山国民学校二年生、七歳の時でした。爆心地より東側に比治山と呼ばれる七〇呎ほどの小高い山があり、その山の東側・広島市南区東雲町一丁目に私の家がありました。爆心地から二・七キロの地点でした。そこは高い塀に囲まれた兵器を調達、修理、補給する陸軍兵器廠の裏に位置していました。

私は家のすぐそばの防火水槽で、上半身裸、パンツ一枚で水遊びをしていました。ピカッ・ドンと強烈な光、強烈な音、何がなんだか判らず、慌てて家に帰ったことを記憶しています。その時の様子は年齢のせい、断片的な記憶しかありません。

ん。キノコ雲はみたような気がします。黒い雲は見ていません。近所の学徒動員に行った学生さんたちが中心部から帰宅する頃から、事の重大さを認識しました。我が家は爆風で瓦は飛び、壁は崩れ落ちましたが、幸いにも原型は留めていました。おそらく比治山と兵器廠の高い塀が爆風をガードしてくれたと思っています。当日の夜は裏の畑に蚊帳を張ってすごしました。燃え盛る中心地の炎が見え、恐怖を感じました。

当時被爆地で暮らしていたのは、父母、父方の祖母、三歳下の妹の五人でした。四歳上の兄、二歳上の姉は二〇^五離れた廿日市の寺に学童疎開をしていました。父は広島鉄道管理局に勤務していて、当日は宇品線で広島駅に到着と同時に被爆しました。幸いにも無傷で、間もなく帰宅しました。時間の経過とともに爆弾の正体がわかって来ました。近所の学徒動員で被爆された女子学生さんの連日連夜の苦悩の泣き叫び声は今も耳に残っ

ています。また比治山国民学校は幼児から小学一、二年生をターゲットにした被爆孤児収容所に指定され、母も看護のため出かけました。私も何度も同行し、実際に校門付近で焼け焦げた死体を見、恐怖を覚えました。

昭和二十二年、四年生になり、二葉の里の鉄道官舎に転居、被爆したアオギリのあるすぐそばの白島小学校へ転校しました。鉄道官舎は今のJR広島駅新幹線口前、東練兵場の跡地でした。毎日、常盤橋を渡り、小学校に通いました。中学校は幟町中学。校内の土手を掘り返しているとたくさんの人骨が出てきました。猿猴（えんこう）川の土手沿いにあり、水を求めて、力尽きた被爆者たちの遺骨か、または集団で茶毘に付された方たちの遺骨だったのか定かではありません。

幟町中学と言えば、平和記念公園に建つ「原爆の子の像」のモデル、千羽鶴の佐々木禎子さんが在籍した中学です。彼女は二歳の時、爆心地より

一・七^キの地点で被爆、昭和三十年、十二歳になったばかりの時、原爆後遺症白血病と診断され、余命一年の宣告を受けました。病床で平和と自らの回復を祈って千羽鶴を折り続けましたが、その年の十月死去しました。彼女は私の五年後輩で、『原爆の子の像』建設に尽力された当時の生徒会顧問をしておられた升田先生は、私の担任の先生でした。四十九年前の私の結婚式にもご出席していただき、今もお付き合いをしています。

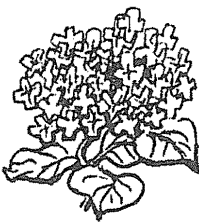
小学校四年生以降、中学生までは爆心地に近い学校だったせいか、原爆・被爆は日常生活の中に溶け込んでおり、格別意識する事はありませんでした。クラス全員といつてよいぐらい原爆の子であり、被爆孤児収容施設の新生学園も区域内にあり、友人もいました。お陰様で、これまで健康で過ごしてきましたが、腹いっぱい放射能を含んだ風を吸い込み、廃墟をうろついた身、まだまだ予断は許せません。当時は「原爆の子」と自負して

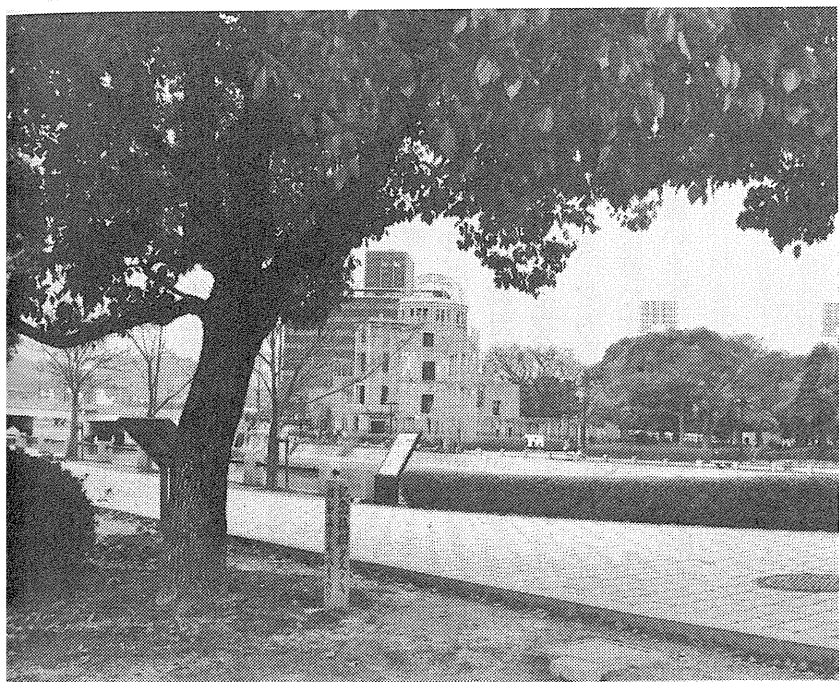
いましたが、今もその気持ちは変わらず、「真打ちの原爆の子」です。「ノーモア・ヒロシマ」「許すまじ原爆を」の二つの言葉は風化する事もなく、いまでも私の心の中に生き続けています。

このたび体験談を語るに当り、当時のことを調べているうちに断片的な点が線となりました。「ノーモア・ヒロシマ」「許すまじ原爆」が「ノーモア・ウォー」「許すまじ戦争」に変わりました。

三月十日、日付の変わる時東京大空襲がありました。使用された弾薬は三十八万三千三百発、千七百八十三トに上るそうで、原爆はただの一発、四トの重さ、どちらがどうと言うことなく、とにかく戦争は厭です。戦争のない平和を願います。

(2010年)

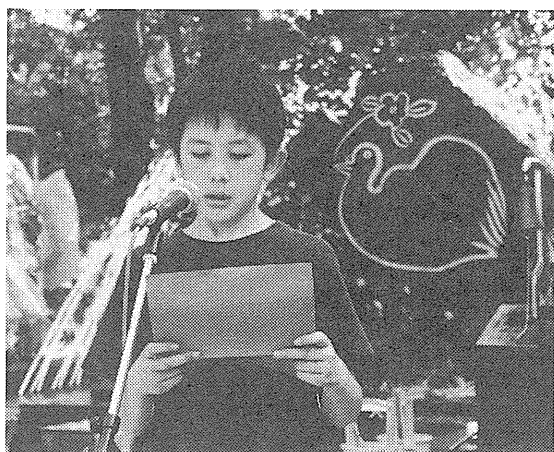




江戸川の木・クスノキ

若い世代のメッセージ

—追悼式で発表されたもの—



みんなで折った千羽鶴

二之江第二小学校六年

金川 純子

私たち二之江第二小学校の代表委員会では、毎年折り鶴を折ったり、原爆にあわれた方のお話を聞く会を開いたりしています。

今年も、六月の代表委員会の提案で、全校で取り組みました。きょう、私をはじめ五人の仲間がこの式に参加しています。

今年は長崎で原爆にあわれた中山鈴子さんのお話を全校で聞きました。この折り鶴集会に向けて、私たちは三年生以上の希望者で歌をうたうことにしました。七月に入ってから、二十分休みに児童会室に集まって、“広島のある国で”の練習

をしました。

七十人以上が集まり、心をこめて歌えるように練習し、当日は中山さん、校長先生をはじめ、全校の仲間から大きな拍手をもらいました。

折り鶴は、一年生や二年生が折ったものは六年生が糸を通したりして、みんなで五六〇〇羽も折りました。

その折り鶴をつるした前で、中山さんのお話を聞きました。私は中山さんのお話を聞き、思ったことがあります。それは、原爆はたった一つの爆弾で、一瞬にしてたくさんの人が亡くなったり、あとあとまで苦しむ人が出るということです。中山さんは四年生の時に原爆にあわれたということです。でしたが、私たちの年頃から現在まで、ずっと苦しいことを乗り越えてこられたということに、とても感動しました。

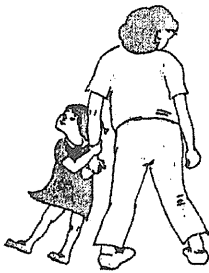
私たちみんなで折った千羽鶴に、これからずっと平和であることを願いました。二之江第二小の

友達もみんなそう思っていると思います。小さな願いでも、たくさんの鶴が集まったように、みんなで平和な毎日にできるよう、力を合わせていきたいと思っています。

私はこれからも、友達と一緒に平和について考え、できるところからがんばっていききたいと思います。

これで、二之江第二小学校の代表委員会での取り組みと私の意見の発表を終わります。

(第19回、1999年)



沖繩旅行——命について考えたこと

江戸川高等学校三年

神垣 映実

一九四五年の八月六日、広島に原爆が投下されてから、早五十八年。多くの犠牲と引き替えに、人々は戦争の恐ろしさと愚かさを教えられたはずです。しかし、今も再び、世界のあちこちで危険な火花が音をたてています。

なぜなのでしょう。どうして命を軽んじることばかり平気なのでしょう？ アメリカのイラクへの攻撃が終わったかと思えば、今度は報復テロ。北朝鮮の核開発問題。多くの人が新聞やニュースで目にしているはずですが、

また、このような世界的なものだけでなく最近ちよつとしたことで、他人に危害を平気で加える事件が度々起きています。「命」って何なのでしょう？ 私はすべての人にこの疑問を投げかけたい。

私の通っている江戸川高校では、ここ数年平和学習のため沖縄への修学旅行を行っています。私も昨年参加しました。行く前は、事前学習していたものの、海に行くことや、おいしい沖縄料理を食べる計画で頭がいっぱいでした。実際は着いてからも、最初はひたすら観光気分で友達とはしゃいでいました。しかし、その浮かれた気分はチビチリガマでの学習で、吹きとんでしまいました。沖縄はただのリゾート地なんかではないんだ、と大きな衝撃を受けました。沖縄の人にとって、戦争は過去の遠い出来事ではないのです。

チビチリガマでは、平和について考え活動を行っている知花昌一さんの話を聞いたのですが、

その話はとても残酷なものでした。というのは、そこでは何千人もの人たちが本土の教えに従い、集団自決と称される「殺し合い」を行ったのです。もちろん、チビチリガマだけではなく、当時は沖縄の様々な場所でその虐殺は行われていました。

ガマの中は、むつとした空気がたちこめ、とても息苦しい所でした。天井は低く、奥行きだつてそれほどありません。そんな所に大人から子供まで、千人を超える人々が息を殺して、じつとしている。いつ敵が来て殺されるかもしれないという、明日の见えない恐怖に怯えながら。そして自分の命を奪うのが、同じように隣で震えていた家族だなんて……。涙を流して赤ん坊の口を塞ぐ母親、娘を刺しながら自分の首を切る父親、どんな気持ちだったでしょう？

中には生き残った方もいます。しかし、その人達こそ最も残酷な現実を知るので。『降伏して

ガマを出ていれば助かった』。敵に見つかれば酷い目に合される、だから国のためにいざという時は命を捨てる。そう教えられたからこそ、この手で大事な我が子の命を奪ったのに……。こうして生き残った人が、どんな気持ちで生きているのか、考えただけで苦しくなります。その人達の多くは固く口を閉ざして何も話してくれなかったと、知花昌一さんは言っていました。それが、長い粘り強い話し合いの末、未来のためにと口を開いて下さったそうです。

自分の大切な命を、無意味に奪われたとしたら、許すことができるでしょうか？ 許せるはずがありません。「命」は他の何にも換えることはできない、決して軽いものではないのです。戦争は無意味なものです。得るものは何もありません。でも、私達が平和を築いていくためには何ができるのか、できることから始めていくべきだと改めて思いました。

その答えが今回の修学旅行での沖縄県立普天間高校との交流会です。今までは体験者の話をただ聞くという、受身でしかありませんでした。そうではなく、実際には私達のように戦争を経験していない人たちはどのような考えを持っているのか。今までにない新しい方向から修学旅行を進めることで、何か得るものがあるのではないかと思います、担当の先生と私達実行委員会を中心に、普天間高校と交流会を持ちました。内容は、ディベートと、ゲーム大会といった感じの、どちらかというと遊びの要因の方が大きいものでした。しかし終えてみると、私たち江戸高側は深く考えさせられる結果となりました。

それはディベートをやって感じました。ディベートの内容は、「琉球は独立すべきか否か」だったのですが、まず驚かされたことは、沖縄の高校生の知識の深さ。お祖父さんやお祖母ちゃんに聞いたんだ、と笑顔で言っていました。が、教科

書で事前にちよつと学んだだけの私達では、同じ土俵に立てるはずがありません。それほど細かに知っていて、しかも自分達の強い意志と考えをしつかりと語ってくれるのです。知識は浅い、実際に沖繩に暮らしその苦労を知っているわけではない、それで「琉球独立」について語るなんてできないと、ほとんどのディベーターが言葉を失くしていました。その気持ちは、その場にいた全江戸高生も同じでした。

私達全員このことをきっかけとし、平和に対する考え方が変わったと思います。私自身、ニュースを見ては両親と話し合い、今まであまり読んでなかった新聞にも毎日目を通すようになりました。友達にも戦争反対を訴える団体のビラ配りを手伝っている人がいました。

先ほど言った「何が自分達にできるか」ということは、こういう事でいいのではないのでしょうか。私達は交流会という新しい事にチャレンジす

ることで、新しい第一歩を踏み出したのだと思います。少しずつでも、こうして自分達の出来ることを世界中の人が始めていけば、平和の第一歩を歩みだせると思います。

(第19回、1999年)



「大變なことがあったんですね」

二之江小学校五年 矢口 俊貴

平沢 萌子

二之江小学校は今年も、原爆犠牲者追悼碑に千羽鶴を献納します。

その前の七月二日に、二之江小学校では全校集会として、平和集会を開きました。平和集会としての全校集会は四回目です。今年は、集会委員会からこの追悼碑の事が紹介されました。ビデオで映し出された追悼碑には、平和の鐘や原爆瓦も映っていました。去年の千羽鶴もかかっていましたが、台風があつたばかりで、鶴はだいぶ傷んでいました。

広島や長崎でもない江戸川区に、何で追悼碑があるのでしょうか。江戸川区でも戦争で亡くなつていった人を慰め、戦争がありませんようにと、平和を祈る事ができるのですね。

ビデオを見た後、体育館で鶴を折りました。各学年が一緒の縦割り班で集まって、大きい子が小さい子に折り方を教えてあげました。一年生も一生懸命に折っていました。

ぼくも、「戦争が起こりませんように」「怖い事が起こりませんように」と祈つて折りました。教室に帰つてからも時間を見つけて折りました。友達の中には、家で折ってきた人もいます。糸を通して、皆の気持ちがかもった千羽鶴になりました。

原子爆弾の事は少しは知っています。学校で、「はだしのゲン」という漫画の本を読んだ事があるからです。すごいことがあったんだなあと思つていました。でも、本当の事だとは思えません。

まだ戦争の事は勉強していませんが、これから勉強していきたいです。

私たちは平和集会の後、追悼碑に刻まれている絵を描いた人の本を読んでみました。丸木俊さんの「広島のパカ」という本です。そこに書いてある事を読んで、こんなひどい事があつたなんて信じられないと思いました。小さい子どもがとてもつらい思いをしています。お母さんとも会えなくなつてしまいました。悲しい、ひどい事が書かれています。女の人も男の人も皆、こんな目にあつたのですか。ビックリしました。

私は去年、島根県に行つた時に広島駅の駅に降りました。でも、その広島でそんな事があつたなんてその時は知りませんでした。広島町は、葛西の町よりも大きくて、人もいっぱいいました。

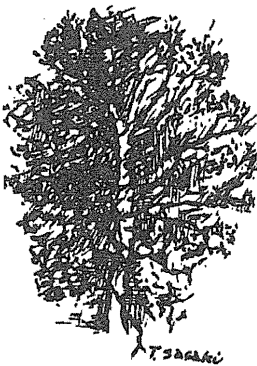
原爆が落ちた時に助かった人は、もうおいしくなりましたか、「大変な事があつたんですね」と言つてあげられたらと思います。

大人の人のお願いします。お父さんやお母さんと一緒にいられなくなるような恐ろしい戦争は、絶対にしないで下さい。怖い爆弾なんて作らないでください。

私は、山や川で遊ぶ事が大好きです。いつでも、遊びたいときに遊べるようにしておいて欲しいと思います。心からお願ひします。

私はそういう気持ちを伝えたくて、二之江小学校の代表に進んでなりました。

(第24回、2004年)



戦争は人の命を奪う恐ろしいこと

東葛西小学校六年

城所 知希

甘利 奈穂

香取 涼

石毛 優香

梶野 友哉

若月 愛実

今、私たちの生活は平和です。平和を辞書で調べると、「戦争がなくおだやかな暮らし」と書いてあります。毎日、朝ごはんは食べられますし、給食もいろいろなメニューがあつて、おなかいっぱい食べることができます。家の冷蔵庫には飲み物やおかずの材料もたくさん入つていて、食べる

ことで困ったことはありません。洋服も、おもちややゲームなども豊富にあり、とても豊かなくらしをしています。「ぜいたくだな」と感じることもあります。

日本は今から六十四年ほど前、アメリカ合衆国を相手に戦争をしていました。戦争は大人の人次がやっていることで、子どもには関係ないと思つてはいけません。いろいろ調べてみると、そのころの生活は大変でした。まず、食べるものが不足していました。お米はありません。毎日、サツマイモやカボチャ、大豆などを食べてくらしていました。電気は小さな豆電球で、夜は本を読めませんでした。敵の飛行機がたくさんやつてきて、爆弾を落とします。子どもやお年寄りなどは家の庭に掘った防空壕に逃げ込みました。学童疎開といつて、家族を離れ子どもたちは、遠い田舎で暮らしたこともあります。お母さんや兄弟と離ればなれに暮らすのですから、心細く毎日泣

いてばかりの小学生がたくさんいました。六年生より大きな子どもは過酷な労働が待っていました。

昭和二十年三月には東京にたくさんの爆弾を乗せた飛行機B 29が三百機もやってきて、一晩で十万人も亡くなり、東京は焼け野原になりました。

その年の八月六日朝八時十五分、広島に原子爆弾が落とされました。爆弾の名前はリトル・ボーイ、少年という意味ですが、名前からは想像できないほど恐ろしい爆弾でした。今までの爆弾の何万倍もの威力をもつもので、巨大な熱が出現し、広い範囲に熱線を出し、家や人を一瞬で黒こげにしてしまいました。調べたところ、一秒後に爆心地から二キロ以内、東葛西小学校からデイズニールンドあたりまでの木造の建物はすべてこなごなになり、四キロ以内、船堀や一之江あたりまでの建物も破壊され、多くの人々が亡くなり、生き残った人もいまだにその時の放射能によって苦しんでいます。

三日後の九日午前十一時二分、長崎にも同じような原子爆弾・ファットマンが落とされました。リトルボーイの一・五倍の威力があり、多くの被害がありました。

戦争は人の命をうばう恐ろしいことです。原子爆弾は一つの爆弾で何万人もの人を殺してしまう兵器です。なぜこんな恐ろしいものと同じ人間が作るのでしょうか。なぜ人を殺す戦争をしなければならいのでしょうか。戦争をしなければ、人々は平和で豊かな、そして穏やかな暮らしをすることができます。友だちと仲良くすることと平和はにています。二度とこのような戦争や原子爆弾を使わずにすむ世の中になくはならないと思います。

東葛西小学校では、地球上のすべての人間が平和で、幸せに暮らせるように願いを込めて、みんなで千羽づるを折りました。

(第29回、2009年)

知りたいッ！ 知る必要がある！

上一色中学校三年

小沢 徳明

中川 賢太

越塚真理子

奈須 沙織

井戸田知枝

高橋 隼人

今日ここに参加した六名は上一色中学校の三年生です。学年を代表して参加しています。千羽鶴をみんなで折り、昨年に引き続いて持ってきました。戦争はしないで欲しい。核兵器などぶつようなもの

は、この地球上からすべて無くして欲しい。そう
思つて、そう願つて折つたものです。

昨年の追悼式にも千羽鶴を持つて代表が参加しました。あの時の思いを込めて僕たちは、この五月、広島へ修学旅行をしました。いつもなら奈良・京都だけなのに、今回はさらに広島も加えて超ハードなスケジュールでしたが、やっぱり「行つてよかった」と思っています。

行く前にいろんな勉強をしました。

映画教室で「エイジアンブルー」という映画を見ました。朝鮮の人たちに日本はどういうひどいことをしてきたのか知りショックでした。また、原爆についてのビデオテープを文化委員会の人たちが計画しみんなで見ました。驚くことばかりでした。三年生の計画を聞いて、国語の先生も授業で「原爆に関する文学」について話をしてくれました。

平井東小の先生だった田川時彦先生を呼んで被爆の時の様子を具体的に話してもらいました。先生

は日本を代表してニューヨーク・ランドへ行く予定でしたが、無理してスケジュールを調整し、話をしに来てくれました。そればかりではありません。広島に行ったときの宿舎で、もつとくわしい話が聞けるように段取りをしてくれました。元英語の先生です。

五時間の新幹線。ウキウキと楽しく車内で話をしたりゲームをしたりしました。でも、広島についてのその後はショックの連続でした。

記念館の展示物は、原爆のすさまじさをこれでもかこれでもかというように私たちに示していました。当日はすくく込み合っていて、一つ一つ見るのにすくくエネルギーが要りました。

夜の栗栖先生の話は具体的でものすごいものでした。疲れていたけれど、私たちは夢中で話を聞きました。日頃私語をしていて怒られてばかりいるのに、誰一人私語をしやべる人はいませんでした。

爆心地はどんなふうだったか、どれだけの熱線に

さらされたか、死体すら残らぬほどだったことを知りました。爆発直後から夜まで、先生が見た様々な光景を聞きました。

それとともに栗栖先生は、原爆というものの恐ろしさについても話をしてくれました。熱量、爆風のすさまじさ、放射能の怖さのこと。結婚や出産が怖くてできなかった人々のこと。「核兵器は一つ残らず廃棄しなければならない」と栗栖先生は強調しました。

「核兵器は恐ろしい。水爆一発で広島型原爆の二千二百倍というものもある」と聞いて、「東京に一発落ちたら、田川先生や栗栖先生みたいに生き残ることも無理だなあ」と思いました。

「仮に九九・九パーセントの核兵器を廃棄しても、あと〇・一パーセント分で第二次世界大戦が六回もできてしまうんだよ」と栗栖先生は言いました。「それを知ったらどうするかが大事なんだ」と思いました。「もつとみんなが知らねばならない」

そう思いました。

「なぜそういうことが起こり、なぜ今でも核兵器の実験をしたり、全廃に賛成しない国があるのか？」

知りたいッ！と思いました。

知る必要がある！と思いました。

「私たち中学生にふさわしい《やること》とは何かを考えて、実行することが大切だ」と思いました。そう思ったので今日私たちはここに来ています。

『過ちは二度と繰り返しませんから』という石碑を見てきました。だとすれば繰り返されようとすることに、それはダメと意思表明することが必要です。そうしなければ『安らかに眠ってください』とは言えないと思います。

今日の追悼式に参加して、私たちは「安らかに眠ってください」と祈ります。そういう気持ちと共に「過ちは繰り返しませんから」ということのために何をしたらいいのか、そのことを考え、できる所

から具体的にやれることをやろうと思います。この気持ちを捧げて、私たちの追悼の言葉とします。

安らかに眠ってください。

(第16回、1996年)



私たち若者が平和の芽を育てる

瑞江第三中学校三年

三瓶 智美

私たち瑞江三中の三年生が空襲や原爆など戦争について学ぶきっかけとなったのは、昨年三月に、東京大空襲についての映画を学年全員で見たことです。

六十年前に私たちの住む江戸川区で、実際にこんな空襲があったなんて信じられませんでした。映画は空襲の中を逃げまどう人たちのとても悲惨な様子がえがかれていて、心がしめつけられました。また、どうしてこんな戦争が行われなければならないのか、どうして罪のない人たちが殺されなければならないのか、

らないのか、怒りがわいてきました。

この映画をきっかけに、学年全員で折鶴を折り、三月十日の「東京大空襲江戸川区戦災犠牲者追悼式」に参加しました。一人ひとりが平和への願いを込めて折った折鶴は千羽を超えました。そして、追悼式に参加して空襲の悲惨さを改めて感じずにはいられませんでした。この追悼式への参加をきっかけとして、私たちの戦争と平和についての学習が始まりました。

*

昨年、私たちは奈良・京都の修学旅行に行きました。奈良・京都といえどおきまりの修学旅行先ですが、私たちは戦災を受けなかった古都で、あえて平和を学ぶというテーマを持ち、京都にある立命館大学の国際平和ミュージアムを班行動のコースに入れました。

平和ミュージアム館長の安斎育郎先生は東京下町に生まれ、実際に東京大空襲を体験した人だとい

うことを修学旅行に行く前に聞いていました。まさにそこは、そんな安齋先生の平和への思いがこもった場所でした。中に入り見学しようとしたとき、私はなぜか戦争で亡くなった人たちの声が聞こえてくるような感じがして鳥肌がたちました。なぜそうなったのかわかりませんが、それがとても不思議でたまりませんでした。

平和ミュージアムには、日本が戦争を始めた頃から現在までの世界の主な戦争の歴史についての資料が展示されていて、私たちに平和の尊さを語っていました。

印象に残っていることは戦争中の暮らしのことです。それはひどいもので、家中の窓は黒い布でおわれていて、爆弾を落とす目標とならないようにしたそうです。そして、毎日欠かすことができない食事は配給制となり、決まった量しか食べることができなかつたそうです。これらのこと以外にも、今考えられないことがたくさんありました。私たちが

今こうして健康に生きていることが一番幸せなんだと感じました。

*

その後、私たちは国語の授業で原民喜さんの「水ヲ下サイ」と「永遠のみどり」という原爆の詩を学びました。「水ヲ下サイ」を初めて読んだ時、涙があふれてきました。クラスの何人かも同じように涙を流していました。詩の「死ンダハウガマシデ」という一行からとても悲慘さが伝わってきて、詩の一つ一つの言葉が被爆者のうめきと訴えとして心に突き刺さってきました。私にとって忘れられない詩の一つになりました。

原爆の事をもっと詳しく知るために、私たちは「ヒロシマ」と「ヒバクシャ」についてのビデオを見ました。原爆の威力は想像以上のもので、広島では約十四万人、長崎では約七万人の人が亡くなったということです。命は奪われなかつたものの熱線で大やけどを負った人たちもたくさんいました。やけ

水ヲ下サイ

原
民
喜

水ヲ下サイ

アア 水ヲ下サイ

ノマシテ下サイ

死ンダハウガ マシデ

アア

タスケテ タスケテ

水ヲ

水ヲ

ドウカ

ドナタカ

オーオーオーオー

オーオーオーオー

天ガ裂ケ
街ガ無クナリ

川ガ

ナガレテキル

オーオーオーオー

オーオーオーオー

夜ガクル

夜ガクル

ヒカラビタ眼ニ

タダレタ唇ニ

ヒリヒリ灼ケテ

フラフラノ

コノ メチャクチャノ

顔ノ

ニンゲンノウメキ

ニンゲンノ



どを負った人たちの体は焦げた肉のようになってしまっていて、見る事ができないほどでした。また、放射線をあびて病気になるて亡くなったり、生まれてきた子どもにまで影響があつたそうです。こんな悲しいことが日本であつたなんてとても信じられません。

*

私たちはこの学習からあらためて平和への思いを強め、昨年の「江戸川区原爆犠牲者追悼式」に参加し、被爆者の方々から直接お話をうかがう機会を得ました。中には今まで自分の体験があまりにつらくて話せなかったが、今日は若い中学生がこんなに来てくれたと言つて、その体験を話してくださいました。そのお話から、私たち若い世代が過去の事実を学び、平和への思いを語り継いでいかなければならないとあらためて自覚を強めました。

しかし、こんな信じられない戦争という出来事

が今でも世界中で起こっています。イラク戦争は終わつたといわれますが、イラクではいまだにたくさんの罪のない人や子どもたちまでもが殺されています。テロがなぜ起こるのか私にはよくわかりませんが、やつたらやりかえすという報復を繰り返す限り、たとえ戦争が終わつたとしても、大切な人を失つたり大切なものを失つて、苦しむことがなくならないと思います。また、被害者はもちろん、加害者として人を殺したりした恐怖、死を目の当たりにした恐怖など一生忘れることのできない心の傷になるでしょう。人の心の中で戦争は一生続いていくのです。

なぜ人間は言葉話すことができるのに、話し合いで争いを解決できないのでしょうか。なぜ武力で解決しようとするのか不思議に思います。日本国憲法第九条では、日本は二度と戦争を起こさない、軍隊を持たないとはつきり言っています。私

は全世界の国々が憲法九条を持てばいいと思います。

今も世界のどこかで戦争が起こっています。しかし、いつの日か東京大空襲や広島・長崎の原爆のような戦争が引き起こした惨禍が繰り返されないように、武力でなく話し合いで解決できるような日本、そして世界にするため、私たち若者が一人一人平和の芽を育てていくことが大切だと思います。

(第24回、2004年)



広島を決して忘れない

江戸川高等学校三年

早川 直子

私達江戸川高校三年生は、今年の三月に広島修学旅行を実施しました。この修学旅行のために、毎週のように委員会を開き、H Rの時間などを利用して班編成や事前学習などを行い、少しずつ準備を進めてきました。

一月には直前の準備として、全員で千羽鶴を作り、また、平和公園の慰霊碑めぐりのときに行なう碑の学習のための係分担を決めるなど、一人一人の意識を高めようと努力を重ねてきました。そして、事前学習の総仕上げということで、二月

には江戸川文化センターにおいて、西本宗一先生に被爆体験の講演をしていただきました。この公演を聞いて私が思ったことは、普段私達が気がつかないところでも、熱心に平和を守るためのさまざまな活動が続けている人たちがいるのだな、ということ。被爆者である先生ご自身が戦争のときのつらさを持ちながらも、これからの平和を守るために前向きな姿勢でいられること。そして、戦争の悲惨さとともに、私達にこれから何ができるか、何をしなければならぬかを教えてくださったことでした。

それと、昔は広島出身だと言うと、「それでは被爆されたのですか」と聞かれたもののなのに、最近では聞かれる内容が違うと言っておられたのも印象的でした。

時代は移り変わっていくもののだな、戦争が終わって五十年近くもたった今では広島イコ―

ル原爆というイメージはわからないのかな、と少し悲しい気がしました。

＊

修学旅行の当日、まず原爆記念館と原爆資料館の見学をしました。

記念館には被爆した方によって描かれた絵が展示されていて、被爆された時の様子が生々しく感じられ怖い気がしました。資料館にある資料や写真はどれも目をそむけたくなるようなものばかりで、本当にこんなことがあったのかと思うとぞつとしました。また、説明文が数か国語で表示されていたことから、広島の被爆体験は日本だけでなく世界中の多くの人に知ってもらわなければならない問題なのだと実感しました。

記念館・資料館の見学をした後、平和公園内の慰霊碑を中心に語り部のお話を聞きながら碑の学習をしました。いつも笑顔で話されていた語り

部の表情とはうらはらに、話の内容はひどく恐ろしいものでした。

人の運命というものは一步間違えたらどうなるのかわからないものだと思います。この頃の人達に比べれば、私達は何て幸せなのだろう、とも思いました。本当に戦争は絶対にしてはいけないことです。やりたいことがやりたいように出来る現在（いま）だからこそ、努力を惜しんではいけないのです。真の平和をつくることは私達の努力にかかっているのです。今しかないのです。

その後、私達は二日間にわたり、養護老人ホームを慰問したり、病院、研究所などを訪問しいろいろなことを学びました。また、二日目の朝には慰霊式を行いました。

*

この二日間で私達は被爆の現実に驚き、語り部の方のお話に感動し、事前学習では得られなかつ

た何かを得たような気がしました。

この広島での修学旅行を通じて感じたことは、生命（いのち）の貴重さと平和の大切さでした。語り部の方達が、私達に自分のつらい被爆体験を長い間にわたって語り続けてくださるのは、まさにこのことだと思いました。私達は本当に多くのことを学び、さまざまな思いを胸に秘めて、広島を後にしました。私達が広島を忘れることは決してありません。

（第12回、1992年）



平和への思いを語り合う

— 追悼式後の交流会の記録 —

第21回の追悼式（2001年

7月20日）に引き続き開かれた交流会。今年は若い人たちも参加した交流会にしようと、追悼式の参加者に呼びかけて開催しました。

被爆者、式参加者に中学生4名も加わり、和やかに交流が行われました。親江会副会長の銀林さんの挨拶の後、各参加者の自己紹介、平和への思いを語り合いました。

来年も健康で、参加したい

広島で被爆された小沢さん。平成10年に被爆者手帳をとられたとのこと。これまで3回追悼式に参加したが、平和な世の中をつくることは生きている者の努力。昨年より確実に体力が落ちているが、来年も健康で参加したいとお話でした。

今なお続く被爆の影響

当時山口の部隊にいて広島で二次被害にあった松谷さん。実家が広島で、妹さんが当時紫斑病になり高熱が出たが何とか一命をとり止めたものの、昨年の11月に亡くなられたこと。蚊がすぐくて眠れなかった時に見たガスの炎（死体から出る燐）など生々しい当時の様子をお話になりました。



若い世代の人へ

昭和7年に江戸川区役所に勤務し、教育長、助役、教育委員長など70年間江戸川区の行政に関わってこられた藤田昇さん。来年から使う教科書がどうなるかに強い危惧を持っているとのこと。当時は国定教科書でその中に貰かれている精神は忠君愛国。若い人たちは自分が使う教科書にしっかりと関心を持ってほしいとお話されました。

各学校を回り、被爆の語り部として活躍されている、女学校時代に広島で被爆された松谷幸江さん。当時は反戦なんて言え



ない状況。竹槍訓練や銃剣の練習もさせられ、「敵を殺せ」と教えられたこと。人の命を大切にしないで自分の命を大切にすることはできないこと。戦争はいのちを一番粗末にするものであり、そのことを子どもたちに伝えなくてはと、学校を回っていると語られました。

これからも参加したい

被爆者や戦争体験者の話にじっと耳を傾けていた中学生。世田谷の更科

さんは今回で4回目。墨田の友達
達の相羽さんを誘っての参加。
追悼式で発言した葛西二中から
は近藤さん、山田君が参加。中
学生からも二度と戦争が起きな
いようにできることから取り組
んでいきたい、

平和の大切さ、これから追悼
式に参加したい等の若々しくて
しかも力強い発言がありました。
引率の工藤さんからは子供
たちに戦争を肯定するような教
科書を使わせたくないとの思い
が語られました。江教組の原田
さんからは子どもたちの発言が
年々しつかりしてきており、平
和の大切さが受けとめられてき
ていること。教育現場も人事考

課や主任制の問題など厳しく
なってきたなかで、平和の
取組みを引き続き努力してい
きたいとの発言がありました。

人との出合いが

今年の追悼式で被爆体験を
表した長崎出身の中村さん。昭
和34年に転勤で長崎から東京に
出てくる時、お母さんから被爆
者手帳を持って行くように言わ
れたがそのままにして東京へ。
被爆者への差別などを考えた
き持っていない方がよいとの判
断をされたとのこと。高木さん
の出会いで44年に手帳を取得し、
それ以来平和の取り組みにもか

かわってきたとのこと。高木さん
との出合いがなかったら、全く
違った生き方をしていたのでは
とのお話がありました。

平和の運動の意味が

銀林さんからは、教科書問題
で親江会として教育委員会に対
し要請をしたこと。歴史教科書
の問題点がいろいろいわれてい
るが、公民の教科書にも大きな
問題があり、「新しい歴史教科
書を作る会」の教科書では核廃
絶は理想の課題とされ核廃絶が
決まれば世界は危険な状態にな
るなどと記述されており、私達
の核兵器廃絶の運動の意味が問

われており、こうした教科書を許してはいけないとお話がありました。

新しい戦死者をお祀りする

条件づくり

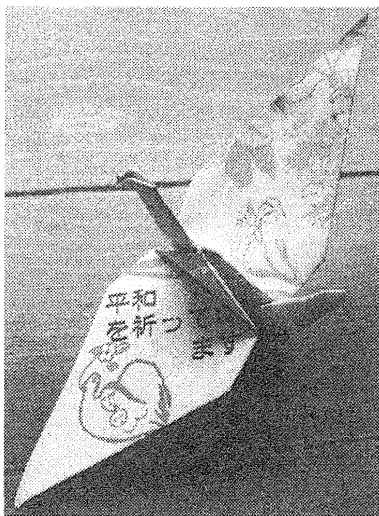
会のまとめもかねて発言された泉福寺の岡田住職。追悼式も21回を数え年々運動に広がりを見せてきていること。被爆者のみなさんの高齢化もすみ、若い世代へのバトンタッチがますます大切になってきていること。小泉首相の靖国神社参拝は、新しい戦死者を祀るための条件づくりであり、新しい被爆

者や戦死者を作ってはならないとの決意で始まった追悼式の趣旨とは、真つ向から対立するものであり今後とも平和の取組みを進めていきましょう。とのお話がありました。

東京大空襲の経験、引き上げのこと、葛西のカトリック教会

の発言等まだまだ貴重なお話がありました。すべてを紹介することはできませんが、とても有意義なひとときでした。

(丸 宗市)



「はとのひ おりがみ」作・佐々木美貴

葛西祭りで、「追悼碑」も、「被爆二世アオギリ」も、

「はとのひ おりがみ」も、それぞれの役目を果たしました。

西本宗一

去る十月十七日の「葛西まつり」で、一枚の「はとのひ おりがみ」が元気な小学生の女の子と知り合いにしてくれました。

ナーも設け、「追悼碑」や「被爆二世アオギリ」などの由来を期した「はとのひ おりがみ」の配布もしました。

葛西祭りでは、親江会は毎年、滝野公園の「江戸川原爆犠牲者追悼碑」のすぐ横のテントで、「鳩の水飴」を販売しています。子どもたちに人気があります。折り紙コーナー

で行列ができます。折り紙コーナー

列にならんでいた女の子の一人がその折り紙を手には、「わたし、この『アオギリの歌』知ってるよ」と話しかけてきました。

メロディも正確でした。一緒だったお母様によると、「広島の出身で、原爆のこともよく教えてくださる、すばらしい先生」とか。お母様から学校と先生の名前を教えてくださいました。

た。「どこで覚えたの?」「先生が教えてくれた」。そして大きな声で歌い始めました。歌詞も

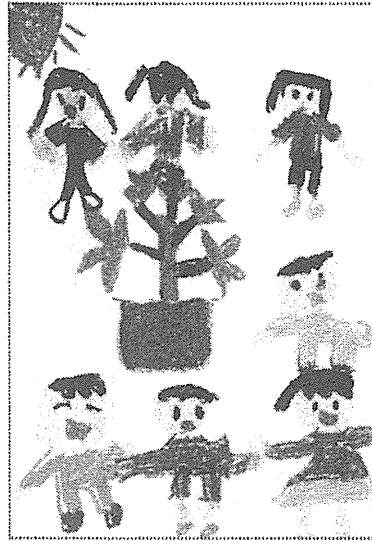
学校でヒロシマについて教え、しかも生徒が日常のなかで歌えるほど身についた授業をされている。江戸川区にこんな先

生がおられることを知ってうれしくなりました。「アオギリの歌」を作詞・作曲した女生徒が在学した広島千田小学校は、68年前、わたしも通学した学校なので思い入れがあります。お祭りのあの雑踏の中で出会った女の子が、アオギリの歌を歌ってくれたことを伝えたくて先生に手紙を書くとともに返事を下さいました。

本堂秀和先生からの返信

素敵なお手紙をいただきました。ありがとうございます。私はこの四月から江戸川区立南篠崎小学校に初任としてやってま

1年2組の生徒が描いて送ってくれた絵



東京の人間ですので、ヒロシマには親類もおりません。ですから、本当ならばそのあとを過ごした千葉県市川市というべきなのかも知れませんが、広島で生まれたということに責任というか使命というか、そういったものを感じています。

いりました。

大学を卒業して十年間、広島市内の数箇の幼稚園に勤め、二年間は大竹市の小学校で一年生を担任しました。広島出身、というのも、実は生まれてから五歳までを過ごしただけ。両親も

私が担任する一年二組の子どもたちには夏になる前に原爆の話をしました。広島の子どもたちなら、「そごう」(デパート)に行くときにドームを見るよ、なんてイメージを持って話しやすいのですが、相手は東京の子どもた

ち。原爆の「ゲ」の字も知りません。そこで私の生まれた白島で被爆し、今なお生き続けているアオギリを通じて少しでも原爆について知らせたい。それを音楽の授業でアオギリの歌を歌うことで行ってみました。

なにぶん、私はもとより両親も戦後生まれですし、身内に原爆に遭った者はいません。しかし、広島で生まれ、育ち、被爆者の方々にも会い、その私にできる範囲でヒロシマを伝えなければとやらせていただいています。何より知らせることが大事だと思っています。

私事ですが、大学卒業後の十二年間のうち数年、広島・東千

田町のアパートに住んでおりました。窓を開けると旧広島大学の広い公園が見えるところで、千田小学校もすぐ近くのところですよ。何よりアパートの大家さんのお孫さんと「アオギリの歌」の作詞・作曲の森光七彩さんは同級生で、一度だけ彼女に会ったことがあります。そんな不思議なご縁を感じながらお手紙を読ませていただきました。江戸川の区立公園に原爆犠牲者追悼碑や被爆二世アオギリがあることは知りませんでした。ぜひ案内してください。



アオギリのうた

作詞・作曲 森光七彩

電車にゆられ 平和公園
やっと会えたね アオギリさん
小学校の校庭の木のお母さん
たくさん たくさん たね生んで
家ぞくがふえたんだね よかったね
遠いむかしのきずあとを
直してくれるアオギリの風
遠いあの日のかなしいできごと
資料館で見た 平和の絵
いろんな国の 人々や
私がみんなが考えてゆく広島を
勇気をあつめちかいます
あらそいのない国 平和の灯
遠いむかしのできごとを
わすれずに思うアオギリのうた
これから生まれてゆく広島を大切に
広島のねがいほだひとつ
せかい中のみんなの明るい笑顔

千羽鶴 献納者名簿



畔上敏雄
伊太利庵
市川眞利
一之江小学校
宇佐見奈々
江戸川・生活者ネットワーク
江戸川区音楽祭合唱団
江戸川区職労 女性部
江戸川原水協
江戸川平和コンサート参加者
江戸川平和の夕べ
葛西健康友の会
葛西第二中学校
葛西中学校
カトリック葛西教会
加藤幹栄
上一色南小学校六年生
川口としお後援会 女性部
川口とみ江

川口末男
川越直子
くすのきクラブ船堀中央新生会
くすのきクラブ連合会
くすのき司親和会
熊野会母の会
グループK&K
小岩みどり保育園
小岩南どり保育園
小岩南どり保育園より組
光徳保育園
光徳保育園
鹿骨中学校放送部
新日本婦人の会江戸川支部
熟年ふれあいセンター
ほっとサロン
眞福寺みずえ保育園
杉山千代・邦子
生活者ネットワーク
清新第一小学校
清新第一中学校
清新第一中学校
清新町九条の会
清新町高齢社会を考える会
関口ノブ
泉福寺
滝沢やすこ後援会

武田節子
第六葛西小学校
中村洋子
なぎさ虹の会
西葛西中学校生徒一同
二之江中学校
花島 忠
春江町小学校
東葛西小学校児童会
船堀第一小学校
ほっとコミュニティえどがわ
堀江昭雄
松田久子
まなみ
南葛西第三小学校四年生
明福寺ルンビニー学園
(幼・保)
紅葉川高校
矢沢子
山田頼子
らいおんデイサービス葛西
利用者・職員一同
臨海小学校(江戸川区立)
ルンビニー学園幼稚園・保育園
(2007～2010年・敬称略)

追悼碑に眠る人々



田部文子	林 和子	無名少年	青木由太郎	金岡俊夫
田部精子	米谷卯一郎	川崎小一	青木ユキ	西田福松
田部トメ	米谷 芳	川崎美男	宮田君枝	堤 礼子
山本昭男	米谷博子	杉原友之	新道安五郎	高尾福雄
野村建太郎	米谷武彦	中村岩吉	深江信保	中尾末雄
水野三千枝	米谷卓男	稲田英雄	立川政太郎	船本永作
高田久代	米谷 明	後 芳雄	中島フジ	船本コノ
村上孝子	檜山ツネ	中村 茂	中島之彦	大辻和兵衛
平沢梅代	木村 一	中村義子	田口コメ	大辻熙子
平沢隆三	木村クラ	横山敬一郎	中島とみ	石田文枝
田辺令偕	木村みどり	吉田盛人	中島 登	大藤淑枝
田辺洋偕	木村文子	横張三郎	永田力太郎	杉浦礼子
村井富千野	山田スマ	中山ツイ	松本廣次	杉山滋子
井上美智子	小野 静	中山藤太郎	岩村岩吉	土肥枝美子
若林敦子	高木恵子	中村好秀	松本末子	藤井サツキ
林 きくの	高木茂子	半田スナ	力久 力	三井文子

原田晴一	山内正夫	水野ノブ	田部光子	中島たえ
渡 實福	末広末松	城 忠男	平山丈夫	水野喜代松
渡 シゲ	中島三栖雄	城 朝子	李 貞秀	関口光幸
都築マキ子	芳賀常男	西本静世	松本政市	山下末市
奥田ハル	里 シチ	西本和代	藤谷 定	山下ツル
米田 正	稲田東始	西本素行	中村 親	山下栄子
久保袈裟吉	中村峰子	小野クミ	大園秀雄	町田康子
池下一雄	臼井武雄	後 鉄男	米沢貞二	梅澤武次
池下シマ	臼井光雄	水野松江	米沢アサノ	小門宗一
稲田秀子	都築米吉	林 利根夫	米内百合子	外川亮次
山中佐吉	新道シオ	堤 久吉	米内いつ子	高橋平吉郎
山中テル	松本健八	田平守雄	米内不二子	後関和雄
山中小二郎	松本みとせ	行藤信子	伊藤正吉	宮田吉郎
山中政子	八木エン	友安静恵	浄園收世	染井教二
相川 弘	品川利男	戸山藤一	平岡冷子	片原美智子

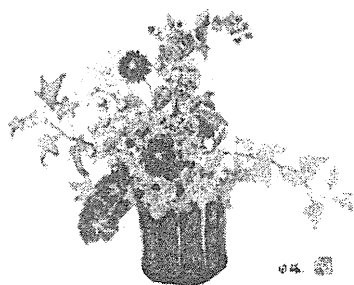
城戸多助	金 聖出	山口林之助	中川竹雄	河本正治
山田俊文	金 城南	坂上虎吉	中川政子	高橋啓介
広田順子	金 命圖	川口兼吉	石川恵子	角田貞蔵
福島和子	李 順今	大春満枝	徳能 久	日浦康子
外川シズ	藤内静子	江河久敏	荳田和稔	藤内 勝
松吉精子	川口郁子	辛 泳洙	里 節雄	中村秀一
入江次男	池野 洸	辻田ミツエ	渡辺智子	中村シ力
山崎信子	山口夕子コ	櫻井秀彦	杉本キヨ子	赤倉 稔
加藤浩三	山口恭子	古瀬正秋	岡澤瑞穂	田川時彦
西尾巳恵子	中尾嬢二	宮川美代子	岡澤信雄	山田寿子
中島重子	東 正	本田孝夫	岡澤杉之助	西本スエ子
谷口ゆき子	山崎竹雄	山内登久子	岡澤ワサ	加藤貞夫
隅田雅子	山前昭二	下河内宣子	今宮潤子	日浦義教
金 叟錫	岡田恭子	山崎虎蔵	趙 今岳	伊木春作
姜 和子	山本 武	山崎 勇	永田米子	伊木リ工
姜 八満	江口 保	山崎誠一	永田和一	高橋金枝

佐藤敬子
佐藤和四郎
佐藤ハル子
中村重雄
中村町子
川口力ネ
河野キチ
星 一郎
竹下吉子
岩永守道
志垣キク
伊福ヒサ子
木村幸子
深堀松三郎
深堀マセ

深堀信輝
森山栄子
関口智恵子
松谷幸江
船本 里
山下 勲
山岸ツユ子
伊木輝男
金 分順
米内達成
毛利川端
菊野照恵
武田澄子
山崎ちよ
張本俊策

山下邦夫
藤内明子
加藤キミ子
岡崎登志子
湯本明子
小林ススム
彦坂彌生
高木留男
井桁敏彦
北村嘉徳
石濱義則
石濱シナヨ
小野文子
倉本寛司
林 博子

吉田和子
吉田輝男
木村ヤス
木村宗久
木村政利
木村勝佑
沼田彦造
城戸喜美
田中君子
野村綾美
森田綾子
内田祝子
淨園満成
金杉智香子
山下ヒサエ



親江会会員および
つながりのある人々
現在二九八名

染谷 昇
大浦五郎
城 アイ



親江会元会長

浄園満成さんを 偲んで

親江会前会長 銀林美恵子

浄園満成先生は九十七歳、お宅近くのグループホーム泰山で、気持ちよくご静養中でした。二〇一〇年四月二十四日、東小岩のご自宅に同居されていた、ご子息の潤様からお知らせを戴いた時、驚きと悲しみがどつときて、取りあえずお宅にお伺いしました。潤様から「父は眠るように、おだやかな昇天でした。老衰ですね。百歳まで生きてほしかったの気持ちがあります」と寂しさをこらえてのお話を聞き、一層悲しみは増し、立派な先生の最後に、哀惜の念を禁じ得ませんでした。

浄園先生は江戸川の原爆犠牲者追悼碑建立のこ

ろ、中学校校長会の会長で追悼碑の会の代表幹事でした。江戸川区内の小・中学を転々として教育者として江戸川の子どもたちの夢実現に尽くされた浄園先生は、内外の信望が厚く教育界のまさに重鎮でした。誰一人知らない人がいない大きな存在で、先生の敬称にふさわしい方でした。

一九八三年、相川弘前会長亡き後、親江会会長として二十年あまり会を支え、会の発展に尽くされました。含蓄に富んだ素敵なエッセイで「親江会だより」を飾り、会員を激励し、会の信用を高めた功労者です。会報を持つて区役所内をまわると、あちこちから「浄園先生お元気ですか?」、「先生の文を楽しみにしていますよ」と声がかかり、先生の存在の大きさをいつも実感しました。毎号会報の原稿依頼に先生のお宅にお邪魔し、お茶を戴きながら様々なお話を伺うのは私の楽しみでした。仏教の教えや漢詩など先生の幅広い学識の一端に触れる幸せな一時です。先生から教えて

いただいた数々の思い出、本当に有難うございました。

数年前、本を取ろうとして踏み台から落ちての怪我が、きっかけです。松江病院に入院の後、「新小岩ケア」に入所、これまでとは違った生活も楽しんでご機嫌でした。昨年移られた「泰山」でも、快適に過ごし、まだまだお元気とばかり思っていました。

四月二十七日、東京葬祭・慈光殿で行われたお通夜には、親江会役員が多数参加し、先生の思い出を話し、その人柄を偲び、最後のお別れをしました。

親江会の長老・野村寛一さんは、「浄園先生は皆から尊敬される立派な方でした。勲章を受けてのお祝いの席で、加藤進さんの詩を書いた掛け軸をさしあげた時、とても喜んでいただけたのが、最大の思い出です」と話されました。親江会会員は浄園先生をお慕いし、天国から私どもを見守って下さい

とお願いし、心からご冥福をお祈りいたします。

親江会会長 加藤 進

浄園満成・前会長さんの訃報を事務局の田部和彦さんから知らされた時、私は言い表せない悲しみに襲われました。それは私にとつて浄園さんは総てにおいて「掛け替えのない先生」であつたからなのです。春江町にお住まいの頃にもお伺いさせていただき、そして話が信仰について及ぶと、「いやあ、うっかりしていたらお寺の坊主にさせられるところだったよ」などと笑わせる方でした。

取り上げれば切りがありませんが、その中で今も私に強く印象に残っているのが、「被爆五十五年、親江会結成三十五周年記念式典」の四、五日前、家の中で転倒され、かなりの怪我をされた時

のことです。船堀タワーホールでの式典の挨拶は無理ではと思われていたのに、痛み止め注射を三本も打って杖をついて、舞台から今も耳に残るあの渋いお声で挨拶をされ、強い感動を受けたことを今も忘れられません。おかげで「平和祈念のつどい」は、区民の皆様をはじめ各層各方面の方々に、親江会の活動理念である核廃絶と戦争のない日本を強く印象付けたと思えました。

ともあれ、浄園さんには百歳の長寿を願っていただけに悔しさは残りますが、今はただご冥福をお祈り申し上げる次第でございます。

■浄園満成さん 佐賀県・浄泰寺に生まれる。五島列島の尋常高等小学校勤務の後上京。篠崎小学校から鹿本中学校まで教職四十一年。元区中学校長会会長。三十一歳のとき長崎で入市被爆。江戸川区原爆被害者の会（親江会）元会長。江戸川原爆犠牲者追悼碑の会元代表。「江戸川を非核宣言都市に！」と呼びかけた。

二〇一〇年四月二十四日逝去、享年九七歳。

親 江 会

1958年（昭和33年）5月23日、江戸川区平井東小学校の被爆教師故田川時彦さんの訴え「被爆者である私たちはただひっそりと生きるのではなく、互いに連絡を取り、励ましあって生きていこうではないか。そのよりどころとなる会をしっかりとつくりたい」とにこたえて集まった江戸川区在住被爆者六名で発足。名称を江戸川原爆被害者の会、通称を「親江会」とした。（江）戸川の被爆者が（親）しくなり、励ましあう（会）にしようという願いが込められている。

現在、区内の被爆者手帳保持者は200名を越す。会員相互扶助とともに学校などで被爆証言や平和活動（追悼式、鳩コンサート、平和展など）を行っている。会報も発行。平均年齢は76歳。

会 長 加藤 進

事務局



爆心地浦上へ

親江会会長 浄園満成

とにかく、妻子の遺骨だけは拾っておこう
と思い、海軍を除隊すると早々に、その疎開
先の西山町に向かったのは、被爆してもう十
日も経つ頃であつたと思う。北方から西に向
う列車にとび乗つてはみたが、混雑した満員
列車は、三間坂のトンネルを今にも止まるか
と思うぐらい喘ぎながら登っていく。車中で
は機関車の吐き出す熱い煤煙と汗の臭気で息
のつまるほどの思いである。

大村湾をまわり切つて山峡を抜けると、も

う爆心地浦上である。全く想像を絶する世界
の展開であつた。列車は浦上のご真中を通つ
て終点長崎駅に着くのだが、見る限り、緑の
樹木は一本も残っていない。崩れた瓦礫の間
に、飴のように曲がつた赤錆びた鉄骨の無残
な姿だけが眼にうつる。まだ夕刻には間があ
るのに人影はまばらである。

浦上は長崎港のどん詰まりから更に奥まっ
たところに、三方を低い山々に囲まれた盆地
の中にあるので、爆発時点での中心地域では
二平方メートル当り七万〜十万トンの圧力
だつたという。周囲の山々は地肌がまる見え
で、焼け残つたわずかの死木がマツチ棒のよ
うに突立っているだけ。これはまさに死の街
だ。終点のプラットホームに降りると引き裂
かれた衣服の間から痛々しく焼けた皮膚をの
ぞかせる人達の群があつた。声を出さず、た
だ黙つたまま、壊れかけたホームの柵にもた



れてうずくまっている。持ってきたわずかの軍用医療品の中から、仁丹や包帯などをその膝の上にそっと載せると、崩れかけた顔をあげる。謝意を示してくれようとするのであるうか。まだ意識は残っている。動員されて被爆し、終点にいればだれか肉親が来てくれるかもしれないと、長い時間じっと苦しさに耐え、待ち続けている人達の姿であらう。

私も声もなく廃墟の街を通って瓦礫の坂道を登りつめ、荒れ果てた西山の家にとどろつき、そこで生きている妻子と出会おうなどとは、実のところ思ってもいなかったのである。

今、反核と軍縮の叫びは、民衆の巨大な声となって世界を駆け巡っている。その響きよ、絶ゆることなく天まで届け。

江戸川平和コンサート

ヒロシマ・ナガサキ 鳩になつて



被爆五十五周年、親江会結成三十五周年の節目の

年にあたる二〇〇〇年六月四日、タワールホール船堀

(当時江戸川総合区民ホール) 大ホールにて、親江

会主催の平和祈念の集いが開かれました。出演者

は、女優の吉永小百合さんと、故沢正彦牧師のお嬢

さんであるシンガーソングライターの沢知恵さん、

原爆詩の朗読とコンサートが行われました。七〇〇

人収容の大ホールには、早くから大勢が詰めかけ熱

気にあふれるイベントとなりました。この企画に

は、親江会の会員以外に多くのボランティアの参加

があり、まさに市民による平和の祭典が実施された

と言えます。

以後、親江会主催、コンサート実行委員会が協力、

江戸川区・区教育委員会の後援で、「江戸川平和コ

ンサート ヒロシマ・ナガサキ 鳩になつて」が、

原爆犠牲者追悼式が開催される葛西区民館のホー

ルで行われるようになりました。

コンサートの趣旨は、ヒロシマ・ナガサキのこと

を風化させず、次世代につなげていくことです。そ

のためにも、若者や子どもたちにも共感できるコン

サートにしていくなことを常に心がけています。実行

委員会には、区内で活動する人、働く人、平和を求

める人などの個人が参加しています。毎年、新しい

メンバーが加わり、実行委員会の輪が広がっている

のも特徴です。コンサートに出演していただくアー

ティストの方は、江戸川区(地域)を拠点に活動し

ている、または、原爆や平和をテーマに活動していること、「平和・地域」がコンセプトです。

企画を実施するにあたり、出演者の方にも会議に参加していただいたり、事前にその方々のコンサートなどにも行かせていただき、親

江会や実行委員会の趣旨を十分理解していただくことを大事にしています。江戸川平和コンサートは、主催者と出演者が一緒に作り上げる作品です。

また、コンサートと同時に「江戸川平和展」を行っており、被爆の写真やマスコミの記事など、手作りの展示が並びます。

コンサート終了後は、葛西にある「伊太利庵」という仲間が経営しているレストランで、実行委員と出演者による懇親会と反省会

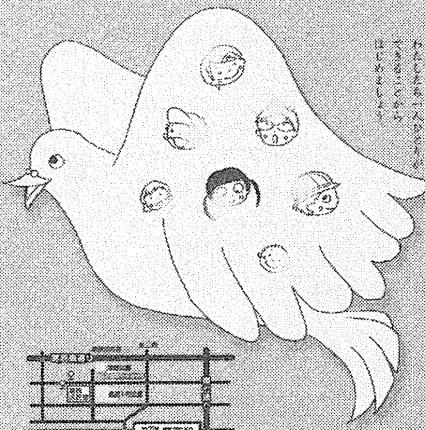
を行っています。コンサート以後も、出演者の方々と交流が続いているなど、平和を求める人の輪が広がっています。

(藤居阿紀子)

第4回

江戸川平和コンサート

～ヒロシマ・ナガサキ 鳩になって～



今年、第4回の「江戸川平和コンサート」を開催します。平和を求め、平和を築く人々の輪が広がっています。今年も多くの団体・個人が参加し、平和を求め、平和を築く人々の輪が広がっています。今年も多くの団体・個人が参加し、平和を求め、平和を築く人々の輪が広がっています。

入場 2010.7.25 SUN
無料 13:00 開場 / 13:30 開演
会場：新西区民館 4階ホール
東京メトロ有明駅有明4丁目徒歩5分




江戸川平和コンサートの記録

回・年月日	内 容
第1回 2002年7月27日	橘麗子（オペラ）・田中ルミ子（シンガーソングライター）・北小岩コーラス同好会・小林夏衣（ピアノ）
2 2004年1月15日	檜よしえ（俳優座）・福原道子（篠笛）・橘麗子・田中ルミ子・本間ひとし（ボディアクト）・江戸川区音楽祭合唱団
3 2004年11月14日	江戸川区少年少女合唱団・石川逸子の詩の朗読劇（区民出演）・黒坂黒太郎（被爆樹木で作成した「コカリナ」演奏）と矢口周美（歌）
4 2005年8月30日	福原道子（篠笛）、橘麗子（オペラ）（8月26日～31日、被爆60年、親江会結成40年記念原爆展開催）
5 2005年11月12日	江戸川区少年少女合唱団・「NAGASAKI・1945・アンゼラスの鐘」の上映
特別企画 2006年11月18日	「いのちを歌う平和を奏でる」コンサート（江戸川区仏教会と共催）チェルノブイリ被曝者 ナターシャ・グジー（バンドゥーラ演奏と歌）・高橋尚子（チェンバロ演奏）
6 2007年11月18日	中村健佐（サックス演奏）・音楽劇「禎子と千羽鶴」登坂倫子・芳賀一之
7 2008年7月6日	江戸川区少年少女合唱団・古徳景子& POZO（マリンバ演奏と歌）
8 2009年8月2日	江戸川区音楽祭合唱団・September（歌）
9 2010年7月25日	西平千代子他2（琉球舞踊）・古徳景子（マリンバ演奏と歌）

江戸川区内の 平和への取り組み



江戸川憲法を読む会



自民党安倍内閣の時代に「憲法改正」の動きが強まり、二〇〇七年五月十四日には「国民投票法」

（憲法改正の手続き法案）が自民・公明両党の強行採決により成立しました。そして三年後の二〇一〇年五月十四日以降、国会で憲法改正の発議をすれば、いつでも憲法改正の手続きに入ることが出来るようになります。

こうした安倍政権に危機感をもった江戸川区に住み、働く人たちにより「江戸川憲法を読む会」が二〇〇六年三月に発足しました。

最初の二年は、代表の鈴木弁護士を中心に「日本国憲法」をほんとうに知るために、月一回のペースで憲法前文から読み、九条だけではない憲法の素晴らしさを実感してきました。その後の一年間

は、福祉問題、憲法判例、司法反動、裁判員裁判、医療問題等々を取り上げました。そして、ここ一二年は憲法が骨抜きにされてしまった原因を探るために「教育問題」を取り上げ、戦後の学校教育が本質的に自分の頭で物事を考えず、体制（大勢）に順応する子を

育てることで、憲法のもっとも大切な精神大切な精神である個人の尊厳をはぐくむことがないがしろにしてきたこと、さらには、政治や憲法について十分に教えられてこなかった歴史を知りました。

昨年は、憲法九条を基本に据えて、「普天間問題から見えてきたもの」と題して沖縄問題の解決方向やアジアの平和について考えていくために、軍事評論家の前田哲男さんをお迎えして、はじめて広く地域に呼び掛けて講演会を行いました。

今年に入った三月十一日、東日本大震災が起き、東北、関東に未曾有の災害をもたらしましたが、なかでも福島原子力発電所の事故は私達に大きな恐怖をもたらしています。

連日のマスコミ報道に疑問を持った私たちは、真実を知り伝えていく必要を感じ、三月二十三日に原発問題に詳しい環境運動家の田中優さんをお呼びして、「福島第一原発で何が起きているか」と題して講演会を行い、大きな反響を得ました。

その後も大気や、土壌を、農作物を、海水を汚染し続け、今なお解決の糸口すら見つからないで、日本人のみならず、諸外国の人た

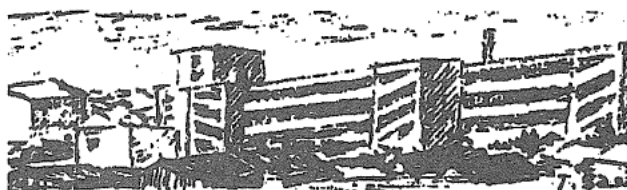
ちまでも不安に陥れている原発事故。

私たちは今、何をしなければならぬのか問われているように思えます。広範な地域の方々と手をつなぎ、原爆や原発など核のない子供たちが安心して自由に暮らせる社会に向けてともに考え行動していけたらと思っています。

私達はこのような社会の変化に応じた課題をテーマにしながら、月一回の例会を開き、会報を出しています。平和、人権、民主主義の日本国憲法には、「個人の命や自由、幸せを追求する権利は、政治の上で何よりも大切にされなければならぬ」と明記しています。が、こうした理念が生活の隅々に

行きわたることを願って活動しています。

(小畑美智子)



九条の会

—江戸川区内で活動するもの—



九条の会のことを、皆さんはご存知でしょうか？ この会は日本が戦争を永久に放棄し、戦力を保持しないと定めた憲法第九条を含む日本国憲法の改変を阻止するために結成された会です。

この会は、2004年6月10日に、井上ひさし（作家・故人）梅原猛（哲学者）、大江健三郎（作家）、奥平康弘（憲法学者）、小田実（作家・故人）、加藤周一（評論家・故人）、澤地久枝（作家）鶴見俊輔（哲学者）、三木睦子（元総理大臣夫人）9氏の呼びかけで結成された会で

す。この呼びかけに応え続々と九条の会が結成され、今日では日本各地・各分野に、8000を越える「〇九条の会」が結成されています。

1993年以降、読売新聞の世論調査では、憲法改正賛成が反対を上回り、2004年には、改正に賛成（65%）反対（22・7%）までになりました。その世論が2008年には、「今の憲法を改正する方がよい」「改正しない方がよい」の結果が僅差ではありますが逆転しました。こうした変化は、この会の結成と活動の広がり軌を一にして

作られてきたものです。

私たちの住む江戸川区にも、小松川、松江、葛西、小岩など地域の九条の会、建築業者、教職員など分野別の九条の会（現在10の会）が作られています。2006年に結成された小岩九条の会では、毎月の例会や学習会と月1回の小岩駅での宣伝活動。区内の九条の会とともに取り組んで1400名以上の区民が鑑賞した「日本の青空」（日本国憲法の成り立ちを描いた映画）の上映運動等を進めてきました。また松江九条の会では、原爆犠牲者追悼碑の

見学ツアーなども進めています。

今年は、国際政治が「武力均衡による平和から、法による平和」へと大きく転換したハーグ世界平和市民会議から112年目を迎えます。100周年を記念した2000年

の会議では、「各国議会は、日本国憲法九条のように、政府が戦争することを禁止する決議を採択すべき」と訴えました。

唯一の被爆国、そして憲法九条を持つ国の国民として、「核兵器廃絶」

と「九条守れ」の運動は平和運動の両輪です。これからも声高らかに、平和の取り組みをすすめていきましょう。

(丸 宗市)

国民平和大行進

国民平和大行進は、核兵器廃絶を願う人々の思いを込めて、1963年に始まりました。北は北海道から南は沖縄まで、全国11の幹線コースにそれぞれの都道府県の網の目行進がつながり、最終目的地（原水爆禁止世界大会が開催される）広島をめざします。毎年延べ10万人を

超す人々が行進に参加しています。2010年の7月の平和行進は数えて53回目になります。私たちの住む江戸川区は太平洋コースです。5月8日に北海道の礼文島を出発した原水爆禁止国民平和大行進は、7月13日に千葉県に入り、県内を網の目に行進したのち、7



月27日に東京に入りました。

市川橋の袂で千葉県の各団体の代表からベナントや横断幕の引き継ぎを受け、そのあと江戸川区内を行進します。この行進には例年、北海道から歩き続けて来られた方(通し行進者)も一緒に参加しています。アーバンブラザ前で江戸川区内の行進者での集会を行い、その後―蔵前通り―二枚橋―

文化センター前―江戸川区役所までを行進します。参加者は100名ほどでしたが、酷暑の中、平和な世の中と核兵器廃絶の思いを込めて、元氣に行進し、「核兵器なくせ」の声を多くの区民のみなさんにアピールすることができました。区役所中庭で足立区との引き継ぎ式が行われ、バトンタッチが終了しました。

毎年7月に市川橋下の河川敷で引き継ぎが行われ、区内の平和行進が行われています。ぜひ皆さんも一緒に「核兵器なくせ」の思いを込めて、行進に参加してみてください。

(石村珠子)

世代を結ぶ平和の像の会



戦後六十六年経ち、戦後生まれの世代が八割を超え一見平和に見える今の日本ですが、三月十一日の東日本を襲った大災害はいま

での価値観そのものを变えるような出来事でした。未だ復興計画をはじめ原発事故の行方も先が見えませんが、今年も熱い夏を迎えま

す。

私達の世代を結ぶ平和の像の会は昭和六十三年に発足し、この三月十日に第二十三回目の追悼式を



開催することができました。

会の発足以来その先頭に立って
頑張ってきた藤田昇会長を昨

年の十二月に、九十五歳を迎える
直前に失いましたが、会の発足以
来原爆犠牲者追悼碑の会の皆さん

方とは、同じ江戸川区内で
兄弟のような関係が続けなが
ら平和運動を共に続けて
きました。

私達の会の始まりは、東
部地区の労働組合で続けて
きた下町平和リレー行進が
原点です。当時、再開発用
地であった小松川地区の中
に、古い書庫を元江戸川区
の助役であられた藤田昇さ
んから、そこが旧区役所で
あり文書庫であったこと、
そして藤田さんが昭和二十
年三月十日の東京大空襲の
時に、区の職員として宿直

勤務をされており、区民の戸籍原
本等を川のなかに沈めて守ったこ
となどを聞き、戦争の悲惨さと平
和の尊さを後世に伝えていこうと
会が結成されました。

会の運動の柱は

① 空襲で焼け残った旧区役所
の文書庫の保存

② その文書庫の傍に平和のシ
ンボルとして平和の像の建立を、
区民の皆さんに募金を呼びかけて
つくる。

③ 戦争や空襲の体験の証言集
をつくる。

④ 毎年、三月十日に追悼式を
開催し、若い世代にも語り続ける。

その結果、①については、都議
会、区議会に文書庫の保存の陳情
をだしていましたが、中里前区長

の英断と区議会の皆さん方のご理解を得て予算を計上していただき、修復工事も行われました。

②については、江戸川区に募金活動の許可を申請し、区内各界、労働組合の皆さん方二万三千人余、千二百万円を超える浄財を頂き、像の制作を文化勲章受賞者で彫刻家の円鐸先生にお願いしまして、完成後は江戸川区に寄贈しました。

③については、戦争・空襲証言集Ⅰ・Ⅱを発行することができました。

④については、さくらホールが完成するまでは屋外で開催してきましたが、完成後は屋内に会場を移し、江戸川区音楽祭合唱団の皆さんによる「ちいちゃんのかげおく」の女性合唱も披露させてい

ただいております。

原爆犠牲者追悼碑の会は一九八一ねんに第一回追悼式を開催してから三十年を経過し、被爆体験されたみなさんも高齢化され運動の継続が何かと大変でしょうが、区内で進めてきた平和運動が閉ざされることが無いように、これからも手を携えて共にがんばりましょう。

代表幹事 楠田正治



泉福寺平和コンサート



江戸川区東小松川の泉福寺は、昭和二十年三月十日前後に東京大空襲犠牲者追悼の平和コンサートをを行い、今年で二十八回目を迎えます。



こゝ泉福寺も東京大空襲の折りには本堂や庫裏が全焼し、あたりが焼け野原となりました。また大勢の檀信徒が犠牲となり、当時の住職も戦地沖繩に向かう航行中、潜水艦に轟沈され、上陸した島で食糧が無く病氣となり、帰郷できなくなりました。

そうしたご縁から下町反戦活動の中、日本フィルハーモニーの方達と巡り会い、「平和でなければ音楽は演奏も鑑賞もできないので、音楽は本質的に平和を求めるものですよ」言われました。そしてお寺でも追悼と平和を祈念したコンサートを開くことに協力していただき、思の長い活動として続けてきました。

このコンサートの趣旨は、東京大空襲犠牲者の追悼、戦争をはじめる戦没者だけではなく、内外全ての戦没・戦争犠牲者を懇親平等（敵味方の区別なく）にご供養することを特色としてきました。

先代住職・岡田弘隆の頃より、江戸川原爆犠牲者追悼碑の建立に関わり、江戸川区の被爆者の方達ともお付き合ひさせて頂いてきました。

今回、東日本大震災の福島第一原発事故が発生してしまい、第三の核被害者が出てしまうことを大変残念に思います。（岡田隆法）

反戦・反核 キャンドルデモ

毎年、原爆が投下された日にあたる8月6日、または9日の夕方から、江戸川区立薄野公園で集会を行い、西葛西駅前の子ども広場までデモ行進を行っています。

主催は原水禁・江戸川区民会議で、区内の労働者や市民活動のメンバーなど約100人が参加しており、ペンライト型のキャンドルを手にして、約30分のデモ行進です。

集会では、主催者あいさつに続き、親江会、江戸川ネット、脱原発・下町ネットワーク、仏教界のあいさつに続き、ヒロシマの祈念式典や原水禁の大会に参加してきた報告が

行われます。

今年のトピックスは、ヒロシマの式典にアメリカ政府代表者や英仏の代表が、ナガサキにも英仏の代表など過去最多数の各国代表者が参加したことです。被爆国日本から世界に発信してきた核兵器廃絶への機運の高まりが感じられ、今後の世界の動きに注目が集まります。

日本政府のこれからの日米関係を中心とした政策から、どのように方針転換がされていくのかを重視する必要があります。

これまでに、30回以上を数えるキャンドル・デモ、シュプレヒコー

ルは、「核兵器廃絶！ ヒバクシャの体験を風化させない！ 原子力エネルギーは廃止！」。パトカー、街宣車先導のもと、参加者全員が声高らかに訴えています。



平和のための戦争展

『戦争展』は2010年8月21日、22日の開催で10回目を数えました。

新しい世紀を迎え、2000年6月に開催されたNPT(核不拡散条約)再検討会議は、世界各国が核兵器廃絶を「明確に約束」し、核兵器廃絶と平和な世界に向けて大きく動き出していました。そうした動きをさらに進めるため、戦争の悲惨な実態を国民に伝え、語り継ぎ、平和な世界を実現していくための取り組みとして開催したのが2001年、第1回目の『戦争展』でした。

日中友好協会、日朝友好協会、原水協、労働組合、女性、業者などの団体

で実行委員会を作り、タワーホール船堀の展示室で開催しています。

昨年は、沖縄の普天間基地をめぐる問題、韓国併合100年、NPT会議開催という節目の年でもあり、「今わきおこる平和の声、沖縄・アジア・世界から」というテーマで取り組みました。ひめゆり部隊の一員として陸軍病院で負傷兵の看護をされ、戦場での悲惨な体験を経て、沖縄戦の証言活動を26年以上も続けておられる、ひめゆり部隊文京支部前会長の吉村秀子さんのお話を聞きました。

「写真で見る日韓併合100年」「原爆と人間展」「日中戦争」「治



安維持法下での闘い」「NPT再検討会議に向けたニューヨーク行動」等の写真とパネル、平和への願いを込めた短歌、9条コーナー等の展示を行いました。また、戦時下の暮らしを紹介する教科書や衣服、赤紙などの実物展示を行いました。

1000名を超す參觀者がありました。戦争展をご覧いただき、周りの人たちと語りあい、身近なところから平和を考え、行動していける場になればと考えています。

(前田成子)



学校の平和教育

教育実践誌「江戸川の子ども」より





地球のみんなが 豊かな気持ちで 暮らせるよう

—私たちの平和教育—

加納 治子

以前、三年生を受け持った時のこと。ひとりの子が、「戦争？戦争ってなんだ？おれ一回戦争にあつてみたいよ。」と言いました。

「ひえー。たいへんだ！どうしよう。どうかしなくちゃー。」

やつぱりきちんと教えないといけないな。」とつくづく思いました。

そして、そういうことがみんなでやれたらどんなにいいだろうと思っていました。

毎年三学期になると職員会議で「日の丸」「君が代」のことが問題になり、反対意見がどんなにたくさん出ても結局は、多くの場合校長の言うとおりに

なっていました。

職員会議等で話し合うだけでなく、日常の教育実践の課題として考えていこうと、全校で平和教育をやっていくことを確認しました。

まず初めに三月十日

四年生の社会科副読本「わたしたちの東京」には、関東大震災のことは出ていても、東京大空襲についてはひとことも書いてありません。

そこで三月十日前後に大空襲のことを勉強したい、四年生だけでなく学年に応じてそれに関連のある話ができたらと思って

いました。

それにはやっぱり校長先生に全校朝会の時にでもお話ししてもらって、それを受けて各学級で学年に応じた話ができたらいいいんじゃないか。さつそく校長先生のところへお願いに行ったら承知して下さいました。

先生方には参考資料として、分会の職場新聞を通して、琉球大学の大田昌秀氏が書いた「父から戦争を知らない子たちへ」という第一次世界大戦からの日本の歴史や、なぜ戦争がおこるのかを子どもに語る口調で書いてあるものを配りました（六年生にも毎年三学期に配っています）。また、職員室には平和教

育資料コーナーを作り、スライドや紙芝居やビデオや本などもおいておきました。四年生には、社会科の時間に早乙女勝元氏の「東京のいちばん長い夜」をプリントして配り勉強しました。

七月には原爆の取り組みを

夏休みになる前に原爆のことを子ども達に話しておけば、休み中にテレビで広島・長崎の原爆関係の報道番組を学年なりに関心を持ってみられると思います、原爆について各学年でフィルムをみせました。

一年生は「とびうおのぼうや

は病氣です」

二年生は「おこりじぞう」

三年生はアニメの「はだしのゲン」

四年生には劇映画の「はだしのゲン」

五年生には「にんげんを返せ」

六年生にはNHKの「地球炎上・地球凍結」

各学年で一本ずつみても毎年続けられ、卒業するまでに六本のフィルムをみることになりました。平和教育の予算が全然ないのでフィルムは江教組と都教組でただで借りました。

四年生の「はだしのゲン」は戦前の社会情勢などがほとんど

で難しいフィルムでしたが、まんがを読んで知っていたせい
か、あのむし暑い体育館で熱心に見ていました。他の学年も学期末で忙しい中、そして暑い中よくみてくれました。

(感想文)

原子爆弾のこと

四年・西国達之

今から42年前、広島と 長崎に
原爆が落ちた。

広島では24万人ぐらい死んだ。
長崎は14万人ぐらい死んだ。これはおそろしい爆弾です。戦争は関係のない人までころしたのでおそろしい。戦争は人間が起こすものだから、止めようと思えば止められるはずなのに、どうして止められなかったのでしょうか。原爆をう

けた人は、42年たった今でもやけどなどで苦しんでいるから、きつと戦争をにくんでいるだろう。きつと戦争を止めなかった人にくんでいるだろう。原爆はただ人を殺すだけで、人間のために何のやくにもたない。ぼくはいつも、何で人間は原爆を作るんだろうと思うてます。もう二度とこんなことをくりかえさないように、わたしたち、そして他の国の人みんなで努力しなければいけないと思います。いつまでもいつまでもみんなが平和なくらしをできるようにしたい。

その他学年に合った読み聞かせの本のリストを配ったり、平和教育コーナーに原爆写真のパ

ネルなども用意しました。

また児童会では、滝野公園の原爆追悼碑に供える千羽鶴をおり、児童会の代表が追悼式に出席しお供えしてきました。

十二月八日は加害者の立場で

戦争はいつもひどい目にあわされる話が多いのですが、ちょうどその頃、中国孤児のことが報道されていたので「今、なぜ中国残留孤児なのか」（少年朝日年鑑）を先生方に配りました。

その他「15年戦争の中の12月8日」「太平洋戦争のあらまし」（平和教育 12 月都教組）、「南京大虐殺」（家永三郎の日本の歴

史七)、中学生の感想文で「悪魔の飽食を読んで」(平和教育12か月)なども配り、それらをもとに、学年に応じて話がしやすいように工夫しました。

一年間やってみて

職員会議で平和教育をやっていくことを確認したものの、教材がどこにあるかもはっきりしないので、資料は分会が作り、毎回分会の役員が「えー、このたびの平和教育のなかみは……」とみんなに伝えていました。今年度からは社会科部が音頭をとることになりました。そして平和教育に取り組み二

年目の三月十日がやってきました。

今度はなにか全校でいっしょのものをと考えて、大阪大空襲を扱った「おかあちゃんごめんね」というアニメ映画を見ることにしました。とてもいい映画

で空襲の恐ろしさや戦争のかなしさがよくわかったようで、先生方が「とても良い感想文が書けたわよ。」と喜んでくれました。各学年から一点ずつ感想文を出して、お昼の放送で流しました。

六年生の男の子が廊下ですれちがいざま、「ぼくは、ああいふ映画を今までに一度も見ただとがありませんでした。とても

感動しました。」と話かけてきてびっくりしました。

今、彼は中学生ですが時々小学校へやって来ては、職員室の平和教育コーナーへ行つて本を見たりしています。

昨年、私は久しぶりに広島に行きました。そして世界中で平和教育を推し進めている人が大勢いることを知りました。平和教育の資料が前よりも何倍もあり、英訳された本やスライドが数多く出ていて大勢の人が群がっていました。世界中の人々の平和を求める気持ちの強いことが実感でき、心強く思いました。

今、南葛西小では年に三回の

平和教育の取り組みを行っています。どの程度子供達の心に残っているかわかりませんが、何せ「南」は東京一のマンモス校なので、たくさんの子どもたちに平和を愛する心を育んでいけることが、いつも励みになっています。

今、子供達の父母も戦争を知らない世代になってきました。いろいろな機会をとらえて学校で歴史的事実や命の尊さをできる範囲で学習するようにしていくべきだと思います。

この地球で主導権をにぎっている人間がかけがえのないこの地球という宇宙船を上手に運転していかないと、いっしょに

しわけないと思います。

地球のみんなが豊かな気持ち

で暮せるよう、みなさん！

平和教育をおし進めましょう。

(1989年、南葛西小)

自分なりの考えをもてるといいね

十五年戦争の授業を中心に

赤尾菜穂美

四月——「何のために歴史を

学ぶのか、卒業までに自分なり

の考えをもてるといいね」と子

ども達になげかけたものの、自

分でもよくわからないまま歴史

学習がスタートしてしまいまし

地球における人類の歴史とそ

の誕生は、重要ポイント①とし

て理科のヒトのからだの学習と

も合わせて計画をたてました。

生まれた時から生活に必要な

ものは何でも豊かに与えられ続けて生きてきた子ども達。生き残るために物を得る、創り出す、身を守るといった人間の営みについて考えていきたいと思いました。

重要ポイント②は、近現代でできるだけ多くの事実をもとに知る↓自分の生きざまを考える授業にしたいと思いました。

教科書にこんな一文が出ていました。

「国民生活のすべてを戦争に協力させる。」

これはたとえばどんなことがあったのでしょうか。子どもからいろいろな意見が出ました。

慰問作文を読む

Q. この文はいつたいだれあてに書かれたものなのでしょう。

よくわからない言葉に線を引きながら読み、話し合ったり解説を加えたりしました。

★小学校に通っている子ども達は授業でも戦争のことを聞かされていて、教科書の絵も内容もやっぱり戦争に関することと聞いてびつくりしました。

★小さいころから日本がよくて外国が悪いと教えられていたので、本当のことを知らずにこんな文を書いているのだと思う。

加害者としての日本

真珠湾攻撃から50年というところでテレビでは特集番組が報じられ、ニュースや新聞から中国残留孤児の肉親さがし、従軍慰安婦問題、新宿人骨問題なども取りあげました。

また虐殺の写真集もできるだけ目をそらさずに見てほしいと提示しました。何人かは目をおおいながらもみんな真剣に見てくれました。そういう姿勢は平和学習の積み重ねによる成果ではないかと思います。全校集会活動として七月に被爆体験者の話、三月には東京大空襲の話

毎年聞いています。「こわいけれど知らなくっちゃいけないことだ」という意識が育てられてきている気がしました。

沖縄から学ぶ

自分が沖縄を訪ねた時の衝撃はあまりにも大きく、見聞した話をまじえながら、沖縄戦のビデオを見て、ひめゆり学徒隊であつた宮良ルリさんの話を読み聞かせました。

★ビデオで見るとやっぱり「かつこいい」と思ってしまうけれど、実際に体験している人たちの話を聞くといつも「もう戦争をしないでくれ」と言つて

いる。その意味が今やつとわかつてきました。

★戦争を体験した人たちは、一生戦争を忘れることができないのだと思いました。「人間が人間でなくなつてしまつた」そこが私は一番印象に残りました。

★この時代に自分の思つたことを言える自由さえあれば、何とか戦争を防げたのではないかと思います。

「はだしのゲン」を見る

戦争の悲惨さだけでなく、絶望状態からでも生きぬいていく人間のたくましさが伝わつてく

る作品として選びました。

感想文は十五年戦争の学習のまとめとして書いたのですが、平和の中にいる自分たちが最も大切に守つていかなければならぬもの、それが「平和」、自分として何ができるだろうと考へ、実行する人間になりたいと意志をうち出している作品がたくさんありました。

田中正造の生きざまから

国語の教科書文に資料を補足しながら読み進める中で、なぜ自分たちは歴史を学んできたのだろうという答えが見えてきた気がします。

正造の人生はむなしなものだったのかという討論をした後、「いつも農民たちは戦ってきた。そしていつもいやなことをみるのは一番下の人たちだ。自分は平等な時代に生まれてよかった。」という感想がありました。再び討論していく中で、

平等な世の中がどうやって生まれてきたのかを知るために歴史を勉強してきたのではないか、今でもじつとたえている人がいることを知るためだ、ちがうことに対して「ちがう」といえる人間になるためだ、自分の考えをきちんと相手に伝えることの

大切さを知るためだと、歴史の中で生きてきた人々の生きざまを通して何を学べばいいのかという話になりました。

★世の中に名は残らなくても苦しみながらたえてきた人々や何とかしようと働きかけてきた人々がたくさんいます。僕もそ

おきみ おんため 大君の御為に

神戸市明親小学校高等一年生

近津カネ

寒風吹荒ぶ満州の原野に、国のため、私達のために働いて下さる兵隊

さんに深く深く感謝します。暖かい内地でも冬が来て、寒さが身にしみて参りました。それにつけそちらの寒さはいかばかりかと思はれます。

先生に伺へば、満蒙の地は我国にとつてどうしても離されぬ大切な所ださうでございます。それに私達の父祖は、日清日露の両役に二度までもここに尊い血を流し、幾多の尊き屍を埋めて居ります。この大切な

地、この尊い地を、あの残酷な無道な人々にどうしてむざむざ踏みにじられて宜しいでせうか。

どうぞ—私達の祖国のため、父祖のため、いえ—わが一天万乗の大君の御ために、あくまでもあの非道な敵と戦つて下さいませ。内地に留っている者は、誰も彼も皆あなた方をたよりにしています。

(下略)

んな人生に少なくとも近づきたいです。先生は「自分が行動できなくても、行動している人を支えることはできる。」と言いました。僕はどんなに重くても支えてたえて自分を鍛え、いつか行動できる人になりたいです。

今、世の中でおきている

ことに目をむけて

連絡帳に「今日のトピックス」という欄を設け、朝の会で順番に発表していきました。更に知りたいことを新聞社に問い合わせた子もいました。そのように自分から求めていった時こ

そが本当の学びになるんだなど実感しました。

最後に、一年間学習したまとめ、年表や新聞、資料プリントを綴じて一人一人一冊の本にしました。その完成記念に私の作ったしおりをはさんで子どもたちに返しました。そのしおりに次のような詩を書きました。

自由と平等をねがい、
つらい思いをしながらも
生きてきた人々から
困難をのりこえ精一杯生きること
を

何とかよい世の中にしようと
働きかけてきた人々から

人間の智慧と優しさと偉大さを

人々をつらい思いに落とし入れて
いった人々から

何が「悪」なのかを判断し自分な
りの考えをもつことを

これからも学び続けていつてほし
いと思います

そして「平和」への第一歩は
自分とは異なる他人を認めるとい
うことから
はじまるということを忘れないで

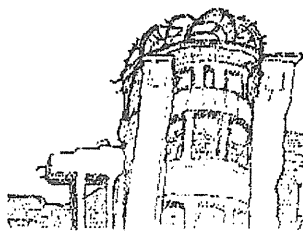
(1992年、七葛西小)



生徒の心ゆさぶった

広島修学旅行

勝呂竜司



学年教師たちのほとんどが広島へは行ったことがなかったの
で、ぜひとも生徒たちを広島へ
連れて行きたかった。世界唯一
の被爆体験国に生まれた者とし
て、広島や長崎のことを忘れず
に、後世に伝えてほしい。そこ
で、実際に被爆地を訪れ、被爆
体験者から生の声を聞き、生徒
認識をより深めるために、「ビ

修学旅行の事前指導は、直前
に行うだけでなく、あらゆる機
会に、さまざまな行事と結びつ
け、計画的に取り組むことで一
致した。

まず、広島や原爆についての
認識をより深めるために、「ビ

デオを観る会」が開かれた。

また、戦後五十周年で、特別
番組が数多く放送されたので、
夏休みの宿題として、感想文を
書かせた。

文化祭においての、「原爆被
爆の図」の模写作品は、展示会
場の壁面を埋め尽くすほどのス
ケールの大きいものとなり、見
る人たちに平和を意識させるも
のだった。

遠足は、「第五福竜丸」を
コースに加え、「江東・墨田め
ぐり」という独自のものに取り
組んだ。見学場所についての
「学習のしおり」の作業を通
し、原水爆実験が、今でも続い
ている事実とその恐ろしさにつ

いて考える機会を与えた。また、遠い昔のことで、自分達に關係のないように思っていた広島での原爆投下が、実は現在でも自分の周囲の人たちを苦しめているという現実を目を向けさせたかった。

そこで、修学旅行の間近に、元平井東小学校の教諭で、被爆体験者の田川時彦先生を招き、事前に学校で「話を聞く会」を開くことになった。

そして、修学旅行の初日、広島到着後、平和公園で、事前に配布された学習資料を片手に見学し、その晩、「語り部から話を聞く会」が宿舎でも行われた。

感想や聞き取りのポイントなどをメモしながら、真剣に聞き入っている姿があちこちに見られた。

江戸川区では、全国に類をみない「原爆犠牲者追悼式」を毎年行っており、区長も出席するなかば公的な行事になっている。

そこで、学年全体で千羽鶴を折り、学級委員を中心とする有志の代表が届けることとなった。また、修学旅行後の参加時には、夏休み中にもかかわらず、学年の代表と有志が広島での取り組みについて、報告をかねた

発言を行ってきた。

このように、三年間を通じて、取り組んできたことが一つでも生徒たちの心に響けば、と願っている。

(1997年、上一色中)



教育誌「江戸川の子ども」新春インタビュー(2000年)

被爆者として 教師として

人権と命を大切にする

心を伝えつづけて

銀林美恵子さん

聞き手

石川 好文

(江教組委員長)

先生にほめられて数学の道を

石川 新年おめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

銀林 こちらこそどうぞよろしくお願いいたします。

石川 私も教員になって平和の問題というのは、重要なテーマ

に接してみても、銀林さんが地道に、いろんな人の立場を考えながらよくまとめられてるなと思ってきました。それに、被爆者であること、自体を明らかにすること、ということも、なかなか大変なことなんだなということを感しました。銀林さん自身の広島での被爆体験はあとからお聞きするとして子どもの頃はど

の 一つ
な んで
す けれ
ど も、
親 江会
の 活動
と か 追
悼 碑の
そ う い
う 活動

うお子さんだったんですか。
銀林 私はおとなしい子で、いわゆる良い子と言われていました。長女でしたし、妹や弟たちの面倒をよく見なきゃならなかったから一番お姉さんでした。かりしてるとも言われていました。

でも、学校ではとにかくぶきつちよでした。とくに字が下手で、それで……一例を申しますと、小学校三年生の時に、あの頃は国語の教科書なんかは全部丸写ししてくるというのが宿題で出されるんです。そのときに、「あなたは字が下手だから、透き通る紙で上から写してください」と言われたんです。ノートじゃなくて紙に写して、こ



恥ずかしくなってしまうて、家で親にも言えなくて…。

石川 ああ、言えなくて、やっぱり。

銀林 言えないからどっかにその透き通る紙がないかと思っさがして半紙を見つけて、宿題

だからやっていかないと叱られるし、泣きながらそつと写していったんですね。私はものすごく字が下手なんだというレッテルを貼られたように感じて、それから字を書くのが恥ずかしい思いでした。

石川 烙印を捺されたようなものですね。

銀林 そういうことは今の先生はなさらないと思うけど、本当に情けない思いをしましたね。

それはずっと大人になるまで尾を引いていて親にも長い間そんなことは言えなかったんです。

本当にそれくらい下手だったんです。師範学校に入って教育実習でも黒板に字を書くというのがやっぱり嫌なんです。教育実習の後に先生から、「あなたは

チョークを持ちながら片一方でチョーク消しを持って、書いたとたんに消す。あんなんじゃない生徒たちはノートを取りようがないじゃないか」というご注意を受けたくらいです。

石川 その「写してこい、上から」なんていうのが強烈に残っているわけですね。

銀林 残っていますね。それは小学校時代一番いやな思い出でした。やっぱりほめていたかどうかというのはいいことですよね。

何か努力すればできることが算数。あの頃は算術と言いました。算術の分数計算を四年生のときにやっていて、毎日先生はテストをなさったんです。そのテストで、分数の計算で全部満点が取れたんです。それで先生

ともありました。

女高師の級友と教室で被爆

がとってもほめてくださったことがきっかけで数学の教師になってしまったということがあります。

石川 小学校のときから戦争が始まっていたんですね。

銀林 そうです。小学校六年のときでしたかしら、太平洋戦争が始まったのはね。

石川 その頃はどんなことを考えられていたんですか。

銀林 私はすごく軍国少女でした。私の家は両親ともクリスチャンだったものだから、親自身は批判を持っていたと思うんですけどそれは出せなかったから、結局学校教育の影響で、まじめな軍国少女でした。男に生まれればよかった。そうしたら国のためにやれるのにかかった。

石川 それでは広島の話、被爆体験についてお伺いしたいと思います。

銀林 八月六日の朝はもうかんかん照りの天気で、寮生活ですから廊下づたいに学校へ行って荷物を置いて校庭に出てラジオ体操をやります。いつもラジオ体操をやって宮城遥拝があるわけです。いつもは先生がそこで一日の話をされるんですけど、すごい暑い日だったから体操の後、「教室に入って先生を待ちなさい」といって教室に入ってくれたのが八時十分ぐらいだったんです。

先生を待っている間に私は物理の本を開いていたんですね。そうしたら突然ピカツという光が窓側から入ってきたんです。

写真のときにたくマグネシウムの何十倍のような光がワツと入ってきて、「ああ、なに！」って言うって立ち上がったんです。「ああ」って言うって教室の出口まで駆けた人もいたんですけど、私はボカンとしてただ立っていたんです。次の瞬間に建物が倒れてその下敷きになって気絶してしまっただけです。私はその気絶の時間がはじめはすごく長いんだと思っています。んですけど、実際はそうではなかったんですね。

周りから、「先生助けて！お母さん助けて！」という声か

聞こえてきて、これは大変だというので払い除けて立ち上がろうとするんですけどなかなか立てないんです。やつと這い出すようにして、何か少しきな臭い壁土がまいあがつて黄色っぽく全体がもやもやつとしているから、そこを分けるようにして這

い出て行って、廊下を少し動いていったら、数学の先生がそこに立っていらつしやいました。

先生も顔から血を出していらつしやるんですけど、「ああ」といつて引きずり出して外に放り出してくださったんです。外に放り出されたときにはあたりは薄暗闇なんです。

そのときがちょうどきのこ雲の下にいたときだったんですね。だからそんな長い間私は気

絶していたわけではないんですけども、自分では夕方になったと思っただけです。そのうちにきのこ雲がよけて元の明るさに返ってくるわけです。私はなんだかわけがわからないまま、足のひざのところがものすごく痛くてしやがみこんでしまったんです。

石川 そのときみんなはいっしょだったんですか。友達
は…。

銀林 中でそのまま死んだ人もいます。防火壁の下敷きになって焼けてお骨になって出てきた人が、あそこに座っていた人だから彼女だろうということがわかっただけで。そのときはみんなばらばらと出てくるだけですから、私が出たときには周りはいだれもいなくて、そうしたらあ

とからきた人が、「そこに座ってちや駄目じゃない」と連れていってくれた。

肩をかしてもらって引きずられるようにして元安川の川原までいったんですね。橋のたもとに材木があつて、そこに座っていました。

御幸橋で地獄を見た

つぎつぎに出てくる人たちはもう本当に幽霊なんです。手からずるんと焼けた皮膚がたれてこうさげてやつてくるんです。顔半分焼けている人は随分大勢いて、それからやけどのない人はけがをしてるとか背中が切れているとか頭から血を出しているとか。私は左足の関節の

後ろがこのくらいもんべの上から切れてしまっていました。それと片目が見えなかったんです。それは打撲で目が開かないぐらい顔全体が腫れちゃったんだと思いますね。それから手を少し切っている。足が一番ひどかったんですね。足がひどかったからこんなに血を出していたら駄目だと思って、ハンカチでここを縛って、棒切れを拾ってそれをつつこんでぐるぐる巻いて自分で血を止めたんです。そのまま座って見ていたら長谷川さんという友達に向こうからくるんですね。

「長谷川さん！」って言ったら、声で気がついて私のそばにきてくれたのです。

石川 お友達ですか。
銀林 それは寮の同じ部屋だったのと、同じ理科の学生であつたという事で教室も一緒に行くと、同じ寮でも一緒という事で二週間生活を共にしている友達です。彼女自身はどうだったかという、洋服がやぶけてそこがみみず腫れになってしまっているというけがで背中を大きく切っていましたね。長谷川さんがそばに座って、「どうしたんだろうね」と言っているうちに先生が一人回ってこられて、「橋を渡って向こうの吉島飛行場に女高師の生徒は逃げない」と言われたんです。まあ、そこまで逃げてきた人たちだから、みんな橋を渡って行くわけなんです。結局、「長谷川さん、私は動けないからここにいますから行って」と言ったら、

長谷川さんが、「橋の向こうもひどいみたいだし何があつたでしょうね。せっかく女高師に入って初めてあなたと出会えたんだから一緒にいきましょう」といつて彼女が残ってくれたんです。後でたいへんお世話になった命の恩人です。

そのあとは二人だけになつてしまつて、何があつたのか全然わからないまま、周りは火の手が上がってボンボンボン燃え出したんです。橋まで燃えていましたし、それから電信柱が立つたまま燃えてますし、だからその熱さでもって周りは熱くてたまらないので川の水をかけたりにしているうちに、やつと二、三時間経ったところでしょうか（時計はびったり八時十五分

で止まっています(した)、兵隊さんが回ってきて、「あんたたち、そこで待つてもしょうがないから御幸橋まで行きなさい。そこまで行けば救援のトラックがくるから」と教えてくれました。私が被爆したところが千田町で爆心から一・八^{キロ}ぐらいのところで、御幸橋が二^{キロ}ぐらいのところですから、二百^{メートル}ぐらいの距離なんですけど、裏道を回りましたからすごく遠く感じました。そこも長谷川さんが私の足を心配して、もう紫色になってきていますから「早くお医者さんに診せなくちゃいけないから行きましよう」というわけで、彼女が本当におぶうような感じで引きずってくれたんです。

移動する間も道がもう焼けるように熱くなっているね、どうしてかわからないんですけど二人とも裸足になってたんです。道の脇に草むらがあつてそこにちよつとのつては休みして、移動したわけです。途中で、「足を縛りなさい」って布をくださった方がいたり、杖をくださった方がいたり、最後のところは自転車にのせてくれる人がいたりして、いろんな人のご親切を受けながら御幸橋に辿り着いたら、そこはもう本当に地獄でした。もう私の見た一番の地獄でした。

石川 銀林さんの場合、原爆の影響というのは。

銀林 やつぱりありました。二年目にちよつど郷里に帰ってい

たときに、突然紫の斑点が出てきて紫斑病になり、冬休みをつなげて一か月以上郷里で学校を休みました。それから十年ぐらいは弱い人ということでした。いな病気をやりました。やつぱり原爆の影響だろうと思いますね。その頃はそんな考えはなかったのですが。

石川 でもその程度で済んだというのは珍しいですね。

銀林 そうですね。まあ室内だったことと、それから逃げた方向が爆心地と反対の方だったというところで、放射能の影響が比較的朋友達より少ない方だったんではないかなと思っているんです。でも何年経つてもそれで安心ということはないわけです。

いつまでも続く放射能の不安

石川 昨年は暗い出来事がたくさんありましたが、その中でも東海村の原発事故はショックでした。被爆者としてはどうお考えですか。

銀林 あんな安全宣言やられたってね、そんな安全ということとはありえません。五十年、半世紀経ってもまだ不安を持っているわけですから。それに私どもが受けたウラニウムの爆弾どころの騒ぎじゃないでしょう。中性子の放射線を直接受けているわけですからね。今治療は進んでると言ったって、中性子の被害なんというのは大変なことです。

石川 私も高校のときですけれど、被爆の後遺症について広島

の資料館で見ました。強烈なショックでしたね。生き方を考えさせられました。そういう点で被爆の実際を語っていくというのは大切なことだと思えますね。

銀林 ええ、それだけは繰り返させたくないという思いがあるから、やっぱり広島からは抜けられないなんて思いながら話してきました。まあ本当に被爆者にとつてはいろいろ放射能のことを言われると子どもだとか孫の病気だとか健康のことが一番気になりますよね。私はあんまり公には今まで言つてなかったんですけれど、息子と娘が、二人とも小さいときに、息子は足が痛いと言い出したことがあったり、娘の方は健康診断で引っかかったりとかということ

があると思うずっとんで行つて、「私が被爆者ですけれど」というふうなことでよく見てもらうようお願いしたことがあったんです。幸い二人とも元気ではいるんですけれど、息子の方には子どもがいらないし、娘の方は二人孫がいるんですけど、上の子が三歳のときに紫斑病をやったんです。そのときは私のせいじゃないかと思つて本当に辛かったです。今大きくなつて元氣になつたので嬉しいんですけどね。

石川 はっきり因果関係があるとかつていうことではないわけですね。

銀林 わからないから困りますよね。私たちの受けた広島ウランよりか長崎のプルトニウムはもっとひどいし、実際、親江

会の中にだって小学生ぐらいのときに被爆した人の方が今になって発癌性の影響を受けている人が多いですからね。東海村での事故なんか思ったら、本当に放射線の量なんていうのは比べものにならないくらい大きいわけでしょう。

そんな簡単に安全宣言なんかしてもらったって困るんだって言いたくなりますよね。

石川 被爆者の方というのは今お子さんやお孫さんに何かあるといつもそういうふうに結びつけざるをえないんですね。

銀林 もちろんそう思いますね。今では周りでもっともっと放射能の影響を受けていることが多いでしょう、そういう原発産業に関わっている方たちもい

るわけだし、そのために癌だって随分多いわけなんだけど。被爆者はとくに思いますね。

おそまつで危険な核の管理 崩れた「安全神話」

石川 そういう被爆された方がいろんな形で、まあ江戸川で言えば親江会をつくって地道にこつこつと伝えていく運動をされているということとは本当にすばらしいなと思うんですね。でも、そういう親江会の活動の中でも、もちろん生活の問題とかお互いに励まし合うという話もあると思うんですが。

銀林 そうですね、お互いに励まし合うということと、伝えよ

うということが。それは碑を造っていただいたおかげもあると思うんです。碑があつて毎年何か表現しなきゃならないということもあつて。それから核の問題があまりにもこうお粗末に扱われているということへの不安がありますからね。バケツで運ぶなんてあんなのは考えられないと思うけど、外から見たら本当にひどいと思います。

石川 信じられないですね。

銀林 かえって日本の国内にいて、「安全だ。安全だ」っていうから、それにのつかっている人が大勢いるんだけど、外から見たら本当に大変なんですよね。高木仁三郎さんという人が、原子力資料情報室というのが、本当はあの人は原子

力産業に初めは加わって夢のエネルギーだと思つてやつていて、これは駄目だと思つて、都立大学の教授だったときもあるんだけど、それをふつて民間の資料室を作ったんですね。随分いじめられもしながら原子力資料室というのを保つていらつしやるんです。その資料室に今度の事故でインターネットで、そのホームページへ四十万回のアクセスがあつて、その中には五万回の海外からのアクセスもあったというんですね。それだけ日本政府というのは信頼されていないんだなんて。海外からまでね。

石川 外国の研究者がこの原因究明に入ってくるというんでしょう。日本の研究者が一番原

爆については進んでいると思つていました。それよりも、政府がそれを断つたりしているのはメンツというかなんか閉鎖的な気がしますね。東海村の村長も政府の対応の遅さ、まずさを指摘していましたが。被爆国であり、厳密に管理されていると思つた国で事故が起こつたことも信じられませんが、そのあとの対処の仕方というのにも氣になりますね。

銀林 うーん、だからそういう民間の細々としたところにアメリカの政府機関も含め多くの間い合わせがあつたつていうのは、日本政府というのはアメリカからも舐められて、基地だけ提供してアメリカの属国もいいところじゃないかと思ひますね。

もつと子どもたちに伝えたい

石川 親江会の方で学校にもいろいろお話にきていたいていますけれども、銀林さんも相当行かれました。

銀林 ええ、何校か行かせていただきましたけれど、昨年はとくに初めてという方が何回か行きました。やっぱり話して良かったと本人たちも言っています。子どもたちも静かに聞いてくれて嬉しかったし、あとから感想を先生から送つていただいた、それを宝物にすると言つている人もいます。本当に自分の孫のような子どもたちに下手でも話ができるというのがありがたいし、先生たちもとても熱

心に聞いていただいて嬉しかったと言っていますから、もうちよつと広がるといいなと思います。

石川 被爆の問題を通して子ども達にとくに伝えたいことはどんなことでしょう。

銀林 私は、そうですね、やっぱり戦争は絶対いけないということを……。湾岸戦争やなんかのことは見ても上から爆弾を落としたり、やつつける方の側からしかものを見てないと何かつかないような感じになってしまっただけで、その下の世界、展開される世界を想像してほしいということですね。その下にどんなに悲惨な状況が出てくるかということを考えたら、武器は絶対に使っちゃいけない、話

し合いでもって解決というのを分かってほしいと思います。

石川 憲法の精神ですね。

銀林 戦争は絶対に悪だと思えます。いかなる戦争も正義の戦争なんてだいたいいないでしょう。何か平和維持のためとかそんなことを言ったってやっぱり武器を持ったらおしまいだと思うんですね。湾岸戦争のあとだつて劣化ウランを使った爆弾というののもひどいんですね。あれでやっぱり核被害が出てきているわけでしょう。

石川 学校では、ゲストティーチャーとか、江戸川に住んでおられる被爆者の方が学校に入つて實際話をしたり、子どもから意見を聞いたりとか、そういう場がわりと継続にあると

いいなと思つて。銀林さんに一番望むのはそういう教師の経験というのをふまえて計画的に進めていただきたいですね。

在外被爆者を支える活動を

銀林 私は教員を辞めてからいろいろな運動に関わつてきて、今一番、被爆者の問題で思っているのは在外被爆者の問題なんです。

日本の厚生省というのは分離政策というのかしら、国内での援護法はできたけれども、被爆をされた韓国やブラジルの人には適用しない。関係する国の人々が共同するのを恐れています。この方たちは日本の被団協とか被爆者の集まりと関わることを



在韓被爆者の方々を迎えて（1996年）

国から止められていて、それが一昨年四カ国共同行動ということで、パネルディスカッションをやってお呼びして、昨年は決起集会にも参加し、みんな同じ

立場だということで、裁判自体は韓国の方が起こしているのだけれども全く同意見だからと証言に立つと言ってくれて、それが実現したのです。私もこれは何をおいてもという思いで大阪に行って、実際感動もして帰ってきたんですけどね。その裁判はどうしても勝たせたいと思っています。

石川 これは新しい年の抱負です。すね。

銀林 在外被爆者への援護を実現させたいということが私の願いです。援護法ができたなら、在外被爆者や一般戦災者への道を開くというふうに言われていたけども、実際援護法ができて四年目になりますが、それは実現できてないでしょう。それは援

護法を実現するためにやってきた私たちの運動自身にも反省しなきゃならない面があるんだろうと思うんです。被爆者を分断し差別するということを認めるわけにはいかないんです。支配する側はいつでもバラバラにして支配しようとするんですね。私が最初に入った目黒学園なんていうのは給料が一人一人違ってたんですよ。

石川 今、東京都が教員にそれをしようとしているんです。人事考課ということで校長が成績をつけて教員を五段階に分けて、それで分離していく…。

銀林 分離していった上の人には少しよくしてあげるから、やつぱりみんなそれに弱いから乗っかるし、みんな苦しいから

そうなるんだけど。

石川 この裁判なんかもそうです、ね、一緒になられたら一番困るわけですね。それでは最後に先輩として、とくに被爆者の立場から学校の教職員に対して望みたいことというんですかね、こうあってほしいとか遠慮なく言っていたらだけば。

それぞれの人權と

命を大切に

銀林 そうですね。おこがましいけど、それぞれの人權と命を大切にということが一番基本にしていたきたいですね。何か悪い法律がいっぱい通ってしまつて、あれよあれよという間に法的には戦争ができる国に

なつてしまつたけれど、それを実際に役立たない法にさせるために、それぞれが協力しなければできないことです。だから法に逆らつてでもとにかく命を守るんだ、戦争は悪いんだというのを主張し続けるというのがやっぱり法を骨ぬきにしてしまふ力なんじゃないかなと思います。今のところ江戸川なんかでも戦争はよくないと思つている人たはいっぱいいるわけでしょう。親たちの世代はそうだし、区役所の方だつて議員さんたちだつて何党でもみんな……。

石川 追悼式の中里前区長や多田区長のあいさつもりっぱです。

銀林 そうですよ。戦争は

よくない、戦争を考えるいい機会にしたい」つて、いつも言われます。それをそのまま守つてというかしら、そうやっていけばやっぱり戦争に協力なんてできないわけですよ。憲法も変えられるかもしれないけど、今は憲法を盾にしてでも、人間としてせつかく生きているんだから命は大切にして、武器なんかの協力は絶対やらないところに徹するというのが、あんまり難しいことはわかりませんけどそれが私の願いです。

石川 どうも長い間ありがとうございます。



認定訴訟における原告の声

二〇〇六年原告 奥田 豊治

体調の異変から集団認定申請へ

私が体調の異変に気付いたのは、昨年の冬、岩手にある安比高原スキー場で滑っていた時のことです。前森山の頂上からセンターまで、約三キロを一気に下りてきても平気だったのに、わずかに百メートル滑っただけでも息切れがするのです。でも、あまり気にしなかったのですが、地元のスキークラブで志賀高原にツアー中、奥志賀から焼岳までトラバースできず、途中で何度も立ち止まり、ハアハアしてやっとなどり着くという始末に驚き、これはおかしいと思いま

した。

帰京して、聖路加病院の専門医に診察してもらい、いろいろな検査を受けました。その時は異常がないということだったので一安心しました。ところが、それからしばらくして心臓がどきどきして止まらなくなりました。先生に電話したところ、すぐ来るようにと言われ、聖路加に行き検査を受けました。結果は不整脈だけでなく、他の数値も異常を示していました。その際、内分泌が気になるということで、専門の先生を紹介されました。

またまた検査です。そして甲状腺ホルモン分泌亢進症と診断されました。そのころには、体重がどんどん減って行き、六十キロあったのが五十三キロになっていました。直ちに治療に入りましたが、どうしてこんな病気になったのか分かりませんでした。両親にも兄弟にも同病の者はいません。友人の医師には「発症者は若い女性に多いのに、お前のように男で、しかも高齢者とはね」と不思議がられる始末でした。



原発認定集団訴訟の原告・支援者による厚生労働省前
座り込み（東京反核医師の会事務局だより、2009.6.9）

病状は一進一退が続いていましたが、そうした時、この病気が原発症の申請対象に含まれていることを知りました。チェルノブイリの被曝者に、甲状

腺の腫瘍や種々の障害が発生していることを思い出しました。同時に、もし自分の病気が被曝によるものであれば、六十年経っても深刻な症状を引き起こす、その原発の恐ろしさを改めて思いました。今一度、世界の何処でも、核兵器が使用されれば、人類の、いや地球の未来はありません。そして、この病気も、核兵器の廃絶を訴える素材になることに気がきました。

早速、東友会相談員の村田未知子さんに相談したところ、「それなら、四月に集団申請に加われば」とアドバイスしてくださいました。それから申請書と医師の診断書をそろえ、集団申請の仲間に入れていただきました。

この行動を通して、一人でも多くの人達に、核兵器の非人間性を知っていただき、平和世界の実現に向かって、一歩前進していければと願っています。

認定却下から集団提訴、勝利へ

原爆症の認定申請をしたのが二〇〇六年の四月、却下処分が十一月。却下処分取消の訴訟の開始が二〇〇七年の五月。それから二年後の二〇〇九年一月から本人尋問が始まり、私も二月二十四日に裁判官・原告代理人・被告代理人からの尋問を受けました。その時に被告である国の代理人が、あの過酷な戦時下の生活を全くと言っていい程に知らないことを知りました。我々被爆者が語り部となり、あの惨状を語り継いでいく必要を痛感しました。

そして、翌二〇一〇年三月三十日、東京地裁第一〇三号法廷に於いて歴史的判決が言い渡されました、勝訴です。甲状腺機能亢進症が原爆症として初めて認められたのです。

原告団の一員として、一緒に闘ってきた親江会の榎木実さんも勝訴です。この間に四年の歳月が過ぎ

ました。長い長い闘いでした。

この勝利は、弁護団の先生方をはじめ多くの支持者の手厚い支援の賜物だと深く感謝しています。

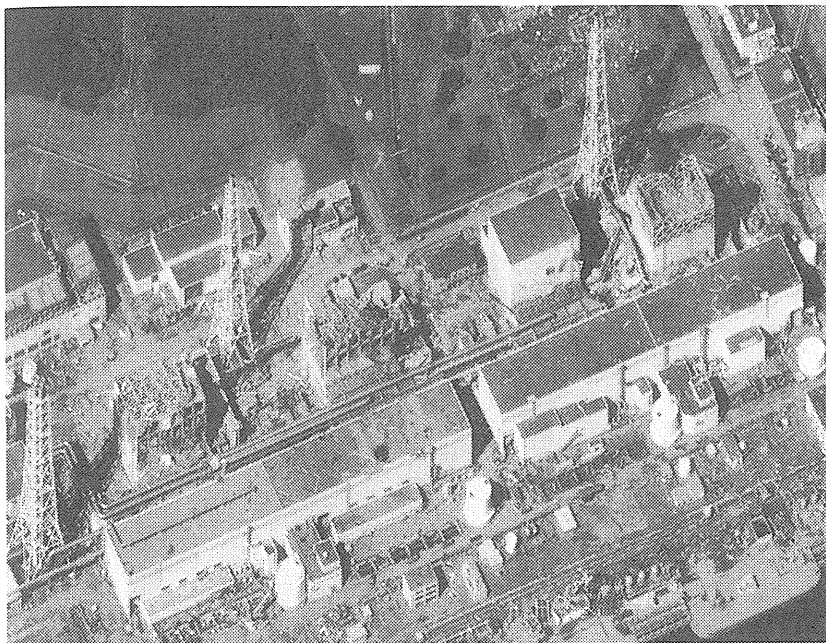
でも、手放しでは喜べません。第二次原告三〇名のうち二名が敗訴という結果でしたし、親江会の畑谷由江さんが原告の一人である第三次の訴訟もこの二月に結審し、間もなく判決がでる予定です。また、認定申請でも却下数が増えています。まだまだ闘いは続きます。

何よりも、世界の核兵器は廃絶より程遠い実情です。私たちは被爆者への手厚い援護と広島・長崎の悲劇がこの地球上に再現されることのないように、核兵器のない世界を目指して運動を進めてく必要があります。その為にも、世界中の人に、特に若い世代の人達に働きかけていかねばと思います。皆さん、ありがとうございます。これからも一緒に努力してまいります。お願い致します。

被爆者として

福島原発の事故に接して

高比良 毅



サンデー毎日緊急増刊3、6月25日号

6月4日付けの新聞で、「福島第一原発の作業員で総被曝量が250ミリシーベルトを超えた作業員が8人に、100ミリシーベルトを超えた人が合計102人になった」といいます。

3月11日の東日本大震災から3カ月も経ったというのに、収束しない「原発」の放射能漏れ事故で被ばくした人たち、放射能汚染で福島周辺から避難しなければならなかった人々に、心からお悔やみ申し上げます。

原発事故が起きたために、シーベルトとかベクレルとか、多くの放射線の言

葉が出ています。

原爆被ばく当時、私たちは放射線という言葉すら知りませんでしたし、被ばくの目安すらわかりませんでした。はっきりしているのは、私たち被爆者は、当日の熱線や外部放射線で被害を受け、大多数は亡くなりました。「入市被ばく」や「体内被ばく」にあった人々もさらに多数いて、数十年の間に多くの方々が亡くなり、今もその被害に苦しんでいる人が大勢いることです。

特に、被ばく時小学生だった私たちは、将来が

とても不安でした。

いろいろな資料から、広島での原爆投下1日目の残留放射線は200ミリシーベルト、2目は100ミリシーベルトだったといえます。このような放射線の単位は何の事故とか、なかなかこの事故の報道の中からははつきりしません。しかし、どうやら広島市の被爆翌日の放射線量以上のものが、この3カ月の間に溜まったことになるのではないのでしょうか。3カ月だからといっても、内部に蓄積したら広島・長崎と同じくらいの量ですし、

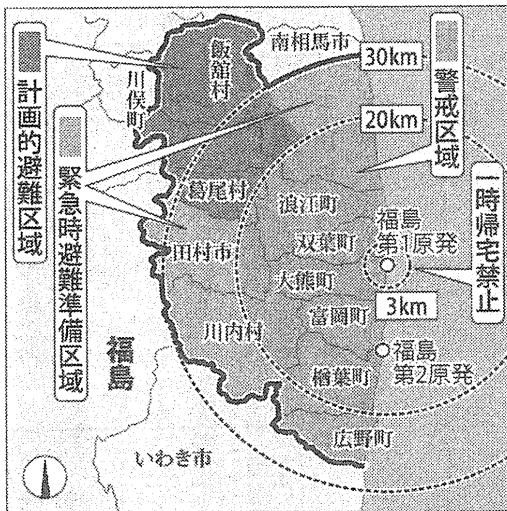
もっと心配なのは以前被ばくした私たちより福島や周りの県の胎児、幼児、小中学生の子どものことです。

放射線がどんな影響を

す。

人体に及ぼすのか、シー

(2011年6月)



サンデー毎日緊急増刊3、6月25日号

東京電力・福島原発爆発事故と

子どもたちの被ばく

小田美智子

はじめに

3月11日午後2時46分、マグニチュード9という東北地方太平洋沖巨大地震が発生し、大きな津波によって、人も町も丸ごとさらわれてしまった所もあり、あらゆるものが破壊されてしまいました。その様子は、まるで映画のセットのように、本当にあつたこととは思えないほどです。多くの人々が被害を受け、死者1万5341人、行方不明8,298人、避難している人が9万9398人(6

月4日現在)とされています。

しかし、そのような大変な災害の中で、最も恐ろしいのは、東京電力・福島第一原発で4基の原発が破壊し放射性物質が大量に放出されたことです。目に見えない放射性物質で、大地も海も汚染されてしまいました。原発から20^{キロ}以内の人々は、突然、避難を命じられたため着の身着のまま逃げだし、何十万という家畜やペットが置き去りにされました。

福島原発の爆発からもう3か月になるうとしています。が、原発からはまだ放射性物質が出続けてい

ます。3基の原発が同時にメルトダウンするという世界ではじめての重大事故のために、どのようにしたら事故を終わらせることが出来るのか、放出された放射性物質がどのくらいの量になるのか、避難した人々がいつ自分の家に帰れるのか、何もかもまったく分かっていません。原発を安定させるために、大勢の作業者が被ばくしながら懸命に働いています。その人々の健康も大変心配されます。

原発事故は原発を超える。

原発は核分裂を一回に行う原子爆弾ですが、原発は原子力発電所のことで、原発の原理と同じ核分裂を制御しながら行って、その時に出来るばう大な熱でお湯を沸か

し、出来た水蒸気でタービンを回して電気を作っています。

核分裂によって作られる放射性物質は、原爆も原発と同じですから、放射性物質による被害も同じです。そういう意味で、原発と原爆は同じだということが出来ません。しかし、広島原爆はウラン800gの核分裂、長崎原爆はプルトニウム1kgの核分裂だったとされています。福島原発には何百kgものウラン燃料が入っているのです、その中にある放射性物質の量は膨大で原爆の比ではありません。

で汚染されました。この事故は1基の原発が爆発しただけです、広島型原爆の500kg分を超える放射性物質が放出したといわれます。そのため、原発から30km圏内は「死のゾーン」とされて、二度と人々が暮らすことが出来なくなりました。放射性物質によって被災したウクライナ、ベラルーシ、ロシアの3国には、700万人を超えるヒバクシャが生まれたとされています。

先日、NHK・BS放送で、2011年にフランスとベルギーで共同制作された「永遠のチェルノブイリ」という番組が放映されましたが、最新の現地の情報も報じられて大きな衝撃を受けました。

チェルノブイリ原発事故でも

とも多くの被害を受けたウクライナの医師が、「事故から5年後以降、ウクライナでは人口が700万人も減少した。治療を必要とする健康被害を受けた人々が225万人を超えている。子どもたちに深刻な影響が出ており、健康に問題のない子どもはわずか5〜10%である。多くの子どもたちが慢性的な病気を抱えている」などと語っていたのです。このことは、福島原発事故後の日本の未来を予感させるもので、とても恐ろしいことです。

福島原発の事故は、はじめは国際基準でレベル5だったのが、大量の放射性物質が放出されたことが分かり、4月12日にチェルノブイリ事故と同じレベル7に引き上げられました。

福島原発から放出された放射性物質は、日本だけではなく、アメリカやヨーロッパでも測られているように、地球全体をぐるぐると回り雨と一緒に降って、いろいろな国を汚染していると考えられます。

人が放射線に被ばくすると、

原爆が落とされた広島・長崎では、その瞬間に亡くなった人々も大勢いましたが、その年の暮れまでに生きていた人々も、被ばくしたために助かる可能性がないとされ、22万人以上の人々が「即死者」とされました。1950年に生存されていた30万人以上の被爆者の中か

ら10数万の人々が放射線の影響を継続して調査、研究されており、その結果が世界の放射線防護の基準とされました。

原爆が投下されてから今年で66年になります。現在まで生きてこられた被爆者の中には、ずっと元気であったのに、突然がんになったり、もう起きるはずがないとされていた白血病になったり、一人の人がいくつものがんになったり、がん以外のさまざまな病気になって苦しんでいる人々が大勢います。体の中に潜んでいた被ばくの影響が消えないで残っていて、何十年も経ってから現れ始めたのです。

広島・長崎の原爆と同じように、東京大空襲では、一夜にして10万人以上の人々が亡くなりました。し

かし、生き残った人々に何十年も経ってから、その影響が現れるということはありません。

原爆が残酷な兵器であり、廃絶されなければならぬとされる理由は、破壊力の大きさだけではなく、一瞬の被ばくによって、一生涯苦しめられるからです。このことが普通の爆弾と原爆との大きな違いです。原爆が残酷なのは、核分裂によって作られる放射性物質から出てくる放射線が、生命にとって非常に危険だからです。

1954年3月1日、アメリカがミクロネシア・マーシャル諸島のビキニ環礁で水爆実験を行い、日本の多くの漁船が被爆しました。「第五福竜丸」の乗組員23名が被爆し、1名が亡くなり大きな事件となりました。

した。ビキニによって、日本はヒロシマ・ナガサキについて、三たび核兵器による被害を受けたことになりました。

ビキニ諸島では、空からサンゴ礁の白いかけらと放射性物質とが一緒になって灰のように降って来て、大勢の人々が被ばくし、見たこともない「新しい病気」になりました。このことから、放射性物質のことを「死の灰」ともいうようになりました。第五福竜丸の乗組員の人々も死の灰を浴びて、すでに半数以上の人々が亡くなっています。

これから先は、放射性物質のことを、その性質をよく表している「死の灰」と書けいじります。

ミリシーベルト、マイクロシーベルト、ベクレルとは？

政府は、福島原発から出たヨウ素131やセシウムなどの死の灰で汚染されたホウレンソウや魚、水道水などの安全性について、例えば、「300ベクレルの水道水をシーベルトに換算すると0.0066ミリシーベルトになる。この水を毎日1リットル、1年間飲んでも、2.4ミリシーベルトにしかならないので、少しくらい飲んでも問題はなし」というように説明しています。

このベクレルという単位は、「1秒間に出る放射線の数」のことです。それをシーベルトという「放射線が体に与える影響を考え、た時の放射線の強さ」の単位に換

算すると、人への影響が分かります。1シーベルトの1000分の1が1ミリシーベルト、1ミリシーベルトの1000分の1が1マイクロシーベルトです。

「空気中の放射線量が毎時0.6マイクロシーベルト」などという時の毎時は、1時間についての数値なので、これを1年分に換算するときには、 $0.6 \text{ マイクロシーベルト} \times 24 \text{ 時間} \times 365 \text{ 日} = 5.256 \text{ マイクロシーベルト}$ 、これを1000倍にすると約5ミリシーベルトになります。

普通の人の基準値は1年間に1ミリシーベルトですから、毎時0.6マイクロシーベルトは、その5倍に相当することが分かります。

また政府は、「2000ベクレルのホウレンソウを毎日1^{キログラム}、1

年間食べ続けても、1回分のCTスキャンの5分の1にしかならない。食べ続けなければ、ただちに体に影響は出ない」というような説明を何度も繰り返していました。この時政府は、食べることで内部被ばくすることと体の外から浴びる外部被ばくを区別しないで説明しています。後で説明しますが、これは大きな間違いです。

また政府は、「ただちに影響はない」という意味には、「後になって影響が現れるかもしれない」という意味が含まれていることを、市民との交渉の場で明らかにしています。

いつ死の灰は安全になるの？

「死の灰で汚染された水は、沸騰させたら大丈夫ですか？」などと考えた人も多かったようですが、死の灰から出てくる放射線は、1億分の1程度らしいの原子の、そのまた1万分の一くらいのも、原子核の中から出てきます。人間が煮たり焼いたりしても、放射線が出ないようにすることはできません。

「死の灰を人の手で無害なものにすることができない」「死の灰が安全になるのは、半減期を経て放射線が出なくなるのを待つしかない」ということが、死の灰の取り扱いを非常に難しくしています。福島原発の事故処理も、死の灰がなかったら被ばく作業の問題もなく、もっと早く安全にするこ

とができるのですが。

死の灰から体を守るためには、逃げるしかない、といわれるのも、ヒトの手で無害にできないからです。しかし、体の中に入った死の灰からは逃げることはできません。それが内部被ばくが危ないという理由です。

ヨウ素131の半減期が8日とか、セシウム137の半減期は30年だとかいわれていますが、半減期とは、「死の灰から出てくる放射線の量が半分になる時間」のことをいいます。残りの半分が半分になり、さらに半分になるというふうに減っていったら、半減期の10倍の時間で、元の1000分の1になり安全になるとされています。福島原発からはプルトニウム

239やストロンチウム90という
のも出ましたが、それぞれ半減期
は2万4000年と29年です。プ
ルトニウムが安全となるのは、最
低でもその10倍の時間、24万年！
も必要です。

ただし、半減期が短いと、長い
ものよりも安全な感じがします
が、実は逆で、短いものの方が強
い放射線を集中して出すので危険
だとされています。

原発で使った後の「使用済み核
燃料」には大量の死の灰が含まれ
ているために、その処分には、ど
この国も困り果てています。何十
万年という長い間、安全に管理出
来る保障がまったくないため、も
しも失敗したら子孫に大変な迷惑
をかけてしまうからです。

原発は重大事故も大変恐ろしいも
のですが、一瞬で使ってしまう電
気のために、何十万年も危険なも
のを子孫に残すということも大き
な問題です。

また、福島原発の事故について
いえば、その電気を使っていたの
は、東京などの都市の住民でし
た。しかし、死の灰の被害を一番
多く受けたのは福島の子どもたち
でした。京都大学の小出裕章先生
は、5月23日、国会でこのことを
「不正」であると言われました。
原発を、電気の消費地ではなく、
人口の少ない町に作るということ
が「不正」であったことを、事故
が起きる前には、消費者である私
たちはあまり自覚出来ないでいま
した。しかし、福島原発の死の灰

は、福島から300キロ以上も離
れた東京や神奈川にも飛んできた
のです。

外部被ばくと

内部被ばくの違いは？

次頁の図は、政府が今から50年
以上前に、日本にはまだ原発が1
基もない時代に、16万キロワット
という架空の原発から2%の死の
灰が漏れた事故によって、どのよ
うな被害が起きて、どれくらいの
損害額となるかを試算した報告書
に載っている図です。この報告書
で、最悪の場合には、国家予算の
2・2倍に相当する3兆7千3百
億円となるとされています。政府
は原発を作る前から、原発の大事

図には、外部被ばくと内部被ばくの様子がきちんと説明してあります。図の左上の「原子炉」を福島原発と考えてみてください。図の左側半分で起きる被ばくは、主に「外部被ばく」です。原発から直接出ている死の灰（ α ガンマ線）や、放射能雲から雨によって地面に落ちた死の灰が、田畑を汚染していることが分かります。

右側は、人の体に入った死の灰が、どのように体の中をめぐるっていくのかを説明しています。これが「内部被ばく」です。図の右端に、「身体の中の線による内部被ばく」とだけ書いてありますが、 α ガンマ線による内部被ばく

内部被ばくは、肺、消化器、骨、甲状腺などに入り、そこに留まって放射線を出し続けるために、細胞やDNAに与える影響が大きいのです。しかし、内部被ばくを正確に計算することは、現在でもほとんど不可能だといわれています。体の外から測定することが出来ないことや、呼吸する時の空気の中の死の灰の量、飲食物に含ま



れている死の灰の量、肛門や膀胱から出ていく死の灰の量などを正確に測ることが非常に難しいからです。

前頁の図によつて、福島原発事故で放出された死の灰について、Cトヤレントゲンと比べてまったく問題ない、という説明が間違いだということがよく分かると思います。

2003年からはじまった原爆被爆者の裁判で、裁判所が内部被ばくを認めた結果、被爆者の勝訴が続いています。しかし、政府は、30回以上も負けていながら、原爆被爆者の内部被ばくを認めようとはしていません。

死の灰に一番弱いのは??

4月30日に、千葉のお母さんの

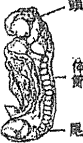
お乳からも死の灰が出たというニュースがありました。政府は「微量だから健康には影響がない」といっています。

しかし、多くの科学者が微量でも死の灰に一番弱いのは赤ちゃんや胎児だといっています。その理由は、細胞分裂の速さが大人に比べて速いからだといっています。胎児はたった一粒の受精卵という細胞から、10カ月あまりで赤ちゃんになって生まれてくる頃には、細胞は28兆個というすごい数になっています。その間の体のいろいろな部分が出来る時間が違っているために、死の灰の影響もそれぞれに違っているとされています(次頁の図を参照)。これは死の灰だけではなく、化学物質などの影響も

同じなので、元気で生まれてくるというのは、ものすごく大変なことなのだということが分かります。

生まれたばかりの赤ちゃんは28兆個の細胞から、さらに細胞分裂を盛んに行いながら約15年経つと、細胞の数が60兆個くらいなつて大人の体になります。お腹の中の胎児の成長の時間と、赤ちゃんから大人になるまでの成長の時間はまったく違っていますし、大人になると成長しません。そのため、死の灰の影響は胎児、子ども、大人と3段階で違つと考えられているのです。ある研究者は、その違いが大人1に対して子どもは10倍、胎児は150倍だといっています。

胎児と放射線被ばくの図

時間	着床前期			器官形成期		胎児期	
	受精卵	4～5日目	約8日目	約3週目	4～8週目	約20週目	約38週目
成長							
	0.1～0.2 ^μ の1個の細胞。	数百個の細胞になる。	子宮壁に着床すると、妊娠の成立。	全長2 ^{mm} 。器官のできる場所が決まる。	各器官ができて約2.5 ^{mm} 、4 ^{mm} に。	胎動が始まり約23 ^{cm} 、300 ^g に。	細胞が28兆個となり出生。約30 ^{cm} 、3 ^{kg} 。
放射線の影響	このころに被曝すると、胚が死んでしまうので流産する。				このころに被曝すると奇形児になる。		
	微量の放射線的作用：放射線はDNAに傷をつけたり、切断したりして、突然変異を引き起こす。その結果、細胞がガン化したり、奇形児が生まれる。また、表面に現れないDNAの損傷が子孫に伝えられるので、長い間に、生物の中にDNAの損傷が蓄積していく可能性がある。						

(参考資料：柳沢桂子著『いのちと放射能』)

政府は、この3段階の区別をしないで、大人も子供もすべて同じ影響になるとしていますが、細胞分裂の速さの違いからいって、これは正しくないと思います。死の灰によって一番傷つくのは細胞の中の「生命の設計図」とされているDNAであり、DNAが細胞分裂をして、細胞の数を増やしている時が一番傷つきやすいということが、100年も前の動物実験で分かっていたことだからです。

つまり、死の灰の問題は、大人よりも子どもや胎児にとつてはるかに重大な問題なのです。

国は、子どもを見捨てるのか。

4月11日に福島県の郡山市立橘小学校で測られた放射線の量は、1時間当たりで、教室は0・25マイクロシーベルト、校庭は3・63マイクロシーベルトでした(HPより)。内と外では約14倍もの差があります。4月19日の夜になつて、国はこういう死の灰で汚染された小中学校や幼稚園、保育園等について、1年間で20ミリシーベルト以下なら、通学や通園をしてもいいと決めました。橘小学校のデータで1年間の量を計算してみると、教室は約2・2ミリシーベルトですが、校庭は約32ミリシーベルトで、国の決めた20ミリシーベルトの

1・6倍になります。国は、そういう時には校庭に出てはいけなと指示しています。

死の灰は学校だけではなく、その町全体を汚染しているのです。通学する時や家での生活で被ばくする量を計算すると、子どもたちの被ばく量はもつと多くなってしまうでしょう。

ところが、もつと重大な問題が分かりました。20ミリシーベルトというのは、外部被ばくだけだったのです。子どもたちが息をして、給食を食べ、水を飲んで生きている、内部被ばくをするということが無視されています。政府は子どもたちのことをロボットだとも考えているのでしょいか？

この20ミリシーベルトと言っ

は、普通の人の基準値である1年に1ミリシーベルトの20倍です。

いへら「非常時」とはいえ、子どもにそのような被ばくを強制することは、子どもを見捨てることとなります。なぜ、政府は戦争中に子どもを敵の攻撃から守るために疎開させたように、福島の子どもたちを死の灰から守るために疎開させたりしないのでしょうか。この問題について、福島のパウチたちが政府に撤回するよう求めました。しかし、5月27日、政府は撤回をせず、「目標を1ミリシーベルト以下にする」と発表しました。

この「1年に1ミリシーベルト」という基準はICRPという国際機関が出している基準で、大人に対する基準です。子どもの基準では

ありません。また、この基準が内部被ばくをほとんど無視したものであることも、日本の政府が内部被ばくを認めない理由の一つです。ICRPの2007年の文書のはじめに、放射線防護の基準は「被ばくを伴う望ましいヒトの活動を不必要に制限しないこと」と書かれてあります。つまり、基準値は、核兵器や原発を推進するために都合のいいものである、ということです。子どもの基準を作らず、内部被ばくを認めないのもそのためだと考えられます。

長い地球の歴史から考えてみると、どうしても避けられない自然放射線の中で、人間は何万年も生き続けてきました。人工放射線に出合ったのは、たった100年ほどです。

しかし、それがどのくらい危険なのかは、まだよく分かっていないので、すから、胎児や子どもを守るための基準は、ゼロが正しいと考えなければならぬと思います。

おわりに

1963年、アメリカのケネディ大統領が、空中での核実験を止めるために、次のような言葉で議会に訴えました。

「核実験によって、死の灰を浴びた子どもや孫たちが白血病や骨のガンになる数は、普通の病気になる子の数よりも少ないかもしれない。しかし、これは普通の病気ではない。たとえ一人の命が失われようと、あるいは、われわれ

が死んだずっと後で生まれてくる赤ん坊のうちのたとえ一人が奇形になるとしても、そのことにみんなが関心を持つべきである」

この訴えが成功して、大気圏での核実験が停止されました。

福島県の飯舘村が、原発から30^キ離れているのに、チエルノブイリ事故で強制的に移住させられた量の1・4倍もの死の灰で汚染されていたことが分かって、5月中に避難することになりました。そのため、東電の住民説明会が行われ、その会に参加した15歳の少女から、次のような質問が出されました。

「私が将来結婚した時、被ばくしていて、子どもを生めなくなったら補償してくれますか」

この原稿を仕上げようとしていた時、「子どもたちを放射能から守るネットワーク」の中心聖一さんから6月6日、次のような訴えが飛び込んできました。

「福島はこのまま子どもたちを生活させてよい場所ではありません。子どもたちの命に換えることはできません。避難しましょう。疎開させましょう。福島県民のみなさん。決断の時が来ています」

また、被爆医師で著名な肥田舜太郎さんの元へ、福島のお母さんから「子どもが下痢をして止まらない。頭痛がひどい」などという訴えがきているそうです。内部被ばくの影響が、すでに始まっているようです。

(追悼碑の会)



(1996年～2010年)

そ の 他	世界の動き
被爆証言(篠崎五小、西葛西中、Eコープ)。アオギリ植樹。鳩になって第4集発行。合唱団初参加。丸木位里画伯逝去	阪神・淡路大震災。オウム真理教事件
被爆証言(宮前中、二之江二小)。在韓被爆者来日交流	労働者派遣法改正
被爆証言(江戸川高校、南小岩小、二之江二小、都税支部江戸川分会)	地球温暖化で京都議定書採択。相次ぐ金融破綻
被爆証言(七葛西小、東葛西小、品川ゼロ美術館、二之江小、小松中、都税支部江戸川分会)。日韓英3カ国語追悼碑しおり完成	インドで核実験。パキスタン対抗して核実験
被爆証言(小松川一中、松本小、二之江二小、京華女子高)。多田正見江戸川区長、終戦記念日に区幹部職員を連れ追悼碑参拝	東海村で国内初の臨界事故。国旗・国歌法成立
被爆証言(小松川一中、二之江二小、原水協)。丸木俊画伯逝去。江戸川原爆展(タワーホール2,500人来場)	九州・沖縄G8サミット。米ロ臨界前核実験
被爆証言(擁護学校教職員組合、二之江二小、小松川一中、都建築労組、宮前中)。平和祈念の集い。中里喜一前江戸川区長逝去	アメリカ同時多発テロ。アフガニスタン侵攻。小泉内閣発足
被爆証言(船堀小、二之江二小、都税江戸川分会、葛西二中、清新一小、筑駒中)。江戸川平和コンサート(第1回、以降継続)	東電トラブル隠し発覚
被爆証言(湘南学園、佃中)	イラク戦争。日経平均大底7,607円
被爆証言(東高校)。江戸川区議会は親江会提出の原爆症認定制度への意見書全会一致採択。佐々木美貴作「はとのひおりがみ」制作	小泉純一郎首相北朝鮮再訪し家族5人帰国
親江会40周年記念行事。原爆展。丸木美術館所蔵原爆の図14部東京大学博物館巡回展。追悼式を屋内で行うようになる	日本の人口初の減。日米同盟合意
被爆証言(高谷中、自治労、平和のための戦争展)。銀林美恵子親江会新会長に	安倍内閣発足
被爆証言(中央ロータリークラブ、七葛西小、駒場中、平和のための戦争展)。名簿碑を建立。	サブプライムローン問題が表面化
被爆証言(向陽中、清新町9条の会、両国・中高問題を考える会)	米大手証券会社リーマンブラザーズが破綻
被爆アオギリ二世の種を採取。丸木美術館学芸員岡村幸宣を追悼碑に案内	米オバマ大統領ブラハ宣言「核なき世界を目指す」
被爆証言(こどもの本9条の会、二之江中、丸木美術館、清新一小、二之江二小、演劇「島」を観る青年の会)。葛西区民館で平和展	米臨界前核実験
加藤進親江会新会長	東日本大震災。福島第一原発4基メルトダウン

江戸川原爆被爆者追悼式・親江会の16年

回	年月日	証言者 (広島・長崎)	名簿奉安者	追悼式 司 会	若い世代の発言	第二部 司 会
15	1995・7・16	方原 清 下道次男	松岡 優	三井 隆 篠原久子	篠崎第二小学校、東葛西 中学校、江戸川高校	藤田 弘
16	1996・7・28	山崎竹雄 長野慶子	富山真寿美	小林英年 岩根 妙	二之江第二小学校、上一 色中学校	藤田 弘
17	1997・7・26	関口智恵子 鹿島 レイ子	道下イツ子	小林英年 勝俣雅子	南小岩小学校、東葛西中 学校、江戸川高校	藤田 弘
18	1998・7・25	佐藤静江 山下ヒサエ	加藤定夫	宇田川 尚 三井勢津子	第七葛西小学校、東葛西 中学校、江戸川高校、	藤田 弘
19	1999・7・18	野村寛一 池田須恵子	高橋啓介	宇田川 尚 三井勢津子	一之江第二小学校、二之 江中学校、江戸川高校	丸 宗市
20	2000・7・20	高橋啓介 岡澤瑞穂	下道次男	宇田川 尚 三井勢津子	南小岩小学校、小松川第 一中学校、江戸川高校	丸・宗市
21	2001・7・20	加藤貞夫 中村誠治	徳能一馬	宇田川 尚 久保田恵子	二之江第二小学校、葛西 第二中学校、江戸川高校	丸 宗市
22	2002・7・20	民里八重子 今宮良介	中山鈴子	宇田川 尚 久保田恵子	一之江小学校、葛西第二 中学校、江戸川高校	丸 宗市
23	2003・7・20	高橋 清 藤内義雄	佐々木玲子	榎木充男 久保田恵子	葛西小学校、東葛西中学 校、江戸川高校	宇田川 耕史
24	2004・7・18	宮内良雄 佐藤美博	川田義男	榎木充男 久保田恵子	二之江小学校、瑞江第三 中学校、江戸川高校	宇田川 耕史
25	2005・7・17	奥田豊治 嶋口信子	田辺和彦	佐伯典子 久保田恵子	二之江小学校、葛西第三 中学校、江戸川高校	宇田川 耕史
26	2006・7・23	中岡喜美子 道下イツ子	田辺和彦	佐伯典子 久保田恵子	葛西第二中学校、江戸川 高校	宇田川 耕史
27	2007・7・22	菊野孝人 張本俊策	田辺和彦	佐伯典子 久保田恵子	春江小学校、二之江中学 校、江戸川高校	久保田 恵子
28	2008・7・20	畑谷由江 大楠栄子	田辺和彦	佐伯典子 久保田恵子	二之江第三小学校、二之 江中学校、江戸川高校	宇田川 耕史
29	2009・7・19	檜木 実 高比良毅	田辺和彦	伊藤定夫 久保田恵子	東葛西小学校、松江第六 小学校、紅葉川高校	宇田川 耕史
30	2010・7・18	貫 泰夫	田辺和彦	伊藤定夫 久保田恵子	清新第一小学校、小岩第 一中学校	宇田川 耕史
31	2011・7・17					

あとがき

「被爆証言集・鳩になって 第五集」を発行するため編集作業をしていたところ、はからずも東京電力・福島原発でメルトダウンという重大な事故が起きてしまいました。今世界中で、核廃絶と原発撤退の大きな動きが始まっています。

原子力発電所は取り返しのつかないような重大事故を起こすことが分かり、廃炉や事故処理補償、核廃棄物の永遠の保管などまったく割に合わない発電です。核兵器を持ちたい、持ち続けたいという意思が、原発政策から脱却しきれない原因と思われます。

核兵器は必ず実験をしなくては使用できないそうです。一発持てばすむものではなく、必ず何百発も配備しなくては核戦略にならないそうです。持てば使いたくなるでしょう。配備するためにかかった費用以上に奪いたくなるでしょう。配備するだけでも、死の灰をたくさんまき散らし続けます。今回の原発事故も死の灰は、世界中に広まり、空気や水や食物を通じて、人間の体の中からたくさんさんの被ばくをさせることは、だれにも避けられないでしょう。

被爆証言をより多くのひとに伝えるため、過去の証言集、第一と第二、第三と第四集の発行にかかわりのある諸先輩方と共に編集をいたしました。

今回の原発事故を通して、世の中には、原発問題に一生をかけて取り組んでいる人たちが、私たちの身近にもいることを知りました。そして、たった一人の行動が世の中を大きく変えるきっかけになることを実感しました。

江戸川原爆犠牲者追悼碑があるお陰で、ただの市民の愚痴ではなく、みんなで力を合わせて被爆証言集を発行できることに感謝いたします。遠いひとの痛みに思いを寄せて、声をあげていくことが大切だと学びました。（岡田隆法）



成長する江戸川原爆犠牲者追悼碑

設置年	なまえ	説 明
1981	追 悼 碑	四国産の縦、横とも2mの緑色の自然石に、『原爆の図』で知られる丸木位里・俊画伯が墨で直接に描かれた下絵を、200人も多くの市民がノミとハンマーを握って、40日かけて彫り上げたものです。「白い鳩の中に朱色の母子の図」は、広島・長崎で被爆して犠牲となった母と子が、鳩になって世界中に平和を訴えて飛んでいる姿を表しています。
1981	碑 文	原爆犠牲者追悼碑の文字は、広島の被爆者・相川弘氏の筆、建立の言葉を記した誌石の文字は豊田育香氏の筆になるものです。
1982	原 爆 瓦	爆心地の川底に埋もれていたものを広島・長崎の子どもや市民の手で掘り出したもので、広島と長崎の市長さんから寄贈されました。何千度という原爆の熱線によってケロイド状にただれています。手に触れてみてください。
1983	平和の鐘	追悼碑を訪れる方々に、犠牲者追悼と平和への願いを込めて鳴らしてもらうために造られました。あなたも平和への決意を込めて鳴らしてください。
1985	クスノキ ナンキンハゼ	クスノキは広島市の木、ナンキンハゼは長崎市の木で、それぞれ両市から贈られたものです。両市の平和公園には、私たちが贈った江戸川の木が大きく育っています。毎年行われる追悼式には、広島・長崎の両市長さんからメッセージが寄せられるなど、江戸川区と両市は親しい関係にあります。
1988	噴水の水	循環式の噴水です。台座にたたえられた水は、1日2回、追悼碑にかかるようにセットされています。水を求めて亡くなった原爆犠牲者の苦しみを少しでも和らげてあげたいという被爆者の心情をくんで、江戸川区の手によって設置されました。
1988	千羽鶴つり棚	幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校、子ども会やガールスカウトなどの子ども達が、平和を願って折った鶴をもって来てくれます。
1995	アオギリ二世	広島平和公園の被爆アオギリの種から育った二世です。三世となる実をつける大樹になっています。
2007	名 簿 碑	この追悼碑につながりのある亡き被爆者の名前を、碑の中に奉安してきました。その名前を確認出来るよう新たに名簿碑を建立しました。ここには293名の被爆犠牲者名簿（広島175名、長崎118名）が納められております（2010年7月現在）。追悼碑に向かって立つと、広島・長崎の方向に思いをはせるように建てられています。

追悼碑の由来

1980年、区内の被爆者、宗教関係者、教育関係者やその他の市民ら60人が集まって、「江戸川区に原爆犠牲者追悼碑を建立する会」を結成しました。そして追悼碑の建立につき、募金を呼び掛けると、当時の中里喜一区長をはじめ区議会各派も賛成され、募金は数千人の各界の市民から442万円が集まりました。

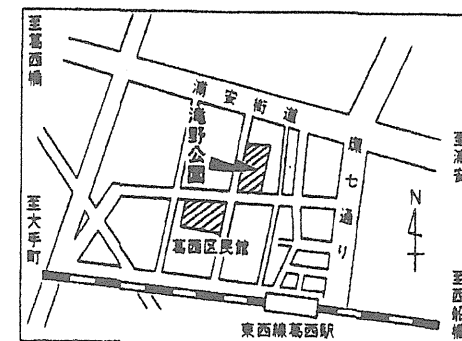
特に、区立小中学校の校長先生と教頭先生は、全員が募金に応え、また一般の先生、幼稚園・保育園の先生たちも学校ぐるみで支援して下さいました。

毎年7月下旬の日曜日に、江戸川原爆者追悼式が数百名の参加をえて盛大に開かれています。

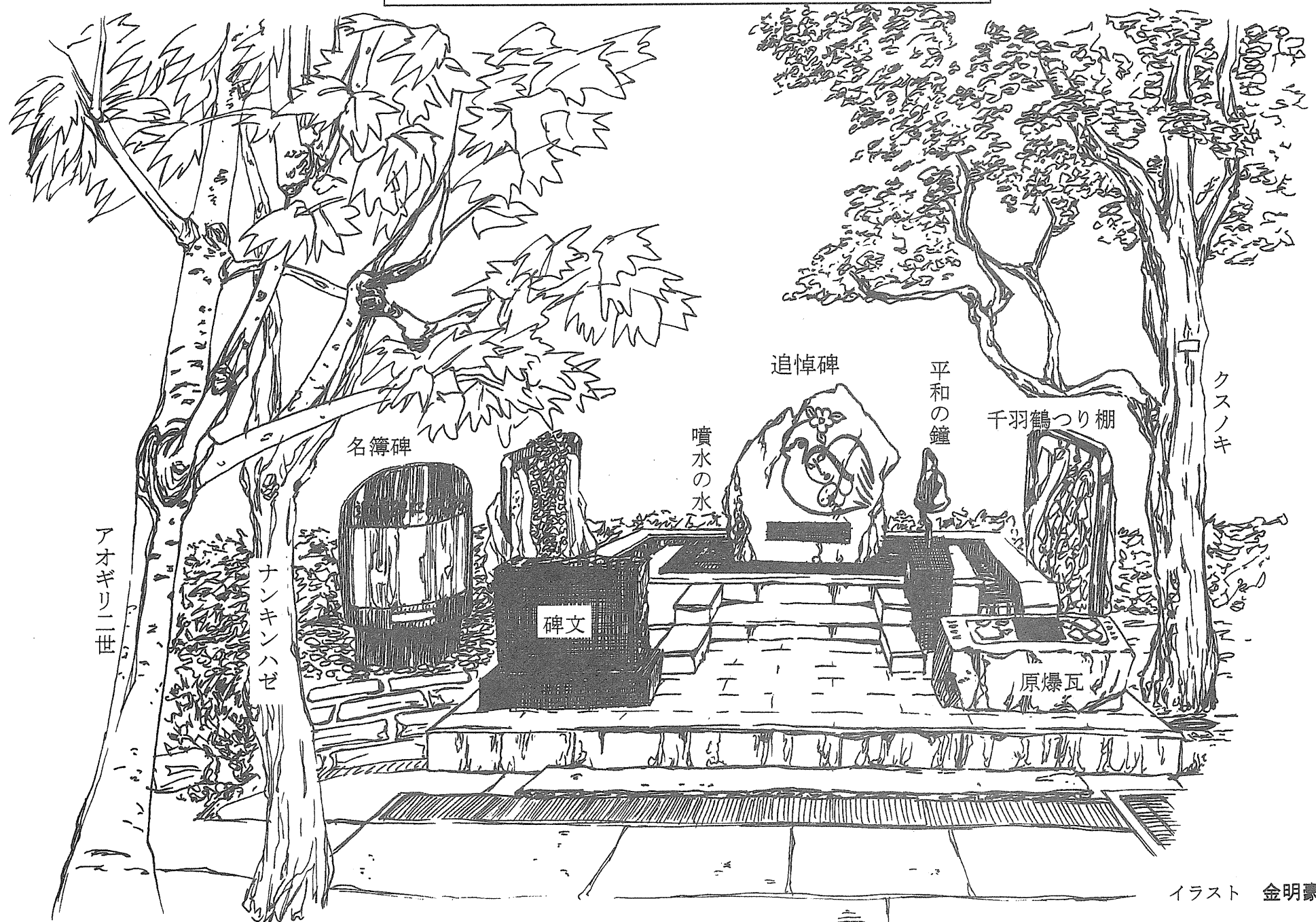
8月15日の敗戦記念日には、区長をはじめおおぜいの区役所の職員たちは、バスでこの追悼碑を訪れ、平和への誓いを新たにされています。

この追悼碑は、成長する碑と呼ばれています。原爆瓦、平和の鐘、広島・長崎の木、噴水、被爆アオギリ二世、名簿碑と、年ごとに加えられていくからです。

外国から訪れる人々も少なくありません。この追悼碑はまるでいきているかのように、多くの人々との新しい平和への出会いを作っているのです。



江戸川原爆犠牲者追悼碑



鳩になって

—江戸川・被爆者の証言 第5集

二〇一一年七月十七日発行

編集・発行／江戸川原爆犠牲者

追悼碑の会

代表・加藤 進 関 康道

編集委員／岡田隆法 小田美智子

小畑美智子 銀林美恵子

小林 功 高比良 毅

西本宗一 藤居阿紀子

丸 宗市

発行所／

追悼碑の会事務局

印刷所／

有限会社 牧場印刷

定価 500円

愛子

江戸川原爆犠牲者追悼碑の会・編